

九州縦貫自動車道関係  
埋蔵文化財調査報告

—XVI—

福岡県鞍手郡若宮町所在遺跡群の調査

1977

福岡県教育委員会

九州縦貫自動車道関係  
埋蔵文化財調査報告

—XVI—

福岡県鞍手郡若宮町所在遺跡群の調査

1977

福岡県教育委員会

## 序

本書は、九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告のなかでも特異な報告の1つであります。埋蔵文化財と言えば、縄文時代・弥生時代・古墳時代と言うところが、ごく一般的であります。一方、中世関係の城砦等の調査報告も近年、増加しつつあります。本県でも同様ですが、本書では文献との照合がわずかながら可能な資料を調査出来たことが特筆されます。しかし歴史学における文献のあつかいには多分に問題を含む内容と考えますが、一応の成果として刊行に踏みきった幸いです。本書の刊行にあたって、調査に協力して頂いた地元及び、日本道路公団等関係者各位に対して深くお礼申し上げますとともに、本書を通じて文化財についての理解を深められんことを祈りつつ、序といたします。

1977年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森田 實

## 例 言

1. この報告書は、九州縦貫自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行った事前調査のうち、昭和49年度に発掘した福岡県鞍手郡若宮町所在の遠園遺跡・茶臼山城跡・茶臼山遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託事業として、福岡県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆はつぎのとおりである。

I	栗原和彦
I-1	上野精志
I-2	上野精志・亀井明德・森本朝子
I-3	上野精志
II-1・2	松村一良
II-3	栗原和彦
II-4	栗原和彦・松村一良
IV	松村一良
V	栗原和彦
4. 遺物写真の撮影にあたっては、九州歴史資料館の石丸洋氏の協力を得た。
5. 昭和49年度に行った九州縦貫道関係の調査は、主として山本文和主事と、栗原和彦・石山勲・酒井仁夫・副島邦弘・川述昭人・上野精志・兒玉真一・中間研志・池辺元明各技師が担当した。
6. 本書の編集は、栗原・上野及び松村一良が担当し、上野が総括した。

# 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—XVI—

## 福岡県鞍手郡若宮町所在遺跡群の調査

### 目 次

	頁
<b>I はしがき</b>	
1. 調査の経過	1
2. 尾園・茶臼山城跡の時代的背景	2
(1) はじめに	2
(2) 『筑前要領大友家戦史』に登場する群雄	2
(3) 『筑前要領大友家戦史』に見える大友宗麟の鞍手攻略	6
(4) その他の資料	8
(5) 『筑前要領大友家戦史』の天文11年の合戦について	8
<b>II 遠園遺跡の調査</b>	
1. 調査の経過	11
2. 調査の内容	12
(1) 遺 構	12
(2) 遺 物	27
3. 小 結	53
<b>III 茶臼山城跡の調査</b>	
1. 調査の経過	55
2. 調査の内容	55
3. 出土遺物	56
4. 小 結	61
<b>IV 茶臼山遺跡の調査</b>	
1. 調査の経過	63
2. 調査の内容	63
3. 小 結	75
<b>V おわりに</b>	77

# 図 版 目 次

## 遠 園 遺 跡

本文対照頁

PL. 1	遠園遺跡・茶臼山城跡・茶臼山遺跡航空写真 東南から(公園提供) ……	2
PL. 2	(1) 遠園遺跡遠景 北から(上野精志撮影) ……	12
	(2) 遠園遺跡全景 西から(上野撮影) ……	12
PL. 3	(1) 遠園遺跡第1号・第2号・第3号独立柱建物 北から(上野撮影) ……	15
	(2) 遠園遺跡第1号・第2号・第3号独立柱建物 東から(上野撮影) ……	15
PL. 4	(1) 遠園遺跡第1号・第2号独立柱建物 北から(上野撮影) ……	15
	(2) 遠園遺跡第3号独立柱建物 北から(上野撮影) ……	17
PL. 5	(1) 遠園遺跡第4号独立柱建物 北から(上野撮影) ……	17
	(2) 遠園遺跡第4号独立柱建物 東から(上野撮影) ……	17
PL. 6	(1) 遠園遺跡西半全景 南から(上野撮影) ……	17
	(2) 遠園遺跡第5号・第6号・第7号独立柱建物 南から(上野撮影) ……	19
PL. 7	(1) 遠園遺跡第5号・第6号独立柱建物 南東から(上野撮影) ……	19
	(2) 遠園遺跡第7号独立柱建物 北から(上野撮影) ……	20
PL. 8	(1) 遠園遺跡第1号土塼 北から(上野撮影) ……	21
	(2) 遠園遺跡第2号土塼 北から(上野撮影) ……	23
PL. 9	(1) 遠園遺跡第3号土塼 北から(上野撮影) ……	23
	(2) 遠園遺跡第4号土塼 南から(上野撮影) ……	23
PL. 10	(1) 遠園遺跡第5号土塼遺物出土状態1 東から(上野撮影) ……	23
	(2) 遠園遺跡第5号土塼遺物出土状態2 東から(上野撮影) ……	23
PL. 11	(1) 遠園遺跡第5号土塼 東から(上野撮影) ……	23
	(2) 遠園遺跡第6号土塼遺物出土状態1 北から(上野撮影) ……	25
PL. 12	(1) 遠園遺跡第6号土塼遺物出土状態2 北から(上野撮影) ……	25
	(2) 遠園遺跡第6号土塼 西から(上野撮影) ……	25
PL. 13	(1) 遠園遺跡土塼墓 西から(上野撮影) ……	25
	(2) 遠園遺跡土塼墓出土遺物 (上野・石丸洋撮影) ……	34
PL. 14	遠園遺跡第1号・第2号・第3号土塼出土土器 (上野撮影) ……	27
PL. 15	遠園遺跡第5号土塼出土土器 (上野撮影) ……	30

PL. 16	遠國遺跡第6号土質出土土器 (上野撮影) .....	32
PL. 17	遠國遺跡出土土器1 (上野撮影) .....	35
PL. 18	遠國遺跡出土土器2 (上野撮影) .....	36
PL. 19	(1) 遠國遺跡出土土器3 (上野撮影) .....	39
	(2) 遠國遺跡出土土器の足 (石丸撮影) .....	39
PL. 20	(1) 遠國遺跡出土陶磁器1 (石丸撮影) .....	41
	(2) 遠國遺跡出土陶磁器2 (石丸撮影) .....	41
PL. 21	(1) 遠國遺跡出土陶磁器3 (石丸撮影) .....	41
	(2) 遠國遺跡出土陶磁器4 (石丸撮影) .....	41
PL. 22	遠國遺跡出土陶磁器5 (石丸撮影) .....	41
PL. 23	遠國遺跡出土陶磁器6 (石丸撮影) .....	41
PL. 24	遠國遺跡出土陶磁器7 (石丸撮影) .....	41
PL. 25	(1) 遠國遺跡出土陶磁器8 (石丸撮影) .....	41
	(2) 遠國遺跡出土陶磁器9 (石丸撮影) .....	41
PL. 26	遠國遺跡出土陶磁器10 (石丸撮影) .....	41
PL. 27	遠國遺跡出土陶磁器11 (石丸撮影) .....	41
PL. 28	遠國遺跡出土陶磁器12 (石丸撮影) .....	41
PL. 29	(1) 遠國遺跡出土陶磁器13 (石丸撮影) .....	41
	(2) 遠國遺跡出土陶磁器14 (石丸撮影) .....	41
PL. 30	(1) 遠國遺跡出土陶磁器15 (石丸撮影) .....	41
	(2) 遠國遺跡出土陶磁器16 (石丸撮影) .....	49
PL. 31	(1) 佐賀県神埼郡三田川町目達原稻荷塚古墳出土青磁 (石丸撮影) .....	43
	(2) 福岡市和白7号土塚墓出土青磁 (石丸撮影) .....	44
PL. 32	佐賀県杵島郡江北町門前古墳出土青磁 (石丸撮影) .....	44
PL. 33	(上) 遠國遺跡出土石鐮 (上野撮影) .....	52
	(中) 遠國遺跡出土磁石 (石丸撮影) .....	52
	(下) 遠國遺跡出土刀子 (石丸撮影) .....	52

### 茶白山城跡

PL. 34	茶白山城跡・茶白山遺跡航空写真 東北から (酒井仁夫撮影) .....	55
PL. 35	(1) 茶白山城跡・茶白山遺跡航空写真 東から (酒井撮影) .....	55
	(2) 茶白山城跡空濠部航空写真 西から (酒井撮影) .....	56

PL. 36	茶臼山城跡土塁・空壕部発掘前の状況 東から (松村一良撮影) ……………	56
PL. 37	(1) 茶臼山城跡Aトレンチ西壁土層断面 東から (松村撮影) ……………	56
	(2) 茶臼山城跡Eトレンチ西壁土層断面 東から (松村撮影) ……………	56
PL. 38	(1) 茶臼山城跡Cトレンチ西壁土層断面 北から (松村撮影) ……………	56
	(2) 茶臼山城跡Bトレンチ内蔵骨器出土状況 西から (松村撮影) ……………	56
PL. 39	茶臼山城跡出土遺物の主要なもの (酒井・上野撮影) ……………	56
PL. 40	(1) 茶臼山城跡出土土師器 (石丸撮影) ……………	56
	(2) 茶臼山城跡出土白磁碗 (石丸撮影) ……………	59
PL. 41	(1) 茶臼山城跡出土青磁碗A類 (外面) (石丸撮影) ……………	59
	(2) 茶臼山城跡出土青磁碗A類 (内面) (石丸撮影) ……………	59
PL. 42	(1) 茶臼山城跡出土青磁碗A類 (石丸撮影) ……………	59
	(2) 茶臼山城跡出土青磁碗B類 (石丸撮影) ……………	59
PL. 43	(1) 茶臼山城跡出土青磁碗C類 (石丸撮影) ……………	59
	(2) 茶臼山城跡出土青磁碗C類 (石丸撮影) ……………	59
PL. 44	(1) 茶臼山城跡出土青磁碗B類と国産陶器の内面 (石丸撮影) ……………	59
	(2) 茶臼山城跡出土青磁碗B類と国産陶器の外面 (石丸撮影) ……………	59

### 茶 臼 山 遺 跡

PL. 45	(1) 茶臼山遺跡第1号住居跡遺物出土状況 東から (松村撮影) ……………	63
	(2) 茶臼山遺跡第1号住居跡 東から (松村撮影) ……………	63
PL. 46	茶臼山遺跡出土土器 (酒井・上野撮影) ……………	65
PL. 47	(1) 茶臼山遺跡第1号箱式石棺墓 西から (松村撮影) ……………	67
	(2) 茶臼山遺跡第1号箱式石棺墓石蓋撤去後の状況 西から (松村撮影) 67	
PL. 48	(1) 茶臼山遺跡第1号箱式石棺墓埋土排土後の状況 西から (松村撮影) 67	
	(2) 茶臼山遺跡第1号箱式石棺墓墓表掘り方 西から (松村撮影) ……………	67
PL. 49	(1) 茶臼山遺跡第2号箱式石棺墓 西から (松村撮影) ……………	69
	(2) 茶臼山遺跡第2号箱式石棺墓石蓋撤去後の状況 西から (松村撮影) 69	
PL. 50	茶臼山遺跡第1号・第2号石蓋土壌裏・第1号木棺墓 西から (松村撮影) 69	
PL. 51	(1) 茶臼山遺跡第1号石蓋土壌裏石蓋撤去後の状況 西から (松村撮影) 69	
	(2) 茶臼山遺跡第2号石蓋土壌裏石蓋撤去後の状況 西から (松村撮影) 70	
PL. 52	茶臼山遺跡出土遺物 (酒井・上野撮影) ……………	73



# 挿 図 目 次

本文対称頁

- Fig. 1** 天文11年の合戦の城跡分布状況図 (縮尺1/50,000) (栗原和彦作成) … 2  
**Fig. 2** 遠圃・茶臼山遺跡, 茶臼山城跡周辺地形図 (縮尺1/5,000)  
 (伊東登美子製図) … 2

## 遠 圃 遺 跡

- Fig. 3** 遠圃遺跡地形図 (縮尺 1/1,000) (伊東製図) ……12  
**Fig. 4** 遠圃遺跡第1号・第2号掘立柱建物実測図 (縮尺1/60)  
 (上野精志・高田一弘・内田始実測, 上野製図) …15  
**Fig. 5** 遠圃遺跡第3号掘立柱建物実測図 (縮尺1/60)  
 (上野・高田実測, 上野製図) …17  
**Fig. 6** 遠圃遺跡第4号・第5号掘立柱建物実測図 (縮尺1/60)  
 (上野・小味山ゆり実測, 上野製図) …17  
**Fig. 7** 遠圃遺跡第6号掘立柱建物実測図 (縮尺1/60)  
 (上野・小味山実測, 上野製図) …19  
**Fig. 8** 遠圃遺跡第7号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)  
 (上野・小味山実測, 上野製図) …20  
**Fig. 9** 遠圃遺跡第1号土塼実測図 (縮尺1/40) (上野・内田実測, 上野製図) …21  
**Fig. 10** 遠圃遺跡第2号・第3号・第4号土塼実測図 (縮尺1/40)  
 (上野・小味山実測, 上野製図) …23  
**Fig. 11** 遠圃遺跡第5号・第6号土塼実測図 (縮尺1/40)  
 (上野・内田・小味山実測, 上野製図) …23  
**Fig. 12** 遠圃遺跡土塼葺実測図 (縮尺1/20) (上野・内田実測, 上野製図) ……25  
**Fig. 13** 遠圃遺跡第1号土塼出土土器実測図 (縮尺1/3・1/4) (上野実測, 製図) 27  
**Fig. 14** 遠圃遺跡第2号土塼出土土器実測図 (縮尺1/3・1/4) (上野実測, 製図) 28  
**Fig. 15** 遠圃遺跡第3号土塼出土土器実測図 (縮尺1/3) (上野実測, 製図) ……29  
**Fig. 16** 遠圃遺跡第5号土塼出土土器実測図 (縮尺1/3・1/4) (上野実測, 製図) 30  
**Fig. 17** 遠圃遺跡第6号土塼出土土器実測図 (縮尺1/3) (上野実測, 製図) ……32  
**Fig. 18** 遠圃遺跡土塼墓出土遺物実測図 (縮尺1/2・1/4) (上野実測, 製図) ……34

- Fig. 19 遠園遺跡出土土器実測図その1 (縮尺1/3) (上野実測, 製図) ……36
- Fig. 20 遠園遺跡出土土器実測図その2 (縮尺1/4) (上野実測, 製図) ……36
- Fig. 21 遠園遺跡出土土器底部拓影図 (縮尺1/3) (上野・伊東手拓) ……36
- Fig. 22 遠園遺跡出土青磁実測図 (縮尺1/3) (亀井明德・森本朝子実測, 製図) 41
- Fig. 23 遠園遺跡出土青磁・白磁実測図 (縮尺1/3) (亀井・森本実測, 製図) …41
- Fig. 24 遠園遺跡第6号土壇出土輸入陶磁実測図 (縮尺1/3)  
(亀井・森本実測, 製図) …41
- Fig. 25 遠園遺跡出土黄釉鉄絵盤実測図 (縮尺1/3) (亀井・森本実測, 製図) …49
- Fig. 26 福岡県朝倉郡朝倉町花嵐山出土の蔵骨器 (亀井実測, 製図) ……49
- Fig. 27 遠園遺跡出土石製品実測図 (縮尺1/4) (上野実測, 製図) ……52
- Fig. 28 遠園遺跡出土石鍋実測図 (縮尺1/4) (上野実測, 製図) ……52

### 茶 白 山 城 跡

- Fig. 29 茶白山城跡・茶白山遺跡全体図 (縮尺1/1,000) ……55・62
- Fig. 30 茶白山城跡A・C・Eトレンチ土層断面図 (縮尺1/40)  
(高田・松村一良・伊東実測, 松村製図) …56
- Fig. 31 茶白山城跡H・Iトレンチ上層断面図 (縮尺1/40)  
(栗原和彦・松村・伊東実測, 松村製図) …56
- Fig. 32 茶白山城跡出土土師器実測図 (縮尺1/2) (栗原実測, 製図) ……56
- Fig. 33 茶白山城跡出土蔵骨器出土状況図 (縮尺1/20) (松村実測, 製図) ……56
- Fig. 34 茶白山城跡出土土器実測図 (縮尺1/3) (松村・伊東実測, 製図) ……59
- Fig. 35 茶白山城跡出土古銭拓影図 (縮尺1/1) (松村手拓) ……60

### 茶 白 山 遺 跡

- Fig. 36 茶白山遺跡・遺構配置図 (縮尺1/200)  
(栗原・高田・松村・伊東実測, 松村製図) …62
- Fig. 37 茶白山遺跡第1号住居跡実測図 (縮尺1/40) (松村実測, 製図) ……64
- Fig. 38 茶白山遺跡出土土器実測図 (縮尺1/4) (松村・伊東実測, 製図) ……66
- Fig. 39 茶白山遺跡第1号箱式石棺墓実測図 (縮尺1/20) (松村実測, 製図) ……66
- Fig. 40 茶白山遺跡第2号箱式石棺墓実測図 (縮尺1/20) (伊東実測, 松村製図) 68
- Fig. 41 茶白山遺跡第1号石蓋土壇墓実測図 (縮尺1/20) (栗原実測, 松村製図) 69

- Fig. 42** 茶臼山遺跡第2号石蓋土墳実測図(縮尺1/20) (栗原実測, 松村製図) 70
- Fig. 43** 茶臼山遺跡第1号木棺墓実測図(縮尺1/20) (栗原実測, 松村製図) …71
- Fig. 44** 茶臼山遺跡第1号土墳墓実測図(縮尺1/20) (松村実測, 製図) ……72
- Fig. 45** 茶臼山遺跡第1号土墳実測図(縮尺1/20) (栗原実測, 松村製図) ……73
- Fig. 46** 茶臼山遺跡出土石器実測図(1)(縮尺1/1) (松村実測, 製図) ……74
- Fig. 47** 茶臼山遺跡出土石器実測図(2)(縮尺1/2) (松村実測, 製図) ……74

## 表 目 次

- Tab. 1** 遠國遺跡第1号竪立柱建物計測表(上野精志作成) ……12
- Tab. 2** 遠國遺跡第2号竪立柱建物計測表(上野作成) ……15
- Tab. 3** 遠國遺跡第3号竪立柱建物計測表(上野作成) ……15
- Tab. 4** 遠國遺跡第4号竪立柱建物計測表(上野作成) ……17
- Tab. 5** 遠國遺跡第5号竪立柱建物計測表(上野作成) ……19
- Tab. 6** 遠國遺跡第6号竪立柱建物計測表(上野作成) ……19
- Tab. 7** 遠國遺跡第7号竪立柱建物計測表(上野作成) ……20
- Tab. 8** 遠國遺跡第5号土壇出土輸入陶磁數量表(亀井明德作成) ……48
- Tab. 9** 遠國遺跡第6号土壇出土輸入陶磁數量表(亀井作成) ……48

## 付 図 目 次

- Fig. ①** 遠國遺跡地形図(縮尺1/200) (上野・高田・内田・小味山実測, 伊東製図)
- Fig. ②** 遠國遺跡遺構配置図(縮尺1/200) (上野・高田・内田・小味山実測, 上野製図)

I は し が き

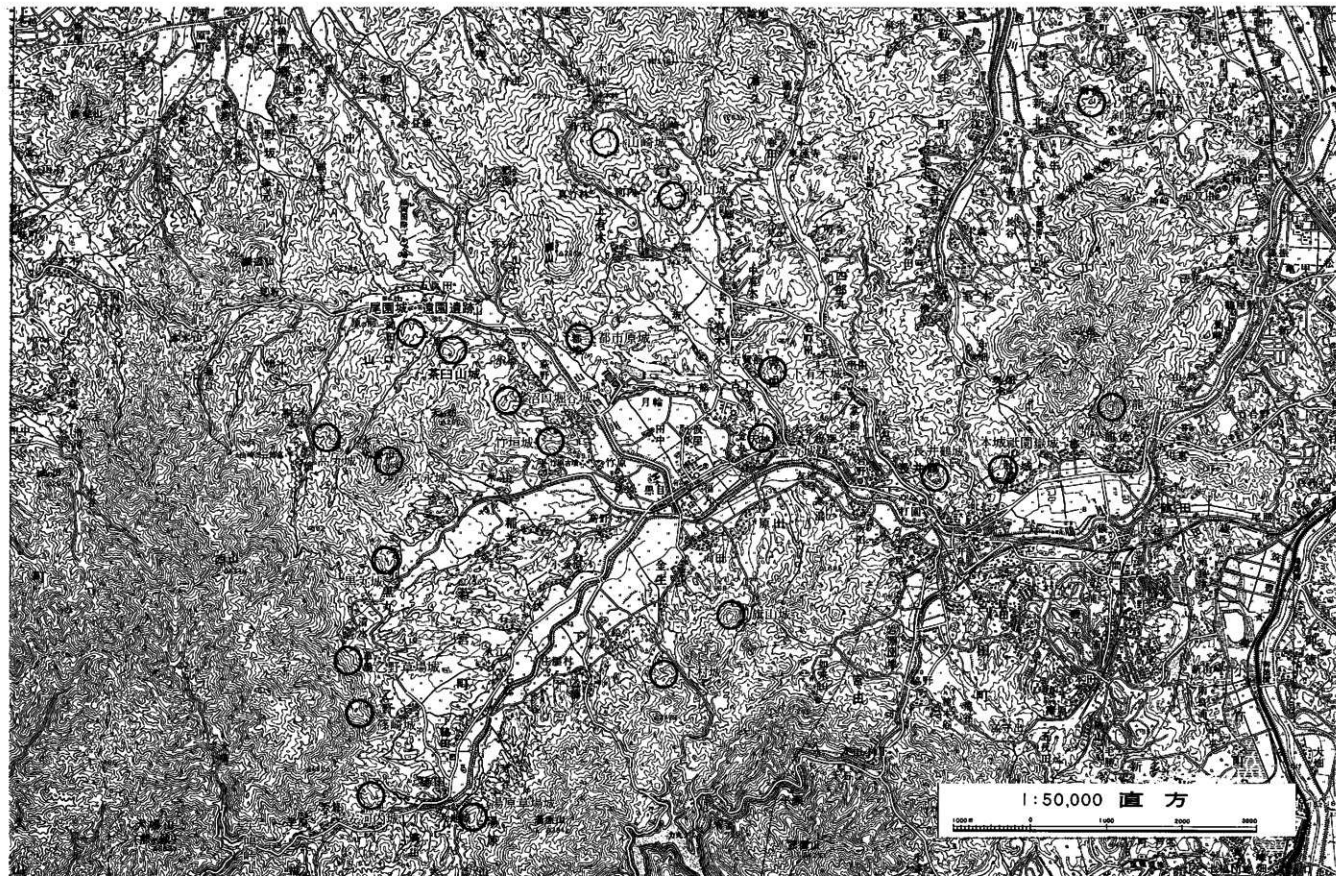


Fig. 1 天文11年の合戦の城跡分布状況図 (縮尺1/50,000)

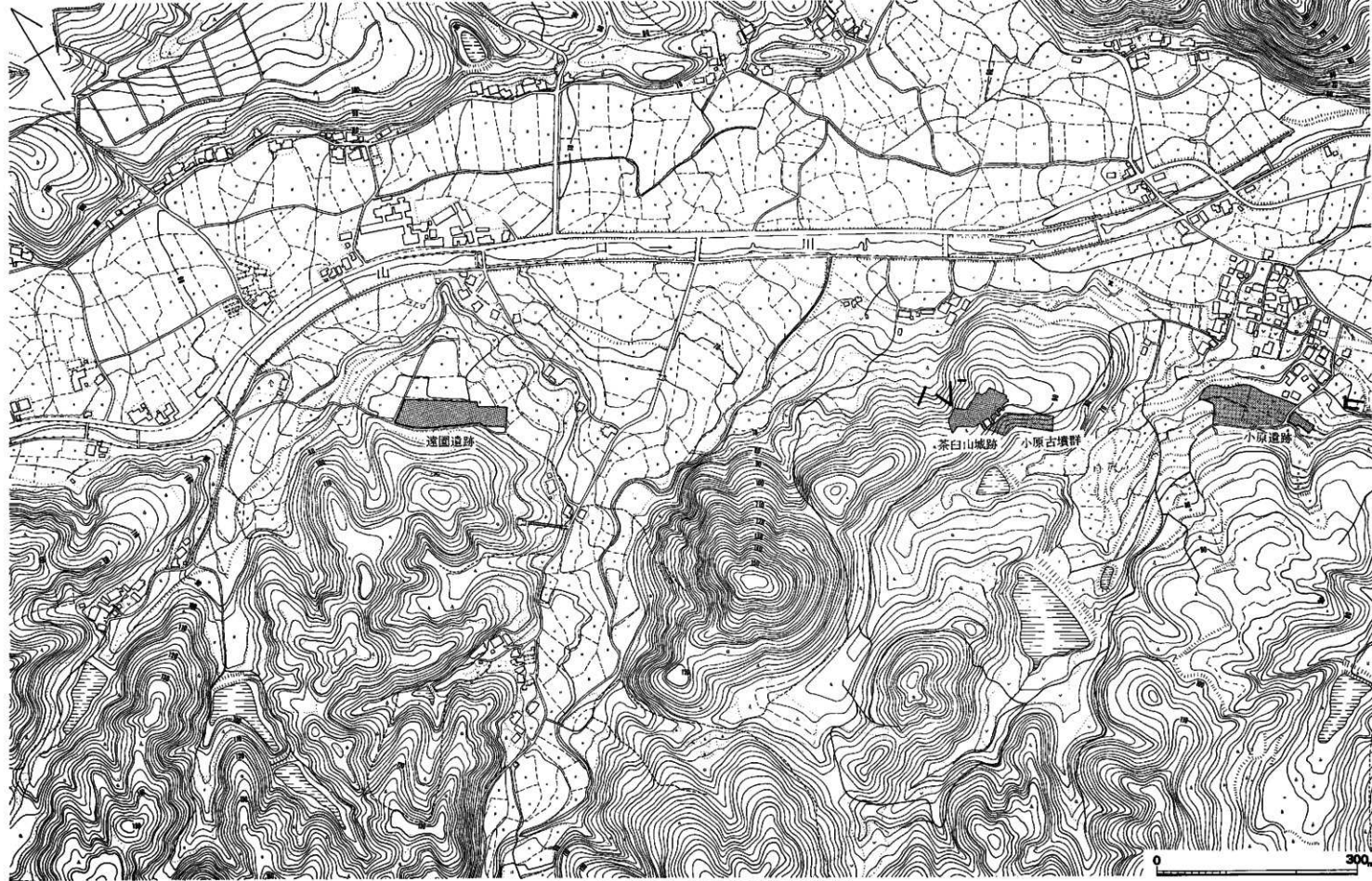


Fig. 2 遠園・茶臼山遺跡，茶臼山城跡附近地形図（縮尺1/5,000）

## I は し が き

## 1. 調査の経過

鞍手郡若宮町・宮田町に係る九州縦貫高速自動車道建設予定地の埋蔵文化財記録保存調査の経過は「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書」に詳しい。ここでは、報告しようとする二つの山城の調査経過の概略について触れるにとどめたい。

## (1) 遠園遺跡

昭和45年の分布調査で遺物散布地として調査計画にあげられた遺跡である。日本道路公団直方工事事務所・担当建設業者・文化課の三者の話し合いによって最優先させる調査地点ときまり同年3月4日に重機を利用してトレンチを入れた結果、遺物の散布ばかりでなく、堀立柱の遺構などあることが確認され4月から本格的な調査を開始した。周辺の遺跡の状況調査や文献の調査が進むにつれて、小字名と「鞍手郡誌」に収録されている「筑前要領大友家戦史」の中に登場する一尾園本城とあるものが一致することや、出土する青白磁類の量と質とがこの山麓の村には、ふさわしくないなどのことがわかってきた。さらに、前書の山口茶臼山城・沼口市原城・竹原竹垣城などは、発掘調査近傍の小丘麓や山頂付近に比定出来るようであり、同書の三十余ヶ所の山城のすべてが「和名抄」で言う鞍手の地（現直方市と鞍手郡内4町）に包括されるものということがわかった。また遺構の時期が戦史に残された時期とはやや異なることもあり、尾園本城そのものとは考えにくい点もあるが、それに関係のある山城の一部としてとりあつかうべきものと考えられる。

## (2) 茶臼山城跡

前書の発見により路線計画地を再度踏査の結果、茶臼山山頂から北にはりだす丘陵上の平坦部に西から東に横断する形で空壕が見い出された。さらに空壕は丘陵の平坦面の東斜面にかかると手前から南に曲っていることもわかり、土塁状の土盛まで残っていることがわかった。

尾園山城跡の例からしてもこの平坦面に堀立柱建物などの存在することが予測されることになった。このため、日本道路公団のこの地区の地図を作成した東洋航空株式会社に茶臼山城の範囲と考えられる部分を指定し地形測量を依頼するとともに伐採作業終了後7月下旬から発掘調査を開始した。

## (3) 茶臼山遺跡

茶臼山城跡の発掘作業により偶然に発見された遺跡で丘陵上の平坦部がなにかの理由で削平をうけていたのに対し路線北半部はそのまま残されていたもので、弥生後期末の住居跡・石棺

墓・石産土墳墓・土墳墓などが発見された。これらの遺構は路線外西北部に拡がっているものと考えられる。

なお、発掘調査の関係者・周辺の遺跡などについては「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ・Ⅷ」に詳しいので割愛させて頂く。

註1 この点については、多分に私見になるが大内・宗像両氏の対明・対朝鮮交易の量はかなりのものと「室町時代の外交および貿易」〔玉泉太深編福岡県史1地下（1962年）〕という一文などからも考えられ、正式の交易以外に倭寇などのうしろだてがあったことも想像出来るので碧の城兵遣の使用したもので、これらの青・白磁類が用いられたと考えたい。

## 2. 尾園・茶臼山城跡の時代的背景

### (1) はじめに (Fig. 1・2, PL. 1)

15世紀の応仁・文明の乱が終ったとき、北部九州では室町幕府が征西將軍官に対抗して作った九州探題や鎌倉時代以来の太宰少武の官職に代々補任されてきた少武氏の權威はうすれて、周防・長門・豊前の守護大名大内氏、豊後の守護大名大友氏、筑前・肥前に少武氏・龍造寺氏松浦氏など戦国の群雄が割拠する状況が続いた。「筑前要領大友家戦史」は、このように群雄割拠の状況の中で、群雄が相互に領土を蚕食し合った一場面を伝えている。

このなかの合戦の一場面として、若宮町の小字名として残る尾園城・茶臼山城・都地原城が登場した。これらの群雄が、筑前の國鞍手郡の地で領地をめぐる、抗争し合った状況を前書によって紹介する前提として、その場に、登場する群雄の勢力・家系などから探ってみたい。

### (2) 「筑前要領大友家戦史」に登場する群雄

大友氏 大友氏は、鎌倉時代頼朝の庶子大友能直が、肥後・筑後・豊後の守護として補任された。少武氏・島津氏とならぶ九州の三名家の一つである。しかし、南北朝の頃から家の内では、家督権の問題でゆれ、外では、征西將軍官の downward 以来、右に左にゆれながら、保身に精一杯の状況であって、家の力をのばすような華々しい動きは、永享年間持直（12代）が少武満貞と協力して大内盛見を攻滅し豊前・筑前の守護職を合わせた時ぐらいのものである。ところが、盛見は、豊前・筑前の守護職だけでなく、幕府御料所の代官であった。大内持世等が、幕命を率じ持直を攻め姫岳（臼杵市・津久見市の境）を陥落させている。これより以前に、幕府は、11代親著の子親綱を大友家の家嫡とし豊後守護職を安堵していた。これは家督の抗争を利



用した幕府の權威の一端を示すものであり、大友家自体も自力で家督をきめる力がなかったことによるらしい。

その後にも、政親(16代)・義右(17代)父子の不和があり、家臣もこの二つに分かれて抗争が続き、政親は一族筑前立花城の立花氏をたよって脱走するが途中大内の家臣杉氏に捕えられ殺された。義右の妻が大内義興の女であったためであるが、結果として子供に殺されたこととなり、二つに分かれた家臣達の争いも両方で500人にもおよぶ人が討たれたと言われている。

このような状況下の大友家を復興させたのは義右の伯父・親治(18代)で内乱を平定し、將軍として足利義澄を支持し豊前国守護職を掌中にし、その子義長に家督を譲った。これに対抗して大内義興は、將軍義隆をおすことで大友家の家督に13代親綱の子大聖院宗心をあてることにより、自分の豊前国守護職が回復すると考え策動した。ところが大内家でも家臣杉武明は、義興を廃し弟尊光を家督にと謀り、陰謀が暴露され杉は自刃、尊光は大友に頼った。これに対して、大聖院宗心は大内に走り義興を頼って豊後国の奪取をねらった。この結果、大内・大友家の戦が豊前の国でひらかれた。ところが將軍義隆は、細川に追放され義興を頼って山口に明応9年(1500年)のがれてきた。將軍義澄は、大友・大内尊光・少弐氏・肥後の菊池氏等に義隆をうたせた。このために、九州北部の各国内は戦国の様相を呈することとなった。

文龜元年(1501年)大友義長は、將軍義澄によって豊後・筑後・豊前3国の守護職を安堵され、大内義興は筑前のみを保つこととなるが、筑前にも大友氏に助力された少弐資元が奪回をはかっていて戦乱はくり返された。

義長は、長期にわたる内紛をかえりみて条規をつくり嫡子単相統制などをうちだし、家臣たちとの間に封建的な主従関係を確立した。義隆が義長の後をつぎ大内義興との間に一度は和平が成立したが天文元年(1532年)、大内義興が死に後を嗣いだ義隆が大友所領を横領するや豊筑に出兵し宇佐方面で攻防戦がはじまる。この戦は、大友氏の勝利となるが、大内氏も家臣杉隆連が少弐資元を討って筑前を平定した。天文5年(1536年)將軍義隆の仲介で大内・大友との和議が成立した。天文12年(1543年)肥後守護職となり、鎌倉初期の後3ヶ国の勢力となった。その後嗣者が義隆ことキリシタン大名大友宗麟である。宗麟は、天文19年(1550年)「二階崩れ変」をへて、大友家の家督を継ぎ天文20年(1551年)大内義隆の死により自分の弟晴英を大内氏に入れ、大友家の躍進の時代となった。永禄2年(1559年)には、両筑・両豊・両肥の守護職を手中にするのである。

**大内氏** 大内氏は百済齊明王の第3王子麻理太子の子孫を名のる。姓氏家系辞書には、満盛の寿永年間(1183-1185)に大内介と始めて号したとあり、別書には、元暦二年(1185)満盛が武家となって平家追討の軍功で長門国を賜わり以前からの周防の国を合わせて二つの守護職を得たと言われている。以後外交交易等で着々と力をつけ、6代後の弘世の時には周防・長門・石見の守護職を

手中にしている。大内氏が北部九州に侵攻してくるのは、この大内弘世のころで文中3年(1374年)には豊前の守護職を得、永享年間には少貳氏を太宰府から追い出し筑前もその掌中にした。

大内氏の筑前進出は2つの目的があったと言われる。第1は、当時、対明・対朝鮮貿易の拠点であった博多を支配することであった。博多の町は文明年間から天正年間にかけて20,000から50,000人の人がおりすでに中国・四国・九州の都市のうちでもっとも大きな都市の1つであったようだ。その第2の目的は、少貳氏を討伐することにより政治の中心地太宰府を手中にし九州の武家の惣領的な地位を天下に明らかにし、そのために自らは大宰大貳の官職を得ようとした。この大内がしだいに中央の政界に進出をはじめたのは、教弘(28代)・政弘(29代)の頃からのようである。政弘は文明10年(1478年)少貳氏を追い出した後、博多に滞在して経営に力をいれるとともに少貳氏の名馬を將軍義尚に献上して、大宰大貳を所望するほどの接近ぶりをしてしめしている。また、義興(30代)は明応6年(1497年)家督を嗣ぐが、勢を何度も盛りかえす少貳氏を太宰府に攻め負し、筑前の支配を確立したが、明応9年(1500年)將軍足利義龍が管領細川におかれて義興のもとにくるや、大内・大友両家の家督の争いもからまり、天文元年(1501年)少貳氏は大友氏と筑前奪回を計り、大友は、義隆方についた肥後の菊池との戦鬪となるなど大戦乱になる。この結果大内は九州では筑前一國の保持がやっとの状況が続くこととなった。やゝ抗争の鎮まった永享5年(1508年)義興は義龍を率じて入京し、足利義隆を追放し義龍を將軍職に復させ、自分は管領となり豊前の守護職も回復している。この頃が大内家の隆盛の時期であった。享祿3年(1530年)義興の死により義隆が家督を嗣ぐこととなった。義隆は同年一族の筑前守護代杉興連に肥前の少貳氏を攻めさせたが、大友・龍造寺・鍋島等によって撃退され、逆に杉は太宰府岩屋城で負けた。義隆は、杉の応援に一族の陶興房を天文2年(1533年)に送り肥前まで攻め込むが連合軍に負けている。義隆は天文3年みずから大軍を率いて少貳の討伐にあたり、龍造寺を襲えらせ筑前の地を回復した。天文5年には義隆は大宰大貳の位を受け、天文7年(1538年)に筑前国内の旧大友領を返すことで大友氏と和睦した。大友義隆は天文12年幕府に先年の筑前の所領を返したとき、博多の興浜口の所領が除れていたことを訴えている。貿易港を義隆としては手ばなせなかったものであろう。こうして大内・大友の対立が再燃し、義隆は天文20年(1551年)家臣陶隆房により攻められ自害し、大内氏は九州支配から全面的に後退する。

**宗像大官司氏** 三柱の女神を奉斎する神職の家で、古代に於ては宗像君水沼君が奉斎していた。延暦19年(800年)宗像郡大領と宗像神主との兼任が朝廷によって停止され以後祭政分離された神主は社務に専念することとなった。天元2年(979年)官符によって宗像氏能が大官司職に就任している。この氏能は、宗像大官司家の系図では第4代の大官司職となっている

がそれ以前の3代、清氏一氏男一氏世は粉飾によるものと言われ信憑性を欠く。以後、大官司職は宗像氏代々に間に継承される。大官司職としての宗像氏も時代の風潮に従って、皇室御領から大宰大貳平頼盛の領家職に変わってゆく。頼朝は、平家没官領であるにもかかわらず大官司職と社領の地頭職を大官司氏實に安堵した。ために皇室を仰ぎ祭祀に奉仕する神官であるとともに頼朝の御家人となり武力もそなえることとなった。かくて、文永・弘安の役には少武氏に従って従軍し、建武中興でも社領を安堵され、尊氏が下向すれば居館に迎えるといった風であり、以後北党に従って保身を計っている。これは少武氏が太宰府に来て以来のことで少武氏の進退のまゝに行動していたことによるらしい。

室町時代に、和寇の根拠地の一つに「内外大島」があり、大島、沖の島と推定されている。宗像氏はこれを統制する位置を得ていたものようだ。なかでも大官司氏経は応永31年(1424年)李氏朝鮮の莊祖王に使節を派遣し、これ以後、氏俊・氏正・氏舞等の大官司がこれにならない氏郷は32回にも及んだという。康正元年(1455年)には歳遣造船の条約ができ宗像氏は一歳一船と定められたが、事実は二船にも三船にもおよんだようだ。航海の神に奉仕し自らもその利益を追求し武力も備えた宗像氏が、少武氏の衰退とともに大内氏の九州侵攻と結びつくのは必然のことであった。大内弘世の女を大官司氏重の室に、氏郷・氏国も大内氏と婚姻関係を結んだので信頼は最も厚くなった。天文元年(1532年)大友義隆の筑前侵攻には防戦に最も努めこれを挫折させた。

大内義隆の没後も陶晴賢の推す氏貞が大官司となり、大友に組し、毛利に組したが、天正14年(1586年)氏貞の死により宗像大官司の宗家は絶えた。

#### 参 考 文 献

1. 佐藤道一「南北朝の動乱」日本の歴史9 中央公論社(1965)
2. 永原慶二「下廻上の時代」日本の歴史10 中央公論社(1965)
3. 杉山 博「戦国大名」日本の歴史11 中央公論社(1965)
4. 佐々木銀彌「室町幕府」日本の歴史13 小学館(1975)
5. 永原慶二「戦国の動乱」日本の歴史14 小学館(1975)
6. 渡辺澄夫「大分県の歴史」県史シリーズ44 山川出版社(1971)
7. 元禄十年天野義重編、陣山殿校注「応永戦覧」(1975)
8. 太田 亮「姓氏家系辞書」新人物往來社(1971)
9. 伊東尾四郎編「宗像郡誌」上海名著出版復刻本(1973)
10. 鞍手郡教育会編「鞍手郡誌」上海名著出版復刻本(1972)
11. 宗像神社復興期成会編「宗像神社史」上・下巻(1961)

以上の文献を参考としたが大友家関係は、文献6・3を主に、大内家関係は文献7・6・3に宗像家関係は文献11・9を主として利用させて頂いた。

## (3) 『筑前要領大友家戦史』に見える大友宗麟の鞍手の攻略

于時天文11年壬寅春3月15日豊後國大友宗麟子息左近將監統筑前を平定せんと其勢13,000騎豊後國府を出陣す、先ず第一に鞍手郡に押入り、鷹取城主大内家の幕下たるにより、一番に攻め取らんと評定し、四方より取り巻き、要害堅固の鷹取城を無二無三に攻め立つ、城中必死となり、大木大石雨の如く打掛くれば、寄手も疵を蒙り、死傷多く喰蛆の山城にて一時に落城とも見へざりし、然れども外に救兵もなく、頗る危し、先陣十時彌津守500餘騎にて、鷲智山の峰に昇り、城中を見降し、谷を隔り門鐵炮にて一時に城中に放ちければ、城兵も之に敵し兼ね狼狽す、此時に乘じ、四方より攻め立て、二の九大手より打破り、城中に押入り陣屋に火を放ちければ、折柄の強風に猛火盛にして、一面の火中となり、茲に愈々落城、城主毛利綱實も生捕れ降伏す、(中略)是より大友勢は遠賀郡香月畑の城を攻め、若宮谷の小城を攻め、同郷を根城とし、宗像に打入るは地利あるを以て、木瀬瀬・植木より王方へ引上げ、多賀神社を焼亡す、鶴田村の内鶴田ヶ原にて陣を揃へ、若宮郷宮永城は高山にて、要害喰蛆の名城なりと聞ゆ、將師智略なき時は、味方軍卒を亡す事疑れ良將の恥る處なり、依て先づ宮永城に軍使を派し、大友家筑前の亂を平治せんため、大軍を以て出陣したるは、専ら宗像家代々神職の身分として武事に携はり、隣郡に押入り、他の城地を攻め取り、人民の苦しみ一方ならず、依て大友家は、國家人民の爲め、筑前を顧する為なり、豈人靈を損害せんや、大友家は、古昔頼朝公より、九州の守護職命命を蒙る家なれど、近來武威衰へ、中國大内家に領國を領され、剩へ島津・龍造寺・秋月・宗像・草場・原田の輩天下の亂に乗じ、弱きを亡し、萬民塗炭の苦を受け、一日も安き心なし、依て出陣す、其國家を奪ふにあらず、宗像家は、大友家と舊縁と云ひ、亡亡すにあらず、速に降伏あらば若宮の小城安堵あるべしと、流石戸次丹後守智仁勇の名將にて、殘る所なき使の口上、若宮城も打寄り、評定區々なり、依りて白山に使を遣し、氏禮に大友の口上申述べれば、白山にても宗像の老臣評定しけるも、宗像家は清氏親王より七十四世、連絡たる神職、豈大友に降るべき謂なし、大友と戦ひ、亡ぶとも降参は思もよらずと、依て、若宮の諸城は必死の合戦致すべしとの申付也、依て、此旨大友勢に返答す、大友家は茲に軍勢を配備す。

此時上鞍手小城々代は左の通り

一. 吉川下村城主	音藤四郎	一. 六郎丸城	石川代城
一. 金生旗山城主	入田勝全入道	一. 湯原草場城主	松井越後守
一. 脇田熊峰城代	黒瀬越後守	一. 乙野森崎城代	毛利左右衛門
一. 乙野草場城代	藤豊後守	一. 脇田安河内城代	森崎五郎
一. 黒丸城代	安永越中	一. 沼口堀谷城代	本田備中守
一. 竹原竹垣城代	音藤飛彈守	一. 平浦山城代	吉田三九郎

一、 沼口市原城代	安武七郎左衛門	一、 山口茶臼城代	森備中守
一、 山下城代	奥主膳正	一、 尾園本城	尾園加賀守
一、 山下中尾城代	金崎大八郎	一、 寺山城代	唐防右京進
一、 大谷高丸城代	吉原源九郎	一、 岡田城代	占部十郎
一、 畑黒巢城代	峯壯三郎	一、 宮永城主	吉田掃部介貞昌
一、 中山城代	跡部安藝守	一、 吉野城主	竹肥後守
一、 頓野雲取城主	麻生鎮益	一、 本城祇嶽城主	杉太郎右衛門
一、 龍徳龍ヶ岳城主	杉權頭連並十郎	一、 同稻付城主	石見主計ノ助
一、 山崎村城代	井上禪正	一、 宮田村城代	爪生兵庫
一、 長井鶴城代	榎本岩見守	一、 金丸城代	斎藤河内守
一、 下有木城代	有吉五郎右衛門	一、 内山城代	古野神九郎
一、 上有木城代	石川國幸ノ介		

宮永城は若宮二十六ヶ村の本城にして、1,300騎あり、其他の小城に200~300騎の小勢あるも、大友の大軍を防ぐ事下に一も勝つ事なし、只宗像より援兵来る事あらば、勝利も如何んと、中國よりの航渡を待つのみ、粕屋郡立花城代立花鑑義・御笠郡岩屋城代高橋三河守鑑種は、自身の本城を守り、兩家の士率1,500騎、高橋家より萩尾大貳を大將とし、立花表よりは眞野三河守大將にて、鞍手の山口、宗像界・柳原山多武峰見坂道筋を取切り、備を立て、宗像より若宮に援兵の道筋を取切りたり、是兼て大友より謀合せし事なり。

時に天文11年壬寅閏4月21日、大友勢は鍋田ヶ原を立ち、磯光・宮田・長井鶴に押來り、友池の瀬戸口に押來る、若宮の侍兵友池の川を留め、金丸・原田の山際を兵を備へたり、

(中 略)

扱大友勢は金生村界幸山・鑿鏡山に登り、若宮の小城を一時に攻潰し、裸城とし羽翼を去り宮永本城を打ち潰さん軍議也、先づ、山口村七ヶ所の砦は、宗像に隣るより大事の場所なり、吉弘兵庫介、十時斷津1,500騎、沼口の兩城に押寄せ、本田安武城を出て降人となり、夫より山口村茶臼嶽・森備中守が城地に押移り、小原川原より尾筋に登り、四方に取巻き、短兵急に責め上れど、小城ながら城祖の城にて、森・川野・頻りに防戦、300餘騎にて暫く防ぎたるも、勇勢の攻手は、南東の尾筋より城に火を放ち、折柄の強風本丸一面の炎となり、北の谷城祖の標川の岸に落ち、死傷多く、殘兵奥城に入らんと欲するも、谷深く敵軍源太原を取切たれば、残らず討死し、城主備中守手勢50人、辰巳の尾より敵陣に切り入り打死す、川野五郎は、西の尾より述べ出て、西山に隠れたり、夫より、山下の城代奥主膳正弘が備へ籠る下屋敷間尾園の城兵150人にて防ぎけれども、1,500の大軍は四方の谷より登り、本城に火を放ち城兵は西の谷より山嶽き巖丸の城に落行き、殘兵は討死、此戦況本陣に往進す、(中略)(この後、大友軍は小城砦を攻略し本城宮永城も落ちる。)

時に天文11年壬寅閏4月27日の夜半落城し、後の世に残る千草の秋の色音を慕ふ女郎花・桔梗・苧ヤカ年毎に昔語りの例なり。

大友家は、稻光川原に樹並べ、黄金原に兵を引揚げ、人馬の息を休めつゝ、兵糧を整へ、若宮を根城とし、宗像攻めの軍議をなす。

然るに、宮永城攻めの夜、徳徳城主杉禰頭は一旦大友に降伏し、陣中にあり、頼野村雲取城主麻生鑑益、本城村紙園嶽城主杉太郎左衛門と申合せ、平村沼口村界に出陣し、城中守堅固の上塩田大將討死の由を聞き、俄に心變して夜中逃出し、裏切宗像に内通す。兼て大友家より間者を入れ窺知したれば、其旨黄金原本陣に注進す、依て討手として十時攝津の守、矢野長重等3,000餘騎にて沼口川に至り、都市原に引上げ、宗像に逃入らんとするを追打ち、都市原に戦ひ、三家の勢暫く戦ひけるも悉く戦死、杉十郎も既に危きを、家臣荒牧部討死して主人を藩し藤山を経て宗像名残村を差して宗像勢に入るとあり。

#### (4) その他の資料

a【頼野神社傳】天文11年豊後大友之軍勢入郷諸社寺回祿の災○云々

b【横谷貞明記略】天文4年之乙未10月17日、則考多勢を以て永満守表に出張し、鷹取城を攻む  
(中略)

編者日大内氏滅後の郡内の形勢は、大永以後、鞍手の城主にして大友氏に隸せしは、僅に鷹取の毛利吉野の竹野氏にして、他は概ね大内氏に属せしかば、郡内に鷹取少かりしが、大内氏亡びて島津・大友の兩氏鷹を張りて鞍手の天に翔るに至り、諸將の進退に急且つ大なるものあり、諸城主此果累して主を何れの人に定めて膝を屈せんとするか、東鞍の兩城中鷹取は既に大友の手足として孤立し、畑山白木城は大内の股肱たりしも大内氏亡びては孤軍に過ぎずして、家臣等の諫に對し答て曰く……(中略)

而して、杉禰頭連並は島津氏にし松井越後守秀郷は秋月氏に従ひ、宗像氏は毛利家に属し、笠木城を築き、家臣占部越後守宗安をして之を守らしめたり。(後略)

註 (a)・(4)については鞍手郡教育会編「鞍手郡誌」上巻、名著出版復刻本のなかから必要な部分を収録した。なお、郡誌には縦書きで収録されているので横書としたため数字・漢字などに多少の相誤が生じている。

#### (5) 『筑前要領大友家戦史』の天文11年の合戦について

『筑前要領大友家戦史』が、いつ、いかなる人によって書かれたものかさだかでない。ただ、本書に抜粋した部分からだけでも、鞍手郡内(直方市・鞍手郡4町)の地理に<sup>註1</sup>非常に明る人であったことがわかるし、合戦の様子、人名など(なにか原点があったとも思われる。)にくわしく、そう年をへて書かれたものでもあるまい。

内容について若干の検討を加えれば、冒頭の部分「于時天文11年壬寅春3月15日、豊後大友宗麟子息左近将監義統筑前を平定せんと……」の部分がまず疑問になる。通史によれば宗麟は天文20年家督を継ぎこの時22才であったという。とすれば天文11年には12才であったことになる。天文11年に合戦のあったことを信じさせそうな資料が(4)－aにあるので信じるとすれば、子息義統が宗麟その人であって、家督権はまだ父義隆にあったとする解釈の方が妥当ではなからうか。これが正しいとすれば、宗麟が家督を相続して以降大友家が隆盛になり、大友家と言えは宗麟と言われるような状況が生じたために起ったあやまりと理解されよう。また、「先陣十時攝津守500余騎にて、福智山の峰に昇り、弓鐵砲……云々」とあるが、鉄砲がポルトガル船によって日本にもたらされたのは、天文11年とも12年とも言われているので、紛装にすぎないのか。など小さな誤解と思われる部分もあるが、合戦の状況の中に見られる地名が、現在の地名と一致していることや、人名からある程度の宗像・大内の関係を予想させるものがあり興味深い。例えば、山口村茶臼山城の攻撃の場面である。茶臼山の東側には小原川と言う小川があり、西側には礪川という小川がある。いずれも、山口川の支流であり現在でもこの地名を残している。茶臼山の守備兵は、大友方に小原遺跡・小原古墳群（「九州縦貫自動車道路関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ」）の方から攻めこまれ火をはなたれて多数の死傷者を出し、残兵が礪川を渡り尾園城に逃げこむ状況がよくわかる。

また	本城紙園岳城主	杉太郎衛門
	龍徳籠ヶ岳城主	杉櫛頭連並十郎

とある杉氏は大内家とは血を分けた一族であり、鞍手の城々の代表的な立場にあったことが後半の都市原での一件にもひかれ、(4)－bにも、後年島津氏に従った状況がひかれている。

この文献の史的な価値についての批判云々する能力はまったく筆者にはないが上記の合戦の場合の様子や、人名で他の資料と重なるものがあることから、一応、史実を伝えるものと判断したい。また、天文11年という時期については、(4)－aが大友家戦史の記述をうらずける資料となりそうだとということにとどめて、後章で再検討をすることとしたい。

#### (栗原)

注1 鞍手郡教育委員会編「鞍手郡誌」には、この文献の解題が示めされていないので九州歴史資料館倉住靖彦氏を通じて九州大学文学部国史科助手森茂純氏の手をわずらわしたが判明していない。

## Ⅱ 遠園遺跡の調査



## Ⅰ 遠園遺跡の調査

## 1. 調査の経過

遠園遺跡の発掘調査は、1974年（昭和49年）3月4日から5月25日まで実施した。調査団は次のとおりである。

調査担当者	福岡県教育庁文化課技師 同	酒井仁夫 上野精志
調査補助員		高田一弘 内田始 小味山ゆり
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事 頼託	山本文和 因将太

なお、この調査には地元在住各位の協力があつた。

3月4日～3月8日 本調査の事前に遺跡の内容・範囲をより明確にするため重機を用いてトレンチ8本を設けて表土除去作業を行なう。各トレンチより中世の遺物出土が相次ぎ、遺構もほぼ全てのトレンチで確認された。

4月1日～4月12日 4月より作業員を導入して重機による表土除去の状態より、遺構検出発掘作業に入る。作業は遺跡の東側より西側へと進む。

4月15日～4月22日 第1号から第3号掘立柱建物及び土壇基を検出し遺跡の東側部分の遺構検出を終了する。

4月22日～4月27日 遺跡の中央の北側部分に移り遺構検出发掘作業を行なうも遺構の検出なし。合わせて東側部分の実測・写真撮影に入る。

4月29日～5月11日 遺跡の西側の南側部分に移り遺構検出发掘作業を行なう。この調査区では第4号掘立柱建物や第3号土壇などを検出する。合わせて東側、中央部分の実測・写真撮影を行なう。

5月13日～5月18日 遺跡の中央部北側、及び西側の北側部分の遺構検出・発掘作業。この調査区では第6号・第7号土壇などを検出する。又、遺跡南側部分の実測、写真撮影を行う。

5月22日～5月25日 北側部分の実測、写真撮影と、遺跡全体の写真撮影を行ない、5月25日次の調査地点である都地遺跡へ器材を移動する。

## 2. 調査の内容

遠園遺跡は鞍手郡若宮町大字山口字遠園に所在する。犬鳴川の支流である、山口川の右岸(南側)で、南より山口川の北方に延びた丘陵台地の台地上に立地しており山口川に面している。遺跡の標高は88mから90mのほぼ平坦地上にあり、遺跡の内容からして調査範囲より北側には遺構の存在が推定できる。なお、遺跡南方の丘陵頂上部は尾園城跡という。なお、遺跡名は文字をとり遠園遺跡とする。(Fig.2・3, PL.1・2)

遠園遺跡は、分布調査の折に中世の土師器が採集され、土師器散布地として確認されていた。ブルドーザーを利用して予定路線内の表土及び耕作土除去作業を行ない全面発掘に取りかかり遺構検出に努めた。その結果、水田と化しており、丘陵台地を大きく削り崖をなして平坦地が造成してあり遺構の遺存状態は良くないと推定されたが調査が進行するにつれて、崖面は少なくとも遺構が存在する時以前に既に存在しており、谷間は埋めて平坦面に整地している事が判明した。検出された遺構は、掘立柱建物7棟、土壇6基、土塹1基で、他に多量の中世土器類が発見される。(付図Fig.①・②, PL.2—(3))

### (1) 遺 構

#### 掘立柱建物 (付図Fig.③, PL.2~7)

遺跡全面に大小多数の大小ピットを検出したが、その内建物遺構の柱列と思われる配置を示すものを再土調査して掘立柱建物と認めた。南東側のやや暖傾斜地にある第1号から第3号の一群と、台地中央部分の平坦地に在る第4号から第7号の一群の二群が離れて存在し、南東側より南西側へ第1号から第7号とする。

表1 第1号掘立柱建物計測表

(単位 cm)

1 間 × 3 間		梁間間			桁行柱間	桁行間	P	深さ	径
P 1	P 2	269	P 1	P 3	192	636	1	16	20
3	4	258	3	5	230		2	10	29
5	6	259	5	6	214		3	19	24
7	8	240	P 2	4	210	646	4	17	21
			4	6	216		5	8	26
			6	8	220		6	10	25
平	均	251.5	平	均	213.67	641	7	26	21
							8	18	31
							平均	15.5	24.6



Fig. 3 透視地形圖 (縮尺1/1,000)

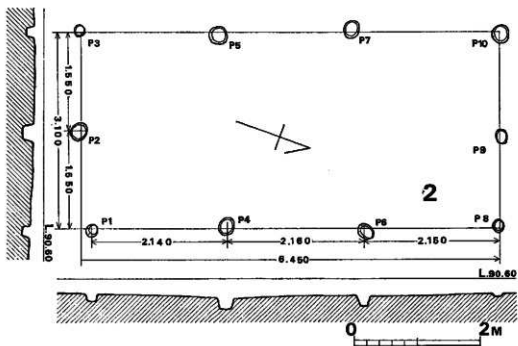
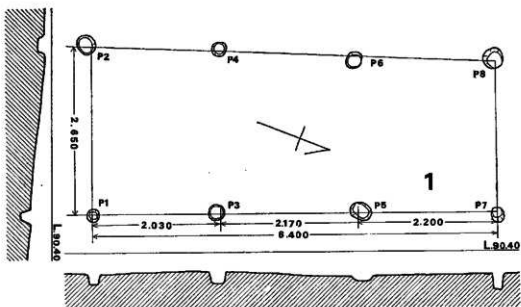


Fig. 4 遼園遺跡第1号・第2号掘立柱建物実測図 (縮尺1/60)

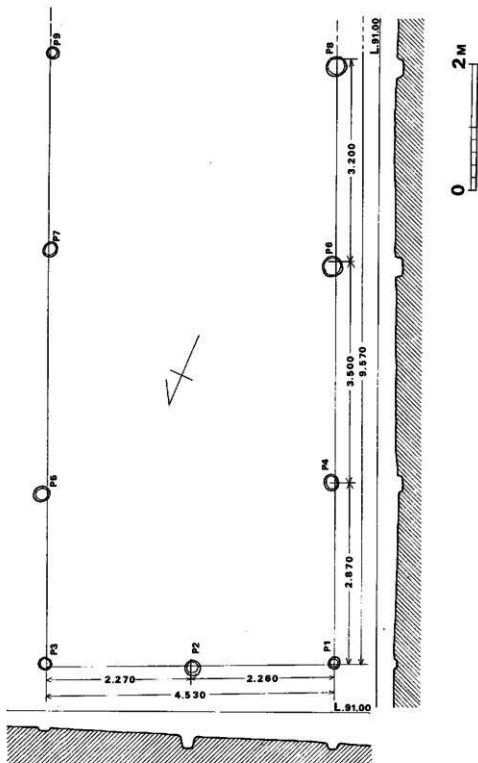


Fig. 5 通函遺跡第3号相立柱建物実測図 (縮尺1/60)

## 第1号掘立柱建物 (Fig.4, PL.3-4-1)

1間×3間の建物である。長軸をN20°Wにとり、桁行間641cm、梁間間251.5cmを測る。P2～P8の西側桁行は東に比べ、南側梁間間の方が北側より長い。掘り方は残存する上端で径約24.6cmの円形で、残存上端よりの深さは約15.5cmである(表1)

表2 第2号掘立柱建物計測表

(単位 cm)

2間×3間		梁間柱間	梁間間	桁行柱間		桁行間	P	深さ	径	
P 1	P 2	155 } 160 }	315 } 305 }	P 1	P 4	214 } 216 }	645	1	10	19
2	3			4	6					
4	5	141 } 162 }	303 }	6	8	221 }	665	3	10	18
6	7			8	9					
8	9	平均	平均	5	5	236 }	660	5	21	26
9	10			5	7					
平均	平均	154.5	310.2	平均	平均	218.3	660	7	20	24
								8	6	18
								9	20	19
								10	24	26
								平均	16.1	22

## 第2号掘立柱建物 (Fig.4, PL.3-4-1)

第1号建物の西側に近接してあり、2間×3間の建物である。長軸N21°Wにとり、桁行間660cm、梁間間310.2cmを測る。掘り方は残存する上端で約22cmの円形で、深さは残存上端より約24cmである。P1のみやや長方形プランにはずれている。(表2)

表3 第3号掘立柱建物計測表

(単位 cm)

2間×9		梁間柱間	梁間間	桁行柱間		桁行間	P	深さ	径	
P 1	P 2	224 } 232 }	456 } 458 }	P 1	P 4	285 } 343 }		1	10	16
2	3			4	6					
4	5	446 } 448 }	452 }	6	8	269 }	670	3	5	18
6	7			5	5					
8	9	7	9	7	9	318.5	670	5	17	25
平均	平均	228	452	平均	平均					
								7	13	22
								8	12	30
								9	18	18
								平均	13	22.7

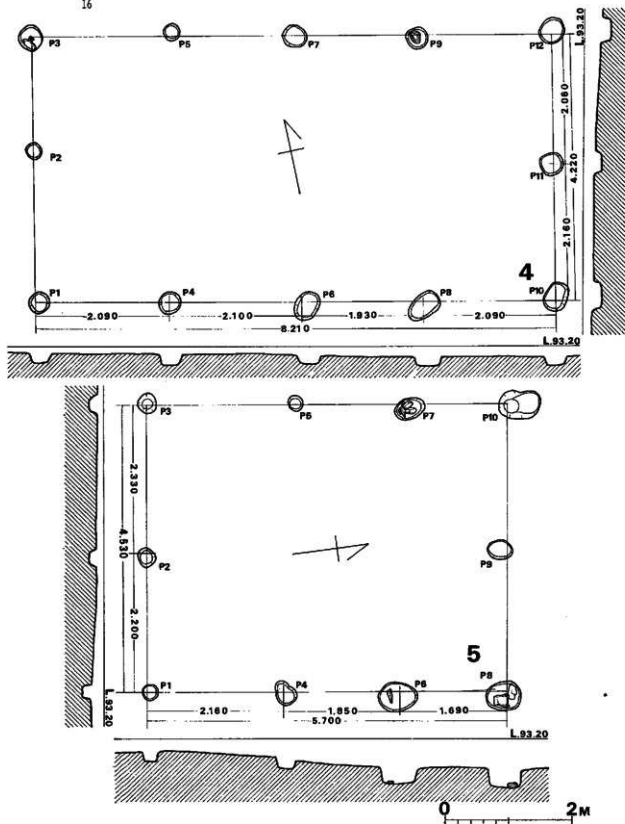


Fig. 8 遺蹟遺跡第4号・第5号独立柱建物実測図 (縮尺1/60)

## 第3号獨立柱建物 (Fig.5, PL.3・4—2)

第2号建物と重複しており完掘に至っておらず、路線外の南側にまだ続く遺構であり桁行間  
は不明である。長軸N24°Wにとり、梁間は2間であり約452cmであり桁行間は3間まで確認す  
る。掘り方は残存する上端で約22.7cmの円形で、深さは残存上面より約13cmである。建物の占  
有面積に対して柱穴が細い点に気づく。(表3)

以上第1号から第3号建物は主軸をほぼ平行にしており、第2号建物と第3号建物は重複し  
ている。第1号建物と第2号建物の床面下と周りにはかなりの柱穴が在り、関連するものが存  
在するかもしれない。第3号建物の床面下にはほとんど柱穴は無い。第1号、第2号、第3号  
建物の存在する周辺には多くさんの柱穴がありまだいくつかの建物跡が想定される可能性もあ  
る。又垣根などの存在も考慮したが図示できるところまでは復元できないようである。

表4 第4号獨立柱建物計測表

2間×4間		梁間柱間	梁間間			桁行柱間	桁行間	P	深さ	径
P 1	P 2	240	418	P 1	P 4	206	815	1	16	32
2	3	178		4	6	220		2	14	25
4	5		6	8	186	3		12	38	
6	7		428	8	10	203	4	17	36	
8	9		423	2	11		820	5	14	25
10	11	214	420	3	5	220	6	11	37	
11	12	214	428	5	7	196	7	9	35	
				7	9	195	8	12	36	
				9	12	214	9	13	34	
平	均	211.5	423.4	平	均	205	820	10	14	35
								11	13	35
								12	16	38
								平均	13.4	33.8

## 第4号獨立柱建物 (Fig.6, PL.5)

遺構の存在する丘陵に対して直角方向に、台地中央部に整然と柱穴が並び、2間×4間の建  
物である。長軸N77°Wにとり、桁行間820cm、梁間間42.3cmの長方形を呈している。掘り方は  
残存上端で約33.8cmの円形と楕円形があり、小さなもので25cmある。深さは残存上面より約  
13.4cmである。P3とP9には根石と思われる川原石が存在する。(表4)

## 第5号獨立柱建物 (Fig.6, PL.6・7—1)

第4号建物の北西側にほぼ直交して存在する2間×3間の建物である。長軸をN75°Eにと



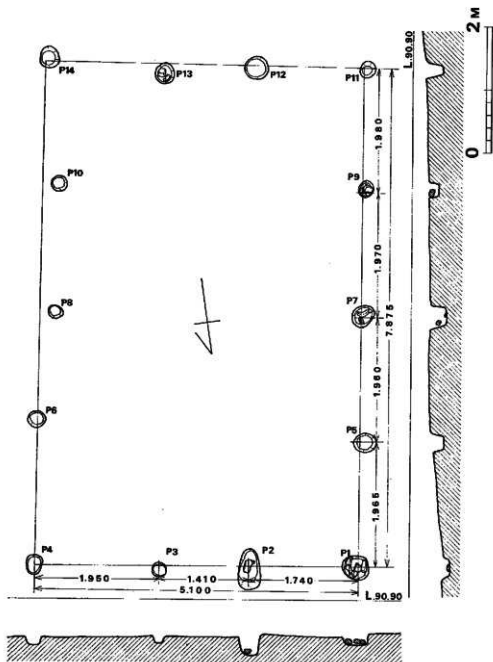


Fig. 7 油屋遺跡第6号掘立柱建物平面図 (縮尺1/60)

表5 第5号獨立柱建物計測表

2間×3間		梁間柱間	梁間間	桁行柱間		桁行間	P	深さ	径	
P 1	P 2	214	456	P 1	P 4	215	559	1	15	25
2	3	242		4	6	175		2	12	26
4	5		463	6	8	169	3	13	30	
6	7		461	2	9		562	4	16	33
8	9	236	460	3	5	234	577	5	10	24
9	10	224		5	7	180		6	23	50
				7	10	163	7	30	36	
平	均	229	460	平	均	189.3	566	8	26	47
								9	22	34
								10	51	45
								平均	21.8	35

り桁行間約566cm, 梁間間460cmを測る。掘り方は残存する上端で約35cmの円形と楕円形で深さは残存上面より約21.8cmである。P 6, P 7, P 8に横石があり掘り方径が大きい。(表5)

表6 第6号獨立柱建物計測表

3間×4間		梁間柱間	梁間間	桁行柱間		桁行間	P	深さ	径	
P 1	P 2	174	510	P 1	P 5	196	785	1	13	45
2	3	141		5	7	201		2	23	34
3	4	195	518	7	9	200	3	10	22	
5	6		435	9	11	188	4	12	26	
7	8		435	2	12		790	5	22	32
9	10			3	13		786	6	18	25
11	12	175	504	4	6	232	797	7	28	30
12	13	144		6	8	168		8	16	21
13	14	185		8	10	203	9	16	23	
				10	14	194	10	11	24	
平	均	169	480.4	平	均	197.7	789.5	11	28	26
								12	15	35
								13	11	32
								14	13	33
								平均	16.86	29.1

### 第6号獨立柱建物 (Fig.7, PL.6・7—1)

第5号建物と重複しているが1棟分として取り上げる。第5号建物と長軸はほぼ平行でN 9°Eであり2間×4間の建物である。桁行間789.5cm, 梁間間480.4cmを測る。掘り方は残存

上端で約29.1cmで、円形と楕円形があり、深さは残存上面より約16.86cmである。P1, P3, P7, P9, P13に根石があり小さな川原石をいくつも敷いている。なおP8, P10は東側桁行線よりややはずれて建物中心部に入っている。そこで付図Fig.⑧の遺構全体図を見るとH6のP8とP10の東方に平行して2例の計4個のピットに気づく。これらP8とP10を合わせた合計6個のピットが第6号建物に付属するものであることも考えられる。(表6)

表7 第7号掘立柱建物計測表

1間×2間		梁間間			桁行柱間	桁行間	(単位 cm)		
P 1	P 2	146	P 1	P 3	110}	254	P	深さ	径
2	4	148	3	5	144}		1	11	14
5	6	127	2	4	121}	250	2	9	28
			4	6	129}		3	36	44
平	均	140.3	平	均	126	252	4	16	36
							5	15	34
							6	23	40
							平均	18.3	32.6

## 第7号掘立柱建物 (Fig.8, PL.6-7-1)

第4号建物の西側にあり第4号建物と長軸を平行にとる1間×2間の小さな建物である。長軸はN81°Wであり、桁行間252cm、梁間間140.3cmを測る。掘り方は残存する上端で約32.6cm、

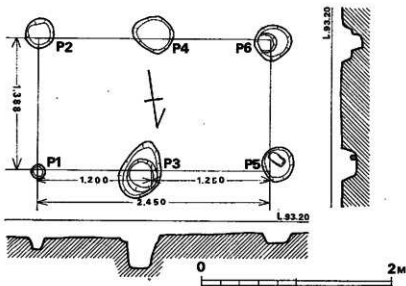


Fig. 8 遺蹟遺跡第7号掘立柱建物実測図 (縮尺1/40)

深さは残存上面より18.3mである。P5には根石があり、P3とP6は2段掘りとなっている。

以上第4号から第7号建物の存在する遺跡の南西部にはこの他大小たくさんのピットが在り、他にいくつか復元できる可能性をもつものもあるようであるが、とくに第5号建物と第6号建物の周辺や床面下にはたくさんのピットが在る。又この一群の建物跡より北側に一連の柱穴群が検出されたが、建物跡として想定できるものは存在しないようである。(表7)

#### 土壌 (付図Fig.⑨, PL.8~12)

孤立柱建物の柱穴群のように、遺跡全体にかなりの土壌と思われるピットが存在するが、これらのうち中世の遺物が山土したものに限って孤立柱建物と同じく東側より1号とする。

#### 第1号土壌 (Fig.9・13, PL.8-1・14)

遺跡の中央より北東側に在り付図 Fig.⑨のように谷門の緩斜面にあり、第2号土壌と合わせて一つの遺構群を形成しているのであるが、建物跡は確認できないようである。

土壌は大きなものと小さなものとが結び付いたような形で大きな土壌は深く、小さな土壌は浅い。大土壌は円形上端径1.80m、底面径0.55m、深さ1.20mであり摺鉢状を呈する。小土

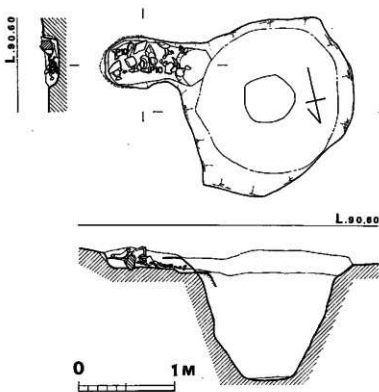


Fig. 9 遠岡遺跡第1号土壌実測図 (縮尺1/40)

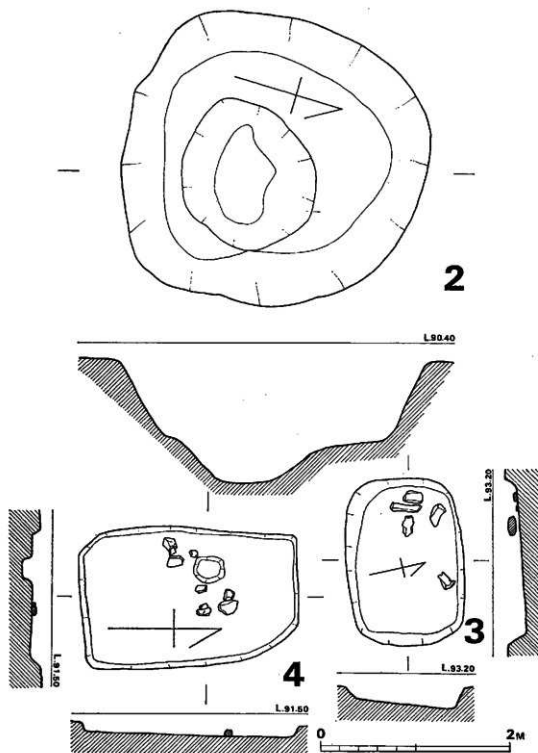


Fig. 10 遠園遺跡第2号・第3号・第4号土坑平面図 (縮尺1/40)

墳は楕円形で東側の短壁が大土壇に続いて長さ1.08m、幅0.55m、深さ0.15mと深く底面は中央部よりやや東側が一段下り20cmの深さである。この小土壇は炉として利用されたらしく、西側短壁の周りは四い焼土器が見られ底面には炭化物・焼土混りの茶褐色土層が見られ大小の川原石が散乱している。又Fig. 9のP 9はFig. 13のP 10であるがこの土器が川原石を支脚としてその上に据えられていたようである。

出土遺物は小土壇が大部分で、土師器小皿、坏、片口、須恵質土器甕がある。

#### 第2号土壇 (Fig. 10・14, PL. 8—2・14)

第1号土壇と同じように遺跡中央より北東側のやや南方にあり、第1号土壇と同じ遺構群と思われる。不整形の二段掘り大土壇で径約3.55m、一段目の下径約2.40m、深さ約0.70m、二段目の穴の上径約1.40m、下径約0.60m、深さ0.40mで残存上端より最深部まで約1.10mを測る。

出土遺物は少なく土師器小皿、坏、瓦器塊、土鍋がある。

#### 第3号土壇 (Fig. 10・15, PL. 9—1・14)

遺跡の中央部南側の第4号から第7号竪立柱建物群と同位置にあり、第7号竪立柱建物の東側約2m離れて在る。長方形で長さ1.76m、幅1.25m、深さは残存する上面より西・南側が浅く15cm、北・東側が深く22cmである。底面は平坦でなく北側と東側に傾斜していて、西側壁近くには底面上に川原石数個と土師器小皿がみられる。なお、この土壇の長軸は、第4号竪立柱建物と第7号竪立柱建物とはほぼ同一方向を呈している。

出土遺物は土師器小皿・火皿である。

#### 第4号土壇 (Fig. 10, PL. 9—2)

遺跡中央部の北側に位置するもので遺物はほとんどみられないが土壇とした。平面は長方形であるが北東隅と南西隅とが隅丸を呈している長さ2.30m、幅1.50m、深さは10cmから15cmと浅い。底面に1ピットがあるがこの土壇に伴うか不明である。床面には比較的小さな川原石が約10個置かれている。

#### 第5号土壇 (Fig. 11・16, PL. 10・11—1)

第4号土壇と第6号土壇のほぼ中間地点にあるもので、ほぼ正方形で大きさは辺約2.10mと約2.20mであり底面は1.60mの隅丸正方形であり、深さは50cmを測る。壁は垂直ではなく、やや傾斜をもち、床面が残存上端面よりかなり小さい。北側の壁中央部分には壁斜面のほぼ中間にピットがあり径約15cm、深さ35cmを測る。ピットの最深部は土壇底面より高い。土壇床面や

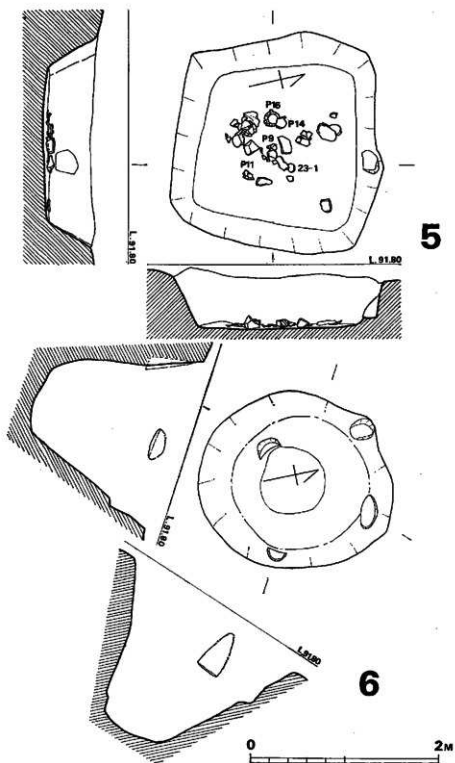


Fig. 11 遺跡遺跡第5号・第6号土坑実測図 (縮尺1/40)

覆土中にはかなりの土師器や陶磁器が見出されている。底面上にはFig.11, PL.10のように土師器。陶磁器類が一括して発見され、又、大小の川原石も混っている。

#### 第8号土壇 (Fig.11・17, PL.11—2・12・16)

第5号土壇の西側6mにあり径に対して深さのある土壇である。円形であり残存上端径約4.00m、底面径0.70m、深さ1.60mであり、底面は平坦でなく中央部分がくぼむ。第5号土壇と同じく壁の斜面中に柱穴がありほぼ正方形に4本存在する。いずれも斜面のために、土壇中心部の方はほとんど掘り込みの壁がなく、土壇壁面をほぼ垂直に切り落して、柱穴底面も正円形ではなく、半円形を呈している。径は約25cm、深さ約50cmを測る。柱穴底面の深さは土壇の深さの約3分の2上端位置にある。この4本の柱穴はこの土壇に覆屋をかけるための柱穴と想定される。

出土遺物は土師器。陶磁器類。須恵質土器。瓦器などが多量に出土している。はそれPL.11—2やPL.12—1のように投込まれたような状態で検出されている。

#### 土壇墓 (Fig.12・18, PL.13)

第1号独立柱建物の東側にあり、これより東側の丘陵斜面地には遺構は認められないことより、この土壇墓は遠園遺跡の最東端に位置するものである。土壇墓らしき形態をしたものも他にいくつか存在するが、この土壇より鉄刀や陶磁器類の出土があり副葬品として考えられるのでお墓とする。

長方形であり長さ1.90m、幅0.55m、深さは現状で10cmを測る。壁は垂直ではなく約45°の傾斜をしていて、底面は長さ1.83m、幅0.45mである。

副葬品の状態より北側が頭位であると思われる。副葬品には左腕附近に鉄刀があり、これは頭位に柄、足位に刀先が、人体の方に刀背が向いて副葬されている。土器類は、左側の頭位近くに白磁と土師器小皿がある。又、左側の残存壁上端にも土師器が見られることより、遺構の残存状態がよく他に副葬品が検出された可能性を示す。

以上のように遠園遺跡より検出された遺構は独立柱建物7棟、土壇6基、土壇墓1基である。この他数百個の大小ピット群が在り、さらにいくつかの溝群が見られる。これらは、大きく分けて第1号独立柱建物や土壇墓の位置する南東部遺構群、第1号土壇と第2号土壇の位置する北東部遺構群、第4号独立柱建物や第3号土壇の位置する西南部遺構群、第5号土壇や第6号土壇の位置する北西部遺構群の4つのグループに分けられるようである。さらに遺跡は北側へ続く想定される。背後の山頂には「尾園城」が在り、その前方の低丘陵上に遠(尾)園遺跡が存在することはこれらに有機的関連性が考慮される。



## I 遺囑遺跡の調査

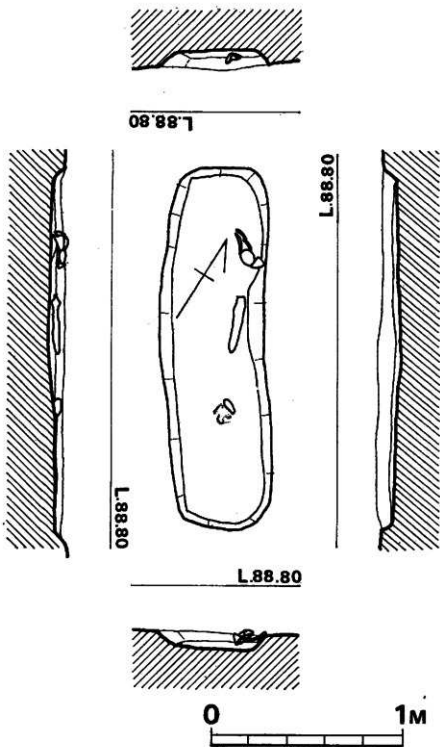


Fig. 12 遺囑遺跡土坑墓実測図 (縮尺1/20)

## (2) 遺物

遺構面よりと土壌・土壌基内から多量の遺物が出土している。そこで土壌と土壌基内出土の遺物は一括して取り上げその他遺構面出土のものは遠岡遺跡出土として一括する。遺物には土師器、須恵質土器、土鍋、片口、陶磁器、石製品、石鍋、金属製品などがある。

## 第1号土壌出土土器 (Fig.13, PL.14)

小土壌の方から土師器小皿、坏、須恵質土器甕、片口が出土している。

## 土師器

## 小皿 (Fig.13-1~

2) 1は口径7.4cm底径5.4cm、器高1.2cmである。褐色を呈し、胎土は密であり焼成はやや悪い。器面には横ナデが施され磨きみられる。底面には糸切り痕がついている。2は口径縁部はないが皿と思われる。底径6.4cmである。うすい橙褐色を呈し、胎土は微密であり焼成は良である。器面には荒い斜めの不統一なナデが施され、底面は剝落しており不明である。

## 坏 (Fig.13-2~8

) 3から5は口径縁部を失う。3の底径7.8cmである。暗褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良好である。器面は横ナ

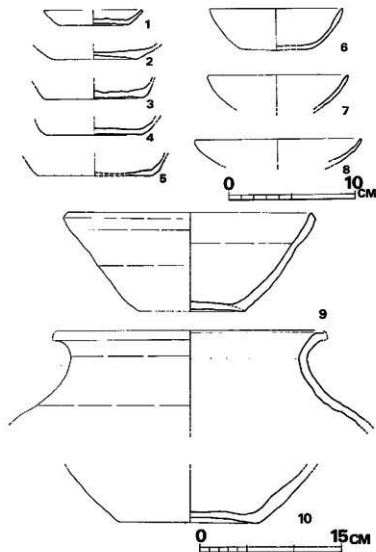


Fig. 13 遠岡遺跡第1号土壌出土土器実測図 (縮尺1~8 1/3, 9 10 1/4)

デで、磨きがみられる。底面には糸切り痕がついている。4の底径は7.4cmである。うす橙褐色を呈し、胎土は微密であり焼成は良好である。器面は部分的に横ナデがみられる。底面には糸切り痕がついている。5の底径は8.2cmである。暗橙茶褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良好である。器面は剝落がひどく不明である。底面には糸切り痕がついている。6は口径10.4cm、底径5.6cm、器高3.3cmである。うす灰色を呈し、胎土は密であり焼成は悪い。器面は剝落がひどく不明である。底面には糸切り痕がついている。

碗 (Fig.13-7~8) 7は口径10.8cmである。白褐色を呈し、胎土は小砂粒を含みやや密であり焼成は悪い。器面は剝落がひどく不明である。8は口径13.0cmである。うす橙褐色を呈し、胎土は小砂粒を含むも密であり焼成は良い。器面は剝落がひどく不明である。

#### 須恵質土器

壺 (Fig.13-10) 10の口縁部と底部は同一個体であり胴部を欠くため器高は不明である。口径約28.0cm、底径14.6cmである。明灰褐色を呈し、胎土は大・小砂粒を含んでいるがやや密であり胎土は不良である。器面は口縁部にナデが、胴部上手から底部近くにかけてタタキが施されている。底面はタタキ圧痕で、胴部にかけての底面外周端はヘラ切りである。

片口 Fig.13-9は片口と思われる。口径25.6cm、底径11.2cm、器高10.6cmである。白橙褐色、一部は赤橙褐色を呈し、胎土は大・小砂粒を含むも比較的引きしまり精製されていて焼成はやや悪い。外面は剝落がひどく詳細に観察できないがナデのようであり、内面の口縁部近くはハケ目が施され、その下位底面まで磨きがみられる。底面はヘラ切りである。

### 第2号土城出土土器 (Fig.14, PL.14)

第2号土城内覆土中より土師器小皿・坏、瓦器、土鍋が出土している。

#### 土師器

小皿 (Fig.14-1~3) 1は特に器高の低いものである。口径8.5cm、底径8.2cm、器高0.7cmである。暗橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面はナデやハケ目はみられなくつくりは非常に荒い。一見手づくね土器みたいである。2は口径8.3cm、底径6.4cm、器高1.3cmである。外面は橙褐色、内面は明褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面はヘラ磨き有一部分にみられるが剝落しており明確ではない。底面には糸切り痕がついている。3は口径9.2cm、底面6.9cm、器高1.3cmである。明橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は剝落がひどく不明である。底面には糸切り痕と板目がついている。

坏 (Fig.14-4~6) 4は小さなもので、口径11.3cm、底径6.8cm、器高2.2cmである。橙褐色を呈し、胎土はやや密で焼成は良い。器面は剝落がひどく不明である。底面には糸切り痕がついている。5は口径15.0cm、底径11.3cm、器高2.9cmである。橙褐色を呈し、胎土は微密で

あり焼成は特に良い。器面は大部分剥落しているが、ナデの上に丁寧な磨きがみられる。底面はヘラ切り痕がついているようである。

### 瓦 器

碗 (Fig.14—10) 底部を欠くが、口径16.2cmである。外面は口縁部近くは黒灰色、底部近くは黒色、内面は黒灰色を呈し、胎土はやや密であり焼成は良い。器面の外面は底面から3分の2ほど研磨が施されている。

### 土 鍋

Fig.14—7—9で、7、8は口縁部であるが、径は復元できない。9は口径36.0cmである。橙褐色を呈し、胎土は小砂粒を含むもやや密であり焼成は良い。器面は口縁端部は弱い横ナデで外面の割部は指圧調整がみられる。7、8、9ともに口縁端部が違っており9の内面は丸くくぼむ。7、8は口縁端部内面は直接的に口縁唇部にのびる。

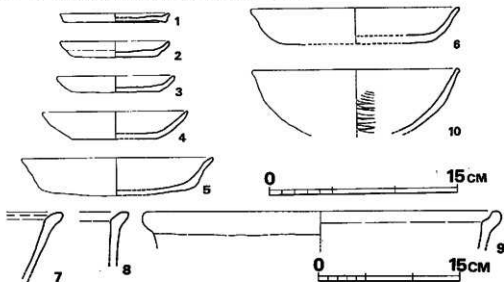


Fig. 14 遠國道跡第2号土墳山上土器実測図 (縮尺1~6・10 1/3, 7~9 1/4)

### 第3号土墳出土土器 (Fig.15, PL.14)

出土遺物は少なく土師器小皿のみである。

皿 (Fig.15—1・2) 1は口縁部を欠き、底径は7.1cmである。白橙褐色を呈し、胎土は大砂粒を含み悪く焼成は良い。器面は剥落して不明である。底面は糸切り痕がついている。2は口径11.8cm、底径8.5cm、器高1.3cmである。橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は全く不明で、底面は糸切り痕がみえるようである。



Fig. 15 遠國道跡第3号土墳出土土器実測図 (縮尺1/3)

## 第5号土城出土土器 (Fig.16, PL.15)

礎土中や底面より約180片の土器出土をみるが土師器・小皿・坏が圧倒的に多い。とくに底面よりは土師器、陶磁器がFig.12, PL.10のように一括して発見されている。土師器には小皿・坏・小壺、須恵質土器、瓦器、雑器がある。なお陶磁器については後章で一括して述べる。

## 土師器

小皿 (Fig.16—1~6) 1は口径8.9cm, 底径8.0cm, 器高0.7cmである。橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は外面は剝落してみられなく、内面は横ナデがみられる。底面は糸切り痕がついている。底部の器肉が厚く、口縁部がうすく器高が低い。2は口径9.3cm底径7.4cm, 器高1.0cmである。橙褐色を呈し、胎土は微密であり焼成は特に良い。器面は研磨されている。底面は板目がみられる。3は口径8.9cm, 底径7.4cm, 器高1.1cmである。暗橙褐色を呈し、胎土は微密であり焼成は特に良い。器面は剝落して不明なところが多いが部分的に研磨されているところのみられる。底面は糸切り痕がついているようである。2, 3ともに底部が厚くて口縁部がうすい。4は口径9.1cm, 底径7.2cm, 器高1.4cmである。橙褐色を呈し、胎土は微密であり焼成は良い。器面は横ナデが施され研磨されている。底面は板目がついている。5は口径9.7cm, 底径7.2cm, 器高1.1cmである。暗橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は特に良い。

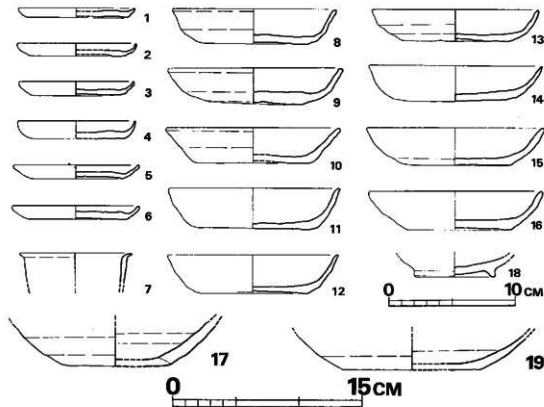


Fig. 16 遠岡遺跡第5号土城出土土器実測図 (縮尺1/3)

器面は剝落して全く不明でみられない。底面も不明である。底部は上げ底である。8は口径9.8cm、底径7.8cm、器高1.1cmである。明褐色を呈し、胎土は微密であり焼成は良い。器面は横ナデがみられる。底面は糸切り痕がついている。

環 (Fig.16—8~16) 8は口径12.3cm、底径8.3cm、器高2.8cmである。暗褐色を呈し、胎土は大・小砂粒を含んでおりやや粗であり焼成は良い。器面は丁寧な磨きがみられる。底面は糸切り痕がついている。9は口径13.8cm、底径7.6cm、器高2.9cmである。明るい白褐色を呈し、胎土は微密であり焼成は特に良い。器面は横ナデが施され磨きがみられる。底面は糸切り痕がついている。特に底部の器内が厚い。10は口径13.6cm、底径9.1cm、器高2.8cmである。褐色を呈し、胎土は微密であり焼成は特に良い。器面は横ナデがみられる。底面は糸切り痕がついている。11は口径13.5cm、底径9.6cm、器高3.2cmである。褐色を呈し、胎土は小砂粒を含みやや粗であり焼成は良い。器面は横ナデがみられる。底面は不明である。12は口径13.4cm、底径8.8cm、器高3.1cmである。暗褐色を呈し、胎土はやや密であり焼成は良い。器面は剝落していて不明である。底面は糸切り痕がついているようである。13は口径13.1cm、底径8.4cm、器高2.5cmである。暗褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は一部分に磨きがみられる。底面は糸切り痕がついている。14は口径13.6cm、底径8.0cm、器高3.0cmである。明褐色を呈し、胎土は大砂粒を含んでおり粗であり焼成は悪い。器面は横ナデがみられる。底面は糸切り痕がついている。15は口径14.0cm、底径8.2cm、器高3.0cmである。明るい褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は横ナデが施され、磨きがみられる。底面は糸切り痕がついている。口縁部の器内が厚い。16は口径13.7cm、底径8.0cm、器高3.1cmである。褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は横ナデが施され磨きがみられる。底面は糸切り痕がついている。

小壺 (Fig.16—7) 底部を欠くが小さな壺とした。口径8.5cmで、口縁部は大きく外へ屈出し、口唇部は細く尖る。褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良好である。器面は剝落して不明な点が多いが外面にナデがみられる。この種の土器は遠岡遺跡出土土器中でも珍らしいものである。なお、Fig.19—2の右の足片も出土している。赤褐色を呈し粗い。

#### 須恵質土器

Fig.16—17であり壺の底部か又は片口のようなものであるかも知れない。底径8.5cmである。明灰色を呈し、胎土は小・大砂粒を含みやや粗い。器面はかすかに乱雑なナデがみられる。底面は糸切り痕がついている。

#### 瓦 器

Fig.16—18で口縁を欠く。底径は6.2cmで高台は0.5cmである。茶灰色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。内面は研磨されており外面は剝落で不明である。

#### 雑 器

Fig.16—19で底部の破片である。底径10.4cmである。外面は暗黄褐色で底部は黒茶褐色、内面は明るい黒茶褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面はヘラによる調整である。底面もヘラ調整である。

その他陶器の小破片が1片あるが極めて小さいため詳細は不明である。

#### 第6号土壙出土土器 (Fig.17, PL.16・23・24)

土壙中ではこの第6号土壙出土土器が一番多く約200片を数える。土師器の小皿、環がほとんどであるがPL.11—2や12—1のように陶磁器類と一括して出土している。土師器小皿・環・甕、瓦器、陶磁器が出土している。陶磁器については後述の陶磁器類をみられたい。

#### 土師器

小皿 (Fig.17—1~9) 1の小形と2~8の中形、9の大形品がある。1は口径7.1cm、底径6.0cm、器高1.1cmである。橙褐色を呈し、胎土は微密であり焼成は特に良い。器面は横ナデがみられる。底面は糸切り痕がつけられている。2は口径8.3cm、底径7.5cm、器高1.0cmである。明るい橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は横ナデがみられる。底面は糸切り痕がつけられている。3は口径8.5cm、底径6.8cm、器高0.8cmである。橙褐色を呈し、胎土は微密であり焼成は特に良い。器面は剝落しているが横ナデのようである。底面は糸切り痕がつけられているようである。4は口径8.7cm、底径6.7cm、器高1.2cmである。橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面はナデが施され磨きがみられる。底面は糸切り痕がつけられている。5は口径9.0cm、底径7.1cm、器高1.2cmである。橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面はほとんど剝落していて不明である。底面は糸切り痕がつけられている。底部の器内が厚い。6は口径8.6cm、底径6.4cm、器高1.2cmである。褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は横ナデが施され磨きがみられる。底面は糸切り痕がつけられている。7は口径8.8cm、底径7.8cm、器高1.0cmである。明るい橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成はやや良い。器面は剝落していて不明である。底面は糸切り痕がつけられている。8は口径9.5cm、底径7.6cm、器高1.2cmである。橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は剝落していて不明である。底面は糸切り痕がつけられている。底部の器内が厚く、中心部が上底。9は口径10.8cm、底径9.8cm、器高0.9cmである。橙褐色を呈し、胎土は微密であり焼成は特に良い。器面はひどく剝落して不明である。底面は糸切り痕がつけられている。

環 (Fig.17—10~17) 10は口径11.0cm、底径6.1cm、器高2.7cmである。橙褐色を呈し胎土は密であり焼成は良い。器面は横ナデがみえる。底面は糸切り痕がつけられている。11は口径13.8cm、底径8.0cm、器高3.0cmである。橙褐色を呈し、胎土はやや密であり焼成はやや悪い。器面、底面ともに剝落がひどくみえない。12は口径13.7cm、底径8.9cm、器高2.7cmであ

る。橙褐色を呈し、胎土は微密であり焼成は良い。器面には横ナデがみられる。底面は糸切り痕がついている。13は口径14.1cm、底径は9.1cm、器高は3.3cmである。明るい橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は横ナデを施し磨きがみられる。底面は糸切り痕がつけられている。14は口径14.7cm、底径6.6cm、器高3.5cmである。明るい橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は横ナデがみえる。底面は糸切り痕がつけられている。この坏は口径、器高の大きさに對して底径が小さい。15は口径13.8cm、底径9.7cm、器高3.0cmである。暗褐色を呈し、胎土は密であり焼成はやや悪い。器面、底面ともに剝落で不明である。16は口径13.4cm、底径8.8cm、器高3.0cmである。橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は特に良い。器面は横ナデが施され指状のものでさらにナデている。剝落で部分的に黒色の斑点がみられる。底面は

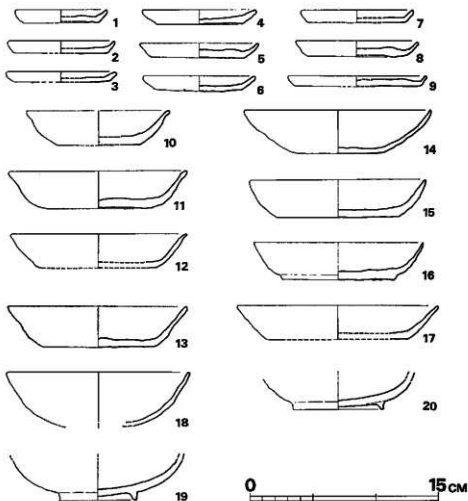


Fig. 17 遠岡遺跡第6号土坑出土土器実測図(縮尺1/3)



指状のナデである。17は口径15.8cm、底径11.0cm、器高2.7cmである。明るい橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は横ナデがみられる。底面は糸切り痕がつけられている。この他土師器の裏の底部と思われるものが2片あるが、図示できないためここでは省く。

### 瓦 器

Fig.17-18~20で、18は底部を欠き、19・20は口縁部が失われている。18は口径14.3cm、器高約4.7cmである。外面は白灰色、内面は白色を呈し、胎土は密であり焼成は悪い方である。器面は凸凹がはげしく研磨はあまりみられない。19は高台付きであり径6.2cmである。灰色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は剝落がひどく、かすかに研磨がみられる。内面の体部に凹線が一条周る。20は高台径7.1cmである。外面は暗灰色、内面は白灰色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は剝落していて不明である。外面体部下半を高台をつけるために平らに成形して高台を付けている。

### 土墳墓出土遺物 (Fig.18, PL13-2)

土墳墓の副葬品として土師品の小皿。陶磁器の白磁・合子。鉄刀がある。合子については48頁によられたい。

土師器小皿 Fig.18-1で口径7.8cm、底径5.5cm、器高1.0cmである。橙褐色を呈し、胎土は緻密であり焼成は良い。器面は丁寧に研磨されている。底面はヘラ切り痕がみられる。

鉄 刀 Fig.18-2であり柄の一部を欠き、副葬されていた時は完形品の状態であったものである。錆がひどく形状が判別しがたいが、刀身の長さ26.3cm、幅は断面三角形で中央部で3.3cm、根部で幅4cmである。

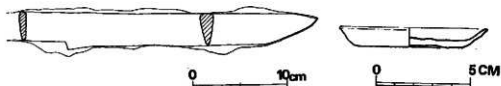


Fig. 18 遠國遺跡土墳墓出土遺物実測図 (縮尺左1/4・右1/2)

### 遺構面の出土遺物

土壇や土壇墓内出土以外の遺物が大量に発見された。これらは各瓶立柱建物内や周辺より出土したものや、各ピット内やその周辺より出土したものもある。表土層下より出土したものもあり、ここではそれらを遺構面として一括する。なお遺構は前述のように大きく四つのグループに分けられるので遺物もそれに合わせる。

遺物には土師器、須恵質土器、片口、褐釉陶器、陶磁器、雑器、陶器、石製品、鉄製品などがある。

### 南東部遺構群面出土の土器 (Fig.19, PL.17)

第1号・第2号・第3号掘立柱建物、土壇基の検出された区域である。

#### 土師器

小皿 Fig. 19—5 で口径8.2cm, 底径6.8cm, 器高1.4cmである。橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は特に良い。器面は横ナデがみられる。底面は糸切り痕がつけられている。底部中心部は上底となる。

坏 図示しないが各土壇出土のようなもので、底部に糸切り痕がつけられているものである。

### 北東部遺構群面出土の土器 (Fig.19・20, PL.17・18)

第1号・第2号土壇の検出された区域である。

#### 土師器

小皿 Fig. 19—1 は口径7.8cm, 底径6.3cm, 器高1.0cmである。橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は磨きがみられる。底面は剥落がひどく不明である。2 は口径8.5cm, 底径7.4cm, 器高1.0cmである。橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は磨きがみられる。底面は不明である。

坏 Fig. 19—7 は口径10.8cm, 底径8.3cm, 器高2.0cmである。暗橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は横ナデが施され磨きがみられる。底面はヘラ切り痕のようである。体部、底部ともに十分なる成形がなされておらず凹凸がはげしく雑なつくりである。8 は口径13.3cm, 底径10.5cm, 器高1.8cmである。橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は横ナデがみられ、底面はヘラ切り痕がつけられている。

小碗 Fig. 19—18 で完形品ではないが、小さなコップ状のものである。口径7.0cm, 底径6.2cm, 器高2.5cmである。黒茶褐色を呈し、胎土は微密であり焼成は特に良い。器面は横ナデが施され、丁寧に研磨されている。底面は剥落により不明である。

足片 PL.19—2 の左の足片で白橙褐色を呈し指でナデで調整している。

#### 瓦器

碗 Fig. 19—22 で底部片である。外面は明灰色、内面は黒灰色を呈し、胎土は密であり焼成はやや悪い。器面は剥落がひどく不明である。高台の裏り付けは底部中央まで引いている。

#### 土鍋

Fig. 20—26 の鈔がつくものとFig.20—27のつかないものがある。28は底部を欠くが口径22.5cmである。体部上半は黒灰色、下半は赤褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は

熱を帯びているため剥落がひどい。口縁部下位の外面に長さ1.0cmの罫がつき、体部より直角に水平に付いている。27は底部を欠くが丸底のものである。口径40cmである。外面は黒茶褐色、内面茶褐色を呈し、胎土は大砂粒を多量に含み粗であり焼成は良い。器面の内面は剥落がひどく不明であり外面の口縁部はナデで体部は指圧痕がみられ雑な仕上げである。

#### 罫鉢

Fig. 19-17 で罫鉢の底部である。黒灰色を呈し、胎土は大・小砂粒を含むも密であり焼成は良い。内面に6本1組の沈線がはしりその間には斜めの細い沈線が左右についている。外面はたて方向のハケ目が部分的につく。

### 北西部遺構群面出土の土器 (Fig.19)

第4号から第7号掘立柱建物や第3号土壌の検出された区域である。

#### 土師器

坏 Fig. 19-8 は口縁部を欠き底径8.7cmである。黄褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は横ナデが施され磨きがみられる。底面は糸切り痕がついているようである。10は口径14.0cm、底径8.6cm、器高3.3cmである。明褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は横ナデが施され磨きがみられる。底面はへら切り痕がついている。11は口径14.9cm、底径10.1cm、器高3.0cmである。橙褐色を呈し、胎土は大砂粒を含んで荒く粗で焼成は特に良い。器面、底面とも剥落がひどく不明である。12は口径13.4cm、底径8.3cm、器高3.0cmである。橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面には横ナデを施し磨きがみられる。底面は糸切り痕がつけられている。13は口径15.6cm、底径9.2cm、器高3.4cmである。橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は特に良い。器面は横ナデが施こされ磨きがみられる。底面は剥落がひどく不明である。

#### 瓦器

Fig. 19-19 の塊は口径16.5cm、底径6.8cm、器高6.0cmである。灰色を呈し、胎土は密であり焼成はやや悪い。器面は体部上半はナデ、下半はへら切りでその上に研磨がみえる。底面はナデの上に圧痕がつけられている。高台は体部下手に引き上げて付けられている。又、一部分が何か棒状の上に置かれたか、あるいは上から圧したものが凹みがある。24は底部を欠くが口径14.8cmである。口縁部附近は黒色、体部は灰色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面はナデとへら切りで研磨のあとはあまりみられない。

#### 須恵質土器

Fig. 20-29 で底部を欠くが、片口であるかもしれない。口径26.1cmである。外面の上半は青灰色、下半は灰色で内面は黒褐色を呈し、胎土は小・大砂粒を含んでおりやや粗く焼成は良い。

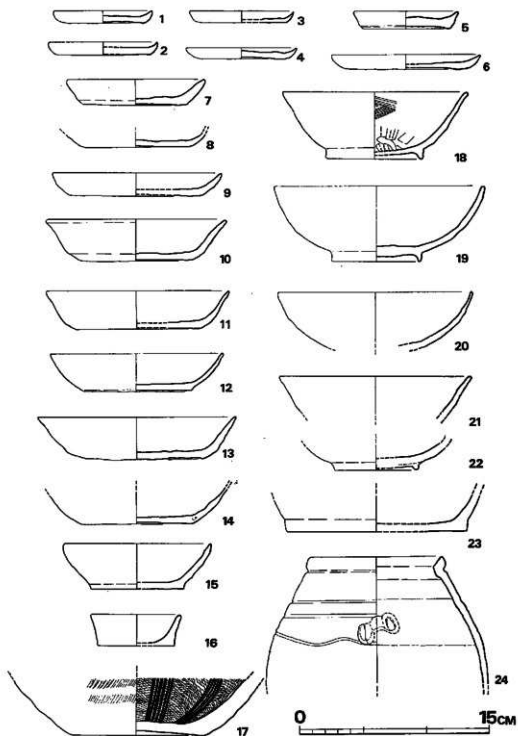


Fig. 19 遼國遺跡出土土器実測図 その1 (縮尺1/3)

器面はハケ目は横方向にみられ、内面は部分的に斜めのこまかいハケ目がみられる。

北西部遺構面出土の土器 (Fig.19・20)

第4号から第6号土坑の検出された区域である。この区域内には他に長楕円形の溝みたいな土坑のような遺構が2から3みられる。これらの遺構の中には明らかに多量の火を受けたらし

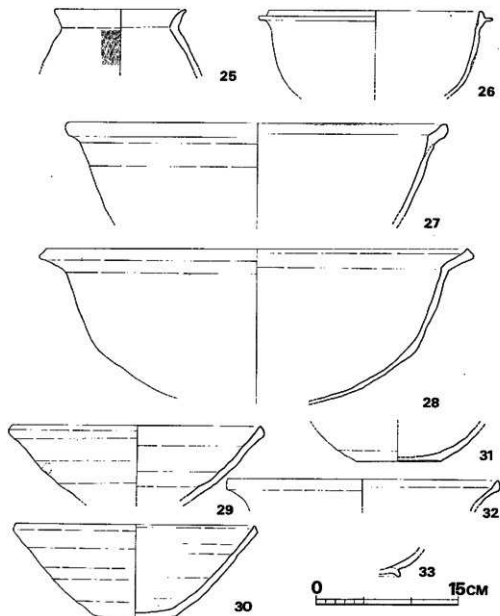


Fig. 20 遠岡遺跡出土土器実測図 その2 (縮尺1/4)

く床面・壁が固く焼けているものがあるが、出土遺物は無い。

#### 土師器

小皿 Fig. 19—3 は口径8.0cm、底径7.1cm、器高0.9cmである。橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は剝落がひどく不明である。底面は糸切り痕がついている。4 は口径8.7cm、底径6.9cm、器高0.9cmである。明るい橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成はやや良い。器面は剝落で不明であり、底面は糸切り痕がついているようである。6 は口径11.7cm、底径8.3cm、器高1.2cmである。橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は剝落して不明であり、底面は糸切り痕がついているようである。

坏 Fig. 19—14 は口縁部を欠くが底径8.7cmである。橙褐色を呈し、胎土は微密であり焼成は良い。器面は横ナデがみえる。底面は糸切り痕がついている。

小碗 Fig. 19—15 で16と似ており小碗とした。口径11.5cm、底径7.3cm、器高3.6cmである。明橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面は剝落がひどく不明で、底面は糸切り痕がつけられているようである。

壺 Fig. 20—26 で底部を欠き口縁部径13.6cmである。橙褐色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面の外面は縦方向のハケ目、内面は指頭腹状のもので強く深く押し、器面に凹凸面を残す。

瓦器 Fig. 19—18 は非常に硬く、色調も黒青灰色を呈し、一見瓦器質でないようである。口径14.6cm、底径7.6cm、器高5.3cmである。黒青灰色を呈し、胎土は密であり焼成は特に良い。器面の外面はナデと下半はへら削りで内面は上半はハケ目、下半はナデとへら削りである。20は底部を欠くが口径15.3cmである。外面は白灰色で内面は暗灰色を呈し、胎土は密であり焼成は良い。器面の上半はナデで細かく丁寧なる調整で、下半はへら強し。

#### 須恵質土器

Fig. 20—31 は底部片であり底径8.8cmである。白灰色を呈し、胎土は大・小砂粒を含むも密であり焼成は良い。器面の外面には細かい浅いハケ目がみられる。底面には糸切り痕がつけられている。32は壺の口縁部と思われるが口径28.7cmである。灰色を呈し、胎土は小砂粒を含むも密であり焼成は良い。器面の外面はナデ、内面は頼かいハケ目がみられる。口縁部は三角状に立ちあがる。

#### 土鍋

Fig. 20—28 で底部を一部欠くが、ほぼ図で復元できるもので口径44.2cm、器高17.0cmである。外面の下半はススが付着しており黒色で、上半は黒赤褐色、内面は茶褐色であり、胎土は密であり焼成は特に良い。器面の外面上半は格子目のタキで口縁部はナデで、内面は未調整である。口縁部は大きく外反しており端部は直に立ちあがる。

なお、Fig. 21は出土土器の底部拓影である。

(上野)

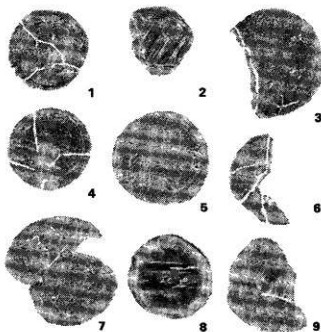


Fig.21 遠風遺跡出土層底部拓影図 (縮尺1/6)

1 Fig.13-1 2 Fig.14-3 3 Fig.16-8 4 Fig.17-4 5 Fig. 17-15 6 Fig.17-6 7 Fig.17-16  
8 Fig.19-19 9 その他

#### 青・白磁類

この遺跡から出土した輸入陶磁は総破片数およそ400片で、青磁、白磁および施軸陶器が含まれている。この点数は、北部九州のこの種の遺跡の出土量としては決して多くもなく、少くもない、いわば平均的な量である。また種類と組みあわせにおいても、他の同種遺跡とよく類似した状況と考えられる。この遺跡の場合、遺物が層的に出土したのではなく、遺構面に散乱していた。それを一括して取り上げた状態なので、この遺構が存続した一定の、幅の広い時期の遺物が混在しているといえよう。しかし検出された土層6個所とくに第6号土層においては輸入陶磁が比較的多く、まとまりのある状態で発見された。

はじめに全体を概観するならば、青磁が多く白磁の総破片数の約3倍に近い。第6号土層についてみると総破片数41片のうち白磁は11片で、青磁との割合は約4:1となる。諸々の偶然的要素を考慮すればその数字については問題があるにしても、青磁の輸入量が、白磁をはるかに凌駕していたといえる。また器種では碗型品が皿等の他の器種に対して比較にならない程多い。

以下遺構面から出土した輸入陶磁について分類を行ない、そのすべてについて個別に述べ、さらに土層出土器について組みあわせを考えてみたい。

## 青磁 (Fig. 22~24, PL. 20~30)

【碗A群】 いわゆる龍泉窯系の一群で、ここには鑄蓮弁・無鑄蓮弁を体外面に押型するタイプと、篋でこれをつくるタイプ、さらに無文のものを合めておく。註1

蓮弁の型造りの碗は小片が多く、またこのグループの他のタイプに比較して量が少ないことを注意したい。蓮弁型造り1に対し、他は5の割合であり、色調において空色に発色したものは少なく、くすんだ緑色ないし緑黄色が多い。一般的には蓮弁型造りのタイプが多いが、この遺跡の場合は少ない。PL. 24-33~35は淡い青緑色を呈し、蓮弁の形もよく整っているが、36, 37, 39. は明度の低い黄緑色を呈し、蓮弁の形も崩れ、38のように弁の盛りあがり小さい。40はうすい空色を呈しているが、釉薬に厚薄がみられ、でき上がりが悪い。39は、これらの底部であるが、これに限らず本道跡出土の青磁碗では外底部に施釉されたものはみられない。

無文のものでは、1は高台の底部での削り込みは非常に浅く、高台の厚みも大きい。体部外面に篋削りの跡がみられる。見込みの隠線は鋭く刻まれ、見込み内に2.6cmの方形枠に囲まれた「金玉満堂」の刻印がみられる。外面は無文である。胎土は灰白色、精良、釉はオリーブ色がかった灰色で光沢をもち、縦方向の貫入が少しみられる。高台外面まで釉がかかるが、外底は露胎のままである。4は、底部の成形は1と大きく変わることはないが、胎土は灰色で精良、露胎部で、赤褐色になる。釉はオリーブ・グリーンで細かい貫入がみられ、粘性があるのか篋削りの稜間は釉が盛りあがって丸みをつくっている。

この一群で蓮弁を粗く篋でつくるものとしては、2, 3. がある。すなわち、2はやや外開きで付根にえぐりのある高台をもち、底はふあつい。施文は残片からは内面では認めることはできないが外面で体部に蓮弁がみられる。ここでは篋は左右両方向に用いられ、鑄のある蓮弁であった可能性がある。胎土は精良で灰白色を呈し、露胎の部分では紫がかった灰色になっている。釉はうすい青緑色で美しい。末端で、所どころ銚色になっている。細かい貫入がみられる。3は底部の作りは前者と異なり単純簡潔である。内面見込みの回りに浅い沈線がある。体部外面に蓮弁文の描かれている可能性があるが、篋削りというよりは線刻に近い。胎土は黄味がかった灰白色で精良、露胎の部分には赤味がかる。釉は乳黄色、極めて薄くかかるが、貫入がある。釉色は部分的に薄くみられる。また、43~48も2・3と類似し暗黄緑の発色で、いかにも粗製品の感じがするが、48はそのうちでは明度が高く胎土も灰白色である。

これらA群として一括した青磁碗は龍泉窯のスタイルを踏襲しているが、生産窯は江南の浙江あるいは福建・広東地方と広く考えておきたい。「金玉満堂」と同じ手で、見込みに草花文などを刻印するものが知られているが、この遺跡からは発見されず、「金玉満堂」は他に2片ほど出土している。また皿型品の破片も数点出土している。わが国の出土品としてはA群が最も多い。

【碗B群】 同安窯系青磁で、碗と皿とがある。



碗の内・外面、皿の内底部に櫛を用いて施文をする特徴的なものである。4個体について実測を行なった。5, 6, 7, 30, 5と30は体部から口縁部へのもっていき方、また僅かに外反する丸みのある口唇部、外部口縁の下から間隔をあげながら描かれる縦方向の櫛描文、又内面の匏および櫛による施文、口縁下に描かれた沈線など同一である。胎土は灰白色でやや粗く、釉は青みをおびた薄い灰緑色。ガラス質で透明感がある。しかし、30では細かい貫入がみられるのに5ではそれはない。体部下半は露胎である。上記の二つに対して6は異なった感じを与える。胎土は灰白で精良、露胎の下には少々赤渋がみられる。釉も軟質ガラスの感じで色は黄味を帯びた暗緑色で貫入がある。内面は無文、体外面は縦の櫛描文で飾られるが、各単位の間隔は広くなく、高台近くでは互いに重なり合い、重なり部は鈍雑のもので文様を消して新しい文様のために地を作りながら描かれ、交叉はしない。釉がけは高台直上までなされている。7は口径10.7を計る小皿である。外側では軽いあげ底の底部から体部が一気に直線をなして開き、襷をなして立ちあがる口縁部がそれに続く。しかし内側では口縁部は直接平らな内底面に続いている。施文は内底面に匏描きの草文と細い櫛による雷光文が施されている。胎土は灰白色で精良であり、釉は黄味があった薄緑色で透明感・光沢に秀ている。底部は糸切りで削り調整している。

このB群について、最近、これを同安窯の製品であるとする中国側の報告がある。

わが国では全体として出土量の多いものであるが、かなり青磁を出土する遺跡で極端に少ない場合もある。完形品の出土は少なく、福岡市西区南金武発見品を参考として例示したい。釉薬がガラス質となること、体下半、あるいは中位以下は露胎の場合が多いことが指摘できる。しかし、5のように櫛と匏を伴用するものがあり、さらに81では内面の櫛が細かく、外面は匏で施文するものがあり、これらを一括してしまうことはできないであろう。註2

【碗C群】 櫛と匏によって蓮華文を施すグループ。これには主として櫛によって連続する蓮華唐草文を内面全体に施文するタイプ8・9・10・32と匏を主施文具とするタイプ11・12に分けられる。前者は文様の一部を含む破片2個体分と、器形全体をうかがわせるにたる2個がある。口縁部のつくり、文様から同一の形態とみなされるので、器形は32についての説明で代表させたい。

高台は高さ1cm弱、外底部の削りも深く、底部は器内1cmぐらいで比較的薄い。高台もやや細目で、壘付は両方から面取りがしてある。外体部は少し横に張ったあと内湾しながら引き上げ、口縁部で軽く外反して止まる。口唇部は丸い。外体部には匏跡が認められるが、内体部は口縁下の沈線と見込みを劃する沈線の間に、匏を櫛を用いて草花文が描かれる。蓮華様のモチーフを3回繰返した蓮文様である。見込みには同じ施文具を用いた蝶が描かれている。胎土は9・32は白色、10は灰色でともに精良。釉は暗みのある淡緑色で透明感がある。9には縦の貫入、10には網目のような貫入が入り、32には貫入はみられない。10では釉はさえずオリブが

かった灰色を呈しており、焼成などの条件によると考えられる。8は、やや外開きの、付根にえぐりのある高台が特徴的である。底部は他の青磁碗にくらべて薄い。内体部に4本単位の櫛で描いた唐草文が施され、外体部には篋で浅く片彫りした蓮弁がつくられる。篋の方向は左右両向きがみられる。釉は殆んど剥落しているがやや厚く、貫入のある灰緑色であり、胎土は灰色、露胎部で赤褐色を呈し精良である。11は高台、底部の造りは厚い。胎土は灰色で精良、釉は1mm近く厚くかかっている。軟質ガラスのような質感、光沢があり、色は青味がかった灰緑色、概して横向きに強い貫入が入っている。見込みに篋削りの施文があるがモチーフは不明。見込みの罫りは浅く削りこまれ、釉溜りがみられるが、この釉溜りから篋で描いた曲線が上に伸びているのが見られる。12は底部は厚く、体部外面に篋削りの跡がみられる。胎土は灰白色で、釉は緑で軟質ガラス質である。施文は見込みに篋描きの草文、体部内面には篋と櫛を用いた装飾がのぞきみられる。Dのグループに属する可能性がある。

このC群は櫛を用いて施文する点ではB群と同一の手法であるが、釉薬とモチーフは全く異なり、B群は雷光文を主体とするのに対してC群では草花文を描く。施文方法は丁寧でいかにも手馴れた製品である。釉調はやや濃い暗緑色で、形態は器内の厚いこともあって鈍重である。篋を主施文具とするタイプも一部に櫛を併用し、その他の要素を比較するとC群として一括しておきたい。88は出土量の比較的に少ないもので佐賀県神埼郡三田川町目達原稲荷塚古墳出土品や、岐阜県稲葉郡輪貯村出土品に類似のものがある。註3

〔碗D群〕 内面を二本の平行曲線によって五枚の花弁のように区画し、各区に草花文を篋によって施文するタイプである。13・14・15・16。口径16cm、高さは6～7cm、5mm以下で、底部は1.5cm近くの厚みとなり6cm強の底径と相まって安定感を強めている。臺付は面取りがしてあり高台の付根は丸みをおびて体部に絞く。体部はやや横に張ったのち一気に引きあげられ、口縁下で心持ち外反するが、再び立ち上がり気味に終わる。口縁部でやや厚みがつき、口唇部は丸い。内面はなめらかな曲線をもって上がる。口縁から1cmほど下で3mm間隔の沈凹線がめぐられる。この線を区切る形で2本の平行曲線が上から下に描かれ、あたかも5枚の花弁を表すようである。この5枚の花弁の中に各々曲線で描かれた同一モチーフがおかれるが、草花を表すように見える。ただし、16ではこの文様は描かれていない。見込みのまわりにも沈凹線が施されているが、外面は無文である。胎土は灰色で、総じて精良であり、釉は透明でガラス質の光沢があるもの(13・14)と、まったくマツトなもの(15・16)がある。また貫入のあるもの(13・16)とないもの(14・15)があるが、この4個については極めて近い関係にあると考えられるので、焼成条件からこの変化が出たものと思われる。

これには口縁に刻目を入れて輪花するものもあるが、この遺跡からは出土していない。これ

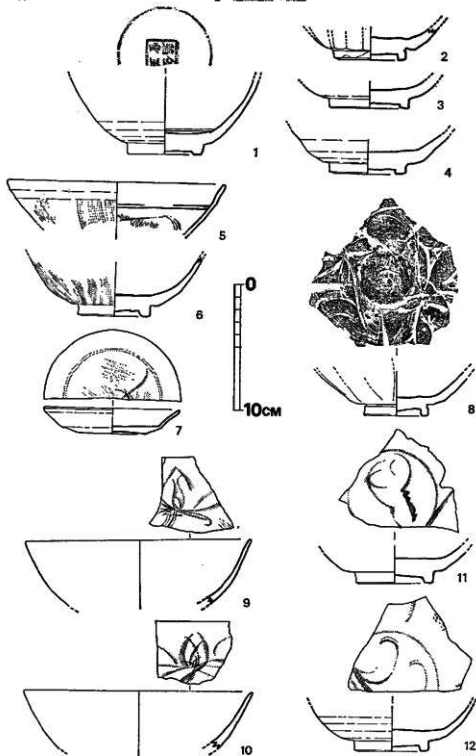


Fig. 22 遠國遺跡出土青磁実測図 (縮尺3/4)

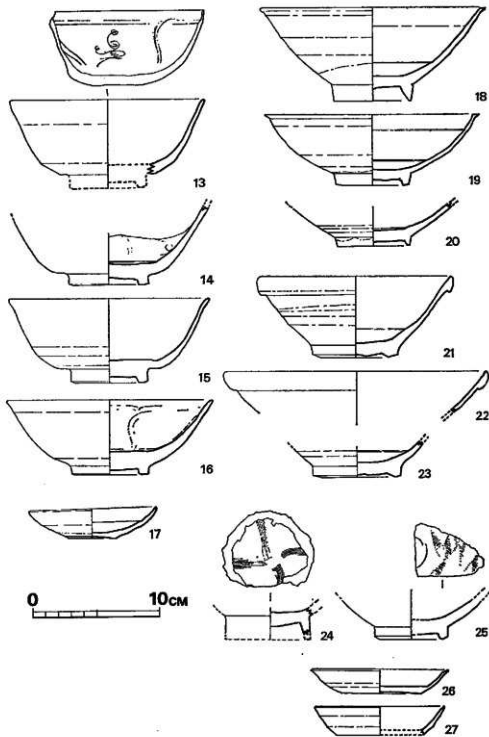


Fig. 23 遠國遺跡出土青磁・白磁実例図 (縮尺1/3)

までこのD群は、量的にはさほど多くないと考えていたが、ここからは比較的多く出土し、第6号土壌などでは43片中10片を占めている。完形品は少なく、佐賀県杵島郡江北町門前古墳出土品を掲げておく。

#### 〔その他の青磁〕

17の小皿は口縁部にキズがあるが、ほぼ完形品である。釉調は草色、内面はやや黄色の強い草色を呈し、胎土は灰色でやや粗いものである。底部は小さく糸切りの後、筆で粗雑に調整している。他に76・77も同種品である。これは量的にはあまり多いとはいえないが、各地の遺跡から出土をみるものである。越州窯水注として知られている博多聖福寺境内出土品と共伴していたとされているが、このタイプの小皿である。この種の小皿の出土状態をみると、遠國遺跡のように青磁碗のA～Dタイプと共伴する例が多くやはり12～13世紀を中心とするところに位置づけた方がよい。そのような問題あるこの小皿の発見は興味深い。福岡市多々良遺跡から同類が出土している。註4

#### 白磁 (Fig.23, P L.26～28)

碗は大きく3分類できるが、皿は出土数が少ない。

碗Ⅰ 口唇部が鋭く水平におわる碗18・19・20。やや先細りの削出し高台から内彎ぎみに開く体部は口唇部でくの字に外反する。体内面からみるとき、内彎しながら上がってきた体部は突然水平に切断されておわる。器壁は薄手であり胎土は白色精良。21では胎土部は黄褐色をしている。釉は灰色～乳黄色で貫入はは無く、特に21には外縁部にたれた釉だまりと、気泡が少しみられる。89～83もこのタイプに属するが、83については釉色が白色に近く、他のものとやや異なる。

碗Ⅱ 玉縁口縁で厚い底部をもつ碗。21・22・23・28・29。高台の削り出しは浅くあいまいで、外底部は僅か1～3mm削り込まれているに止まる。底部は低く重厚である。壺付は大きく面取りされていて、平面というよりは殆んど稜をなしている。体部は底部から大きく開きながらのび、体中位で稜をもち、角度を変えて立ちあがる。この立ちあがりの部位は、極く下方にある29から口縁直下で彎曲する28まで、差異が認められる。器壁はこの曲り目のちかくではかなり薄手になりながら、口縁で外側に折り返し、つぶすことにより幅1.3～1.6mmに及ぶ玉縁を作り出しているため、均衡がとれている。玉縁の端はよくナデられていて、重なり目は認められない。胎土はおおむね白色磁質で精良なものが用いられているが、28・29は少々荒い感じである。釉は共通の特色をみせるなかで、28は赤みがかった乳白色で気泡が多く、また貫入が見られることを指摘しておきたい。さらに内面見込みにみられる沈澱線が、28・29においては深

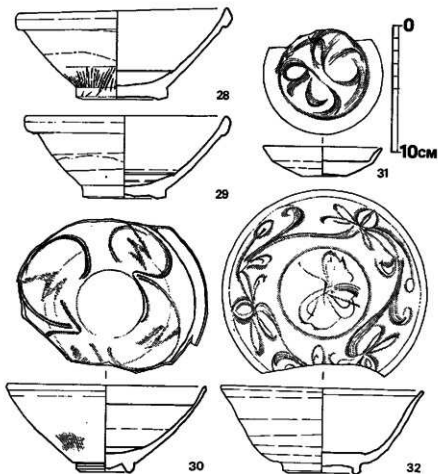


Fig.24 遠隔遺跡第6号土壇出土輸入陶磁実測図(縮尺1/6)

く鋭角に刻まれ、22・23の作行とは異なる印象がある。

このタイプは、12世紀代の遺跡からもみられ、武蔵寺9号経塚、永勝寺蔵骨器伴出品がある。しかし盛行するのは13世紀と考えた方がよいであろう。

**類Ⅱ** 細い櫛を用いた文様のある碗24・25・24は高台の高さ1.7cmと高く、一方25は1cmをはかるだけである。胎土は白色を呈し精良、釉櫛目文様は、針のように細い目であることを特徴とする。24は中心を出んで四方に伸び上がる線が描かれ、25では雷光形の文様がみられる。

この種の白磁は、Ⅰ、Ⅱの白磁よりも先行する可能性をもっている。たとえば12世紀代の経塚の著名な松山市興居島山出土品や、福岡市西油山経塚出土の経筒などにこの細かい櫛目がみられ、類似の手法と認められる。しかし本遺跡のように全体として輸入陶磁第Ⅱ期まで降る遺跡からも出土しているので、前述のⅡ類と同様に盛行するのはやはり13世紀であろうか。

皿 26・27 口径は10cm強、器高2cm前後をはかる。底はややあげ底。口縁部はやや内彎ぎみに開きながら伸びあがり、口唇部で心もち外反して終わる。口唇部内側に縄を当てて押えたように稜をたてて外側に開いている。また外側からも面取りをしてある。底は糸切り、胎土は白色精良、釉は青白色(26)、灰白色(27)であり貫入はない。口唇部は無釉のいわゆる口ハゲであるが、掻き落したにしてはその痕跡がない。

### 土壌出土の輸入陶磁

第5号土壌と第6号土壌において輸入陶磁が出土している。その種類は前述したものに含まれるので、ここでは一括遺物としての組み合わせと数量について述べたい。

#### 第5号土壌

これは総数が少ないので何とも言えないが、白磁Ⅰ群に伴伴する青磁の組み合わせを示す資料としてあげておきたい。

表 8 第5号土壌出土輸入陶磁数量表

總破片 数	青 磁 (4)					白 磁 (5)			
	A	B	C	D	不詳	I	Ⅱ	Ⅲ	不詳
9	1	1	2	0	0	5	0	0	0

表 9 第6号土壌出土輸入陶磁数量表

總破片 数	青 磁 (31)					白 磁 (11)			
	A	B	C	D	分類 不能	I	Ⅱ	Ⅲ	分類 不能
42	3	4	5	13	6	4	3	0	4

#### 第6号土壌

青磁と白磁の比はは約3:1になる。先に試みた分類のなかで白磁Ⅲ群としたものがない他は一応全部出土している。しかしD群がとび抜けて多く、A群中に一括したなかでは無文のタイプ篋形蓮弁のものはなく、型造り蓮弁の102~104が少ないが出土している。

#### その他の陶磁器 (Fig.25, P.L. 30)

(1) 平型合子破片で8片、おそらく7個体分出土している。123・125・128はいわゆる影青で、発色も空色になっているがその他は黄色の強いガラス質釉である。他にP.L.13-2は土壌基出土のものであり、平型合子の蓋の小片である。側面の菊座部分と大井部の一部をのこしている。釉はにごり、やや灰色をおびた青白色をしている。天井部の型押し文様は、草花文がみられる。

平型合子は12世紀の経塚出土品にその例を多くみるところであるが、ここに掲げた8片は、つくりの点でそれと異なる特徴をもっている。すなわち、12世紀の平型合子は空色に発色したものが多く、型押し文は繊細で、草花文花文、七宝連繫文がよくみられる。それに対して本遺跡出土品は釉の発色が悪く、酸化焙焼成の時間があり、施文についても荒く、太く、側面のいわ

ゆる菊座が124のように全くないか、123のように粗雑に作られる。127のように草花文が大ぶりになるのも一つの特徴である。これらの特徴は、大宰府S D605第Ⅱ層出土の合子と一致している。後述するようにこの第Ⅱ層は貞応3年(1224年)以降の埋没によるから合子の形體の特徴は輸入陶磁第Ⅱ期と第Ⅲ期を分つ一般的特徴になりうる。さらに本遺跡の存続年の一端を示す資料である。註5

(2) 131~134の4片の黒釉碗については輸入陶磁第Ⅱ期以降のものと考えられるが、そのうちでも13世紀の前半には出土しないのではなからうか。北条時宗の仏日庵公物目録や若干の出土例を考えると、その蓋然性が高い。

(3) 輸入の施釉陶器135~145までの11片がある。そのうち135~139は黄釉鉄絵盤の破片である。このタイプはきわめて荒い胎土に化粧がけして黄釉を施し、内底面に鉄絵を描くものである。最近注目されるようになり、出土点数も増加しているが、詳細は改めて稿を記こしたい。ただ、このタイプでは口縁部を鈎状に大きくつくる形式と、135のように玉椀状におさめるものがある。

140~143は筒形の器形の破片で、黄緑色の釉が薄くかけられている。陶胎で、赤褐色を呈している。類似品はFig. 25のように福岡県朝倉郡朝倉町花園山で蔵骨器として使用されたものがある。

145はあまり出土例を知らない碗形品である。黄緑色の釉が体部中位まで掛り、以下

は淡灰色の縮胎で高台近くはあらい鋸削りである。釉下に、篋により沈線がみられ、内底は蛇目状に釉が掻き取られ、黄門砂の重ね焼の痕跡がある。他にFig. 19-24の褐釉(四)耳壺片があり、あらい素地に褐色釉をほどこした耳付壺である。復原口径は10.5cm、器高は20cm前後であろう。肩に横耳をつけ、その口縁より二本の平行する沈線をめぐらし、また耳の下にはゆるいカーブの波文線をまわしている。釉は非常にうすくかけられ、またそれが素地となじまずに剥落している。これらの施釉のしかたや成形上の特色はこの種の褐釉耳壺に共通したものであり、類似品も多く、平安末から鎌倉前半の年代があたえられる。

(4) その他これまで述べてきた輸入陶器とは別に下記の陶片が出土した。146~147はいわゆる須恵器系の鉢である。148も国産の陶器の破片で、古瀬戸である。この他遺構面から大甕の厨

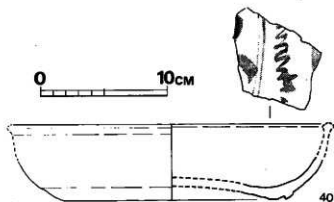


Fig. 25 遺蹟遺跡出土黄釉鉄絵盤実測図(縮尺 $\frac{1}{4}$ )



部の破片94が出土している。

### 小 結

以上述べてきた陶磁器は輸入陶磁第Ⅱ期（13世紀～14世紀）に位置づけられ、一部はⅠ期にも出現している陶磁を含んでいる。註6 遺跡の存続の期間は輸入陶磁を中心に考えると上記の間にしておくことができる。しかし、その期間を遺物の上から細分することは現状では不可能であるので、若干の問題点を提起しておきたい。

① A群とした龍泉窯系青磁は、釉調、胎土に共通する要素をもつが、体部の施文により次のように異なるタイプを含んでいる。

- |   |                    |   |                  |
|---|--------------------|---|------------------|
| { | 型遣り蓮弁文             | { | 弁に鱗をもつ（有鱗蓮弁）…… a |
|   |                    |   | 弁に鱗がない（無鱗蓮弁）…… b |
|   | 刻線で蓮弁を表現する（無鱗）…… c |   |                  |
|   | 無文…… d             |   |                  |

いずれもⅡ期に多く出土するもので、青磁としては最も一般的で輸入量の多いグループである。時期的な上限と下限は必ずしも明らかではないが、12世紀に遡る確実な資料はなく、また15世紀以降、明の青磁とも異なる。A群中でa～dのような細分によって時期差が区別できるか否かは、今回のような遺構面からの一括出土では決めることはできない。あるいは釉色に主として依拠して「粘手」から「天龍寺」のような図式は、大宰府 S D600 の出土状況を見ると、再検討を要する段階にきている。

② B群とした同安窯系のタイプとC群の草花文を施すタイプは、ともに大宰府 S D600 溝の第Ⅳ層（貞応3年—1224年。木札共伴）から出土し、これが13世紀前半から存在していることは確実である。この溝の埋没を14世紀前半とすれば、この期間は少なくとも使用されていたと考えられる。C群の櫛を主要な施文具とするタイプは、施文具の点でB群と共通するが、施文内容や釉調において異なり、生産窯はB群と異なる江南の地点に求められよう。

D群の内面を5区に分けるタイプのものは一般に口縁部に刻み目を入れるものがあるが、本遺跡からは出土していない。釉調はA群の無文のタイプやC群と類似しており、それらの生産窯と近いと推測できる。これも前述の S D600 の第Ⅳ層から出土している。

③ 白磁のⅠ、Ⅱ群および皿については通常のもので、Ⅱ群は12世紀に遡る例があるが、やはり盛行するのは輸入陶磁Ⅱ期である。Ⅱ群とした細い櫛目文を内面に施すタイプも、Ⅱ期から輸入されⅡ期まで継続する。この他Ⅱ期の白磁では、器形はⅠ群とほぼ同じであるが釉調が光沢のある、やや青白磁気味のもので、外底まで施釉する美しいものがある。これは本遺跡からは出土していない。これら白磁は、同じ器形がかなり長く存続しているとみられる。

④ 以上のように、本遺跡出土の輸入陶磁は12世紀前半から盛行するものに始まり、黒釉のよ

うに、やや遅れて13世紀後半以降に中間点を置き、その下限は14世紀の前半にあるものがある。これらのことから、本遺跡の下限を示す根拠は弱い、国産の瀬戸、常滑製品の九州への流入は14世紀前半に多いという一般的所見からして、一応この期間の時期を考えておきたい。

(亀井・森本)

註1 蓮弁を型押しするタイプと篋により蓮弁を片彫りするタイプおよび無文のタイプは胎土・釉薬において区別することはできない。またこれらは共存して出土することが多く、現段階では一括して同一のグループとしておきたい。

註2 橋掛文を主として施文具として用い篋により片彫文を伴用しているが同安室系の一般特徴と考えられる。しかし、これと逆に片彫文を主とし橋掛文を従するタイプがある。この遺跡からは出土していないが、京都府綴喜郡周辺町三山水遺跡出土の皿は後者のタイプである。

註3 32のように蓮華文を3回繰返して連続蓮華文とするタイプと福寿草、菊剣出土品のように蓮華文の間に葉文を挿入するタイプがある。下関秋保遺跡出土品にもみられる。

註4 年代の通る例として大飯府和泉市横尾山鹿福寺経塚出土品中にある。これは12世紀前半～中葉の年代が与えられ、青白磁合子、白磁小皿、白磁小壺などが共存している。聖福寺境内出土の越州窯水注の蓋としてこの小皿が使用されたとすると、水注の年代を12世紀まで引き上げる可能性が生じてきた。

註5 平型合子についてはある程度の鑑別が可能である。平安末期の12世紀前半から中葉にかけての出土例は多いが、12世紀末のものは、埼玉県東松山市下野本利仁神社経塚出土品が好例である。ここでは建久7(1196)年銘の編経筒に共存する平型合子があり、蓋天井部に花文を平面図状に浮出し、その線は太目であり、12世紀前半の繊細な草花文と明らかに異なっている。本遺跡出土品の124に類似し、また鹿児島県諸県郡志布志村出土品もこのタイプがみられる。

13世紀に入るものとして、大宰府S D406溝第Ⅱ層出土品がある(横田賢次郎他『大宰府史跡・昭和49年度概報』1975)類似品としては静岡県沼津市香貫町香貫山経塚にみられる。

註6 亀井明徳『九州出土の中国陶磁について』MUSEUM291.1975  
輸入陶磁の時期区分について述べた。



Fig. 26 花岡山出土の蔵骨器

石製品 (Fig. 27・28, P L. 33) 石製品には石鍋の他に砥石と滑石製石板がある。

礫石 (Fig.27, PL.33—(中))  
南東部遺構面出土の破片であり  
硬質砂岩製で3面を利用している。

滑石製石板 (Fig.27)  
滑石製であり用途不明である。  
方形をなす石板である。

石鍋 (Fig.28, P.L.33—(上))

約50点の滑石破片があるが、ほとんどが石鍋の破片のようである。石鍋はいずれも口縁部下に全周する鋳を有するタイプであり、口縁部に鋳が付くものはない。1は南西部遺構面出土で底部を欠くが、口径28.2cmである。内外面ともに全面にノミ状工具による削り痕が明瞭にみられ、外面は丁寧な仕上げであり内面は浅く雑な削りである。口縁上端部の器肉が厚く体部はうすい。鋳は台形状でうすい方である。鋳より下半は黒いススが付着している。2も南西部遺構面出土で底部を欠くが口径31.6cmである。外面は全面にノミ状工具による削り痕がみられ細かく丁寧な仕上げであり、内面は横方向の深い削り痕がみえる。鋳は台形状であるが下半が短かく、上半に尖り気味である。鋳より体部の下半にかけてススが付着している。3は北東部遺構面出土のもので底部片であり、底部径33.1cmである。外面は全面に幅が狭いこまかなノミ状工具による削り痕がみられ、内面は横方向の縦筋がみられ、体部と底部の接点には細く深い切り込みがある。底面は長さ3cm、幅1cmから1.5cmの入り乱れた削り痕がつけられている。体部から底部にかけてススが付着している。

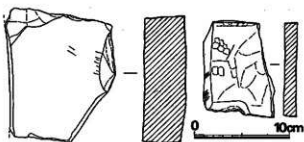


Fig. 27 遠國遺跡出土石製品実測図 (縮尺1/4)

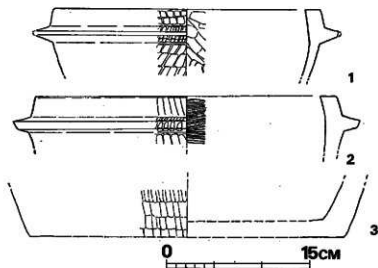


Fig. 28 遠國遺跡出土石鍋実測図 (縮尺1/4)

### 3. 小 結

遺蹟遺跡より遺構14と多量の出土遺物が検出された。遺構は掘立柱建物7棟、土塋6基、土塋墓1基である。この他に数百個の大小ピットが存在しているし、いくつかの礫群も見られる。これらは遺構として取り上げなかったが、数棟の掘立柱建物や欄・界などの遺構の存在も考えられるかもしれない。遺構は大きく分けて4区域に集中している。第1号・第2号・第3号掘立柱建物や土塋墓の位置する南東部遺構群。第1号土塋と第2号土塋の位置する北部遺構群。第4号・第5号・第6号・第7号掘立柱建物と第3号土塋の集中する南西部遺構群。第4号・第6号・第5号掘立柱建物の位置する西北部遺構群の4つのグループである。発掘調査を実施したのは九州縦貫自動車道建設予定地内に限ってであり、遺構はさらに北側や西側に続くものと思われる。Fig. 2, 3のように発掘区域の南側は約2~3mの崖となっていて、やや平坦地が在りこの場所にも遺構の存在が伺われる。この地点より発掘区域、さらに発掘区域の北側へ遺跡が延びていて、ほぼ台地平坦面の全域に渡るものと推定される。現在これらの崖は約1mの高低差があり「段」となっている。これらは遺構掘削前の地業であり、小さな谷などを埋めて、より平坦地を造り出しているようである。

掘立柱建物跡は少なくとも新旧の二時期に分けることができる。第2号掘立柱建物と第3号掘立柱建物、第5号掘立柱建物と第6号掘立柱建物は重複している。しかし、遺構面や土塋内の出土遺物によっては同時期として見ることは出来ない。

土塋は主に遺物の出土したものに限った。第1号土塋は大土塋と小土塋が連結したものであり、小土塋は壁床面が強く熱を受け壁には固い焼土層がみられ、床面には数cmにわたり炭化物、焼土混りの茶褐色土層がみられる。さらに土塋内床面には石群と、その上には須恵質系甕が在る。これらより小土塋は「カマド」と思われ、小土塋内中央の床面に掘り込んで固定されている石は支脚であろう。

第5号土塋と第6号土塋は接近して存在していて両方ともに、土師器や青・白磁類が出土している。第5号土塋は覆土中やFig.11のように床面より土師器、青・白磁と礫石が一括して出土していて、これらは投げ棄てられたというような状態である。土塋の壁面には1ヶ所のみであるが柱穴と思われるピットがある。又第6号土塋も第5号土塋と同じような状態で土師器や青・白磁が深さ約1.60mの間よりほぼまんべんなく出土している。円形土塋であるがほぼ正方形に柱穴と思われるピットが4ヶ所あり覆土を想定させられる。以上二つの土塋内よりの遺物出土状況はいずれも割れた破片ばかりである。これらは上から土塋内に遺物を投げたものであろう。

土墳墓については最近の発掘調査において古代・中世の土葬土墳墓の類例が急激に増している。近くでは東に800m離れた小原古墳群の古墳周辺に土墳墓がある。鞍手郡鞍手町の中屋敷遺跡ではこの遠岡遺跡と同じように鉄刀、白磁、土師器を副葬した土墳墓が検出されている。その他、福岡平野周辺では春日市の門田遺跡、伯玄社遺跡、筑紫野市の桶田山遺跡、剣塚遺跡、八熊遺跡、唐人塚遺跡、塔ノ原遺跡、野田遺跡、太宰府町の裏の田遺跡、君ヶ畑遺跡などがあり、太宰府を中心に多く発見されている。これらの遺跡には土壌裏が集中してみられるものと遠岡遺跡のように1基もしくは2基と単独にみられる遺跡の二つがある。特に遠岡遺跡の場合は類立柱建物遺構に近接してあるのは注目され、中屋敷遺跡においても同様なことが云える。一応鎌倉時代後半の所産と考えられよう。

出土遺物は土製品でも圧倒的に土師器が多く、土鍋や摺鉢その他、青・白磁類の輸入陶磁や須恵質土器、瓦器、土師の足と思われる破片などが出土している。その他若干の石製品と鉄製品がある。

土師器は皿、坏、甕、壺がある。皿は小形・中形・大形とに細分できる。坏も小形・中形・大形の三種類があり口径は約13cm代、底径は8cm代、器高は3cm代が最も多く、底面はへら切り痕がついている。坏は中世でも鎌倉時代の特徴を有するものであろう。甕、壺は若干出土しているのみである。

須恵質土器には甕があり、第1号土墳出土のFig.13-10のように口縁部が厚く、口頸部高さが低いものとFig.20-32のように口縁部が薄く頸部高が高く、口縁端部が三角形になるものがある。

片口はほぼ形態、大きさも同じであるが、須恵質土器系と土師器系とがある。土鍋は小形品と大形品とがありFig.20-26の鋳付きは小形の土鍋であろう。大形品には口縁部によりさらに三つに細分できるようである。

摺鉢は1点のみの出土であり底部のみで詳細は不明である。他に瓦器壺が数点ある。

石製品は数少なく石鍋が約10個と砥石、滑石製石板がある。石鍋はいずれも口縁部下に全周する鋳を有するものであり、器面は丁寧な仕上げである。

鉄製品については土墳墓出土の鉄刀以外にはPL.33(下)の刀子が1点あるのみである。

なお、青・白磁類については亀井・森本氏の「青・白磁類」によられたいが、時期については13世紀から14世紀とされている。

本報告書後章の「茶臼山城跡」では土塁や空壕が検出されて遠岡遺跡の南側丘陵山頂には「尾園城」が存在する。岩的な出城山城跡や本城でも建物などの施設は山頂下の丘陵台地に「館」などの施設を建てる場合が多い。遠岡遺跡はこのような「椀子屋型館」のタイプに属しよう。しかし、本質的にはこの鞍手地方を鎌倉時代から室町時代にかけて治めたのは宗像氏であり、宗像氏と有機的関連性を保有する名主層の居住地とされよう。(上野)

# PLATES

遠 園 遺 跡



遠國道跡・茶臼山城跡・茶臼山遺跡航空写真（東南から）



(1) 遠園遺跡遠景(北から)

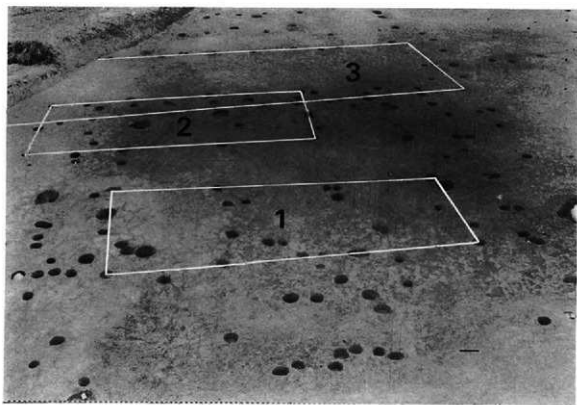


(2) 遠園遺跡全景(西から)

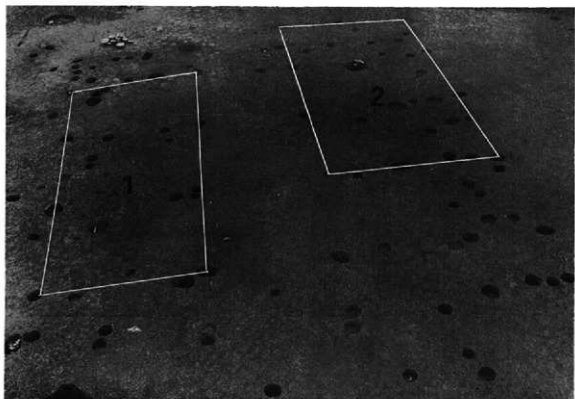




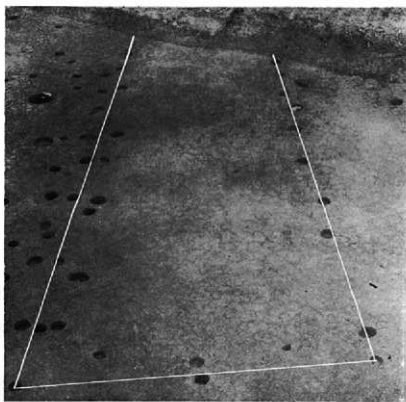
(1) 遠園遺跡第1号・第2号・第3号掘立柱建物（北から）



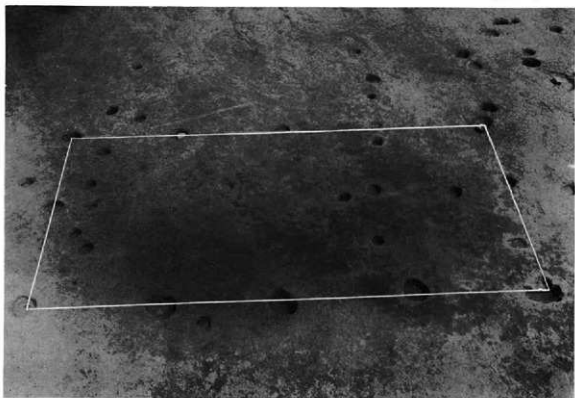
(2) 遠園遺跡第1号・第2号・第3号掘立柱建物（東から）



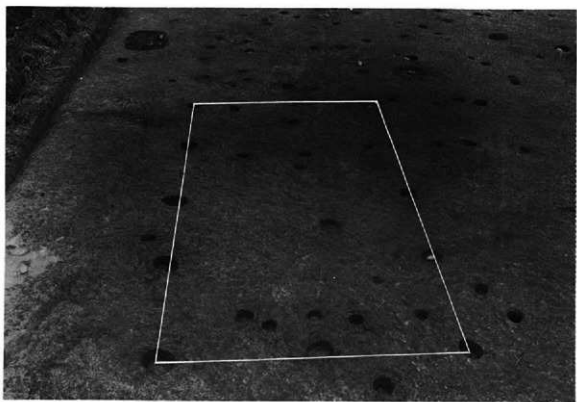
(1) 遠國遺跡第1号・第2号掘立柱建物（北から）



(2) 遠國遺跡第3号掘立柱建物（北から）



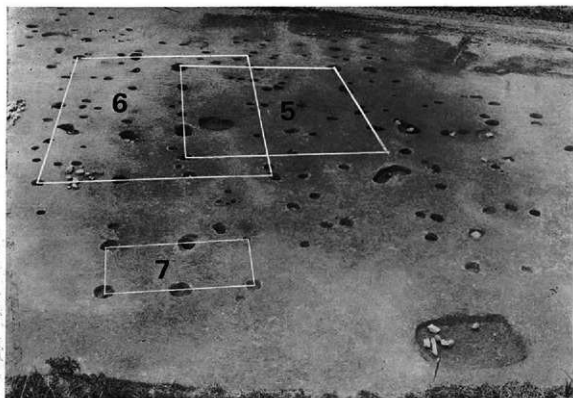
(1) 遠園遺跡第4号掘立柱建物（北から）



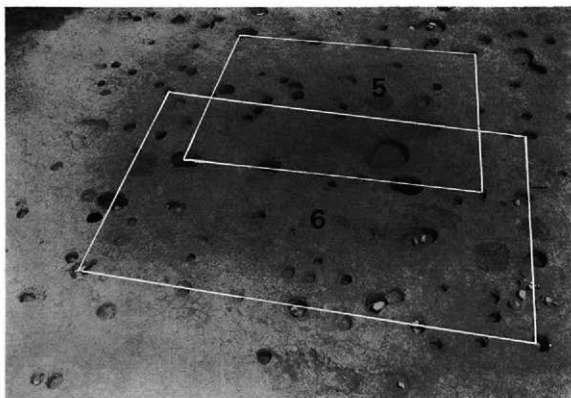
(2) 遠園遺跡第4号掘立柱建物（東から）



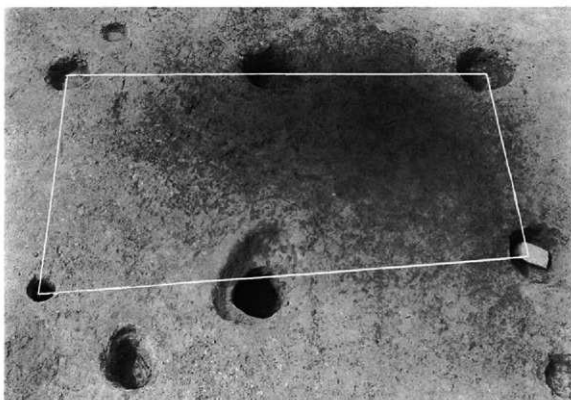
(1) 遠岡遺跡西半全景(南から)



(2) 遠岡遺跡第5号・第6号・第7号掘立柱建物(南から)



(1) 遺跡遺跡第5号・第6号掘立柱建物(南東から)



(2) 遺跡遺跡第7号掘立柱建物(北から)



(1) 遠園遺跡第2号土坑 (北から)



(2) 遠園遺跡第1号土坑 (北から)



(1) 遠國遺跡第3号土坑 (北から)



(2) 遠國遺跡第4号土坑 (南から)

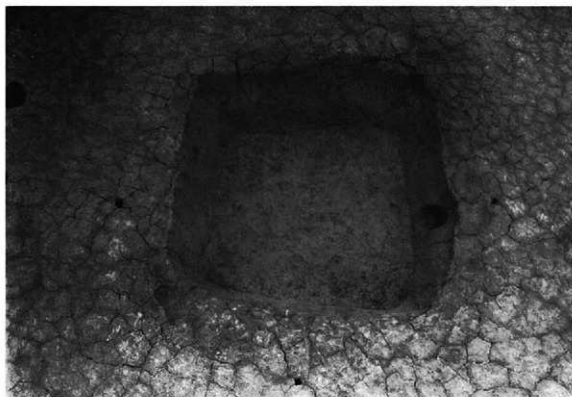


(1) 通園遺跡第5号土壘遺物出土状態1 (東から)



(2) 通園遺跡第5号土壘遺物出土状態2 (東から)





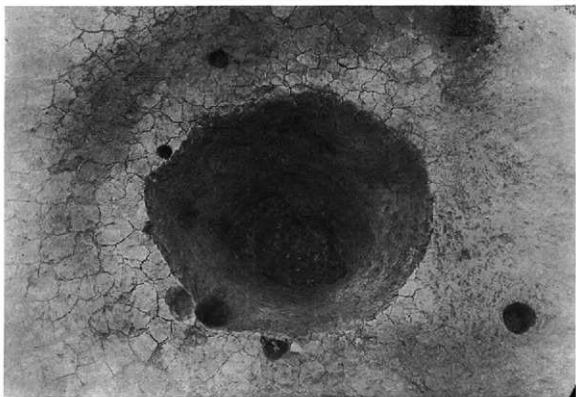
(1) 遠隔遺跡第5号土坑(東から)



(2) 遠隔遺跡第6号土坑遺物出土状態1(北から)



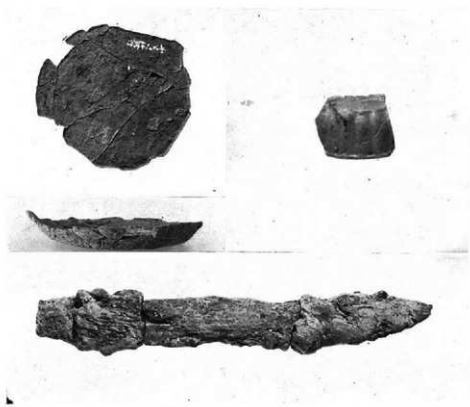
(1) 遠岡遺跡第6号土城遺物出土状態2 (北から)



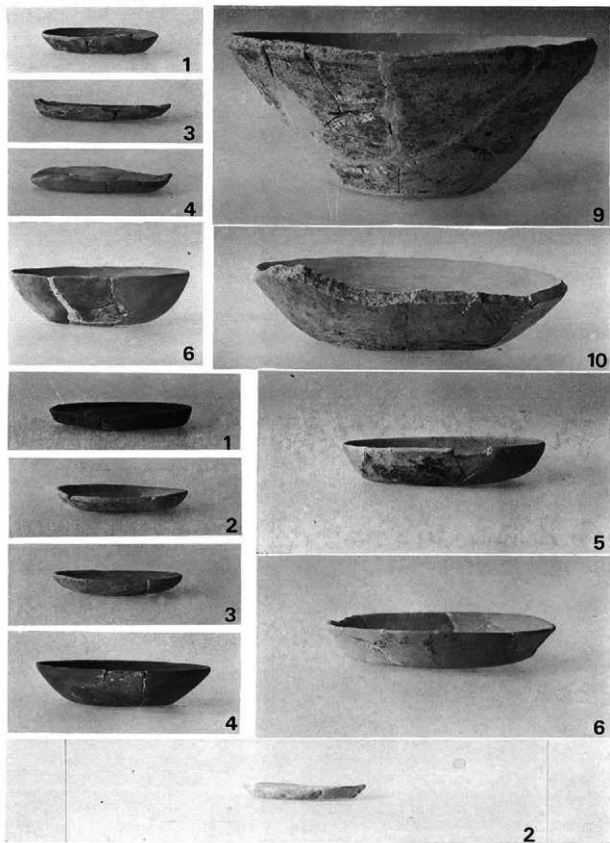
(2) 遠岡遺跡第6号土城 (西から)



(1) 遠國遺跡土墳墓 (西から)



遠國遺跡土墳墓出土遺物



遠國遺跡第1号・第2号・第3号土城出土土器



1



2



3



4



5



6



8



9



10



11



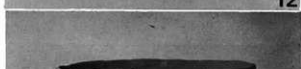
12



13



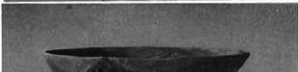
14

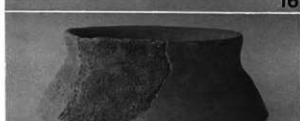
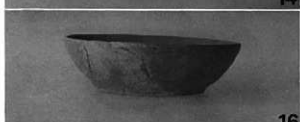
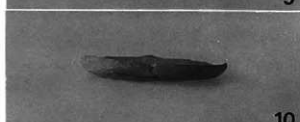
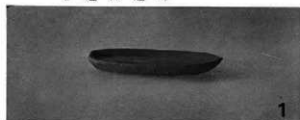


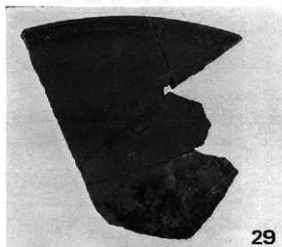
15



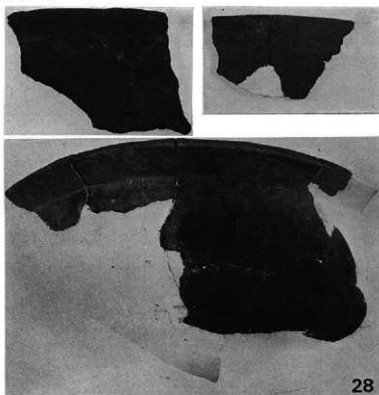
16



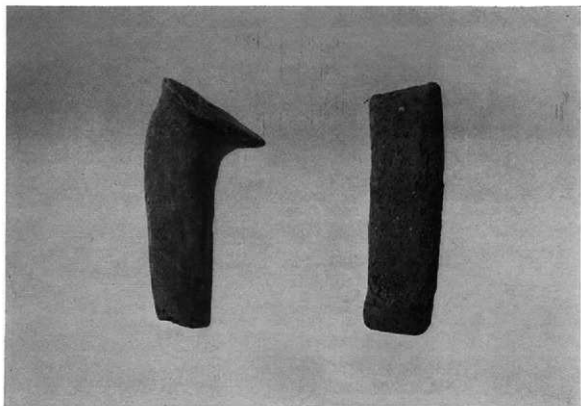




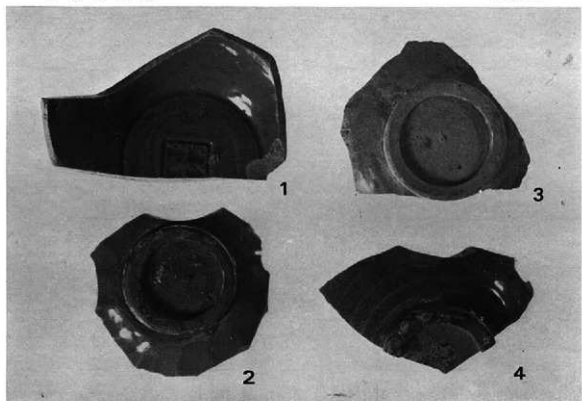




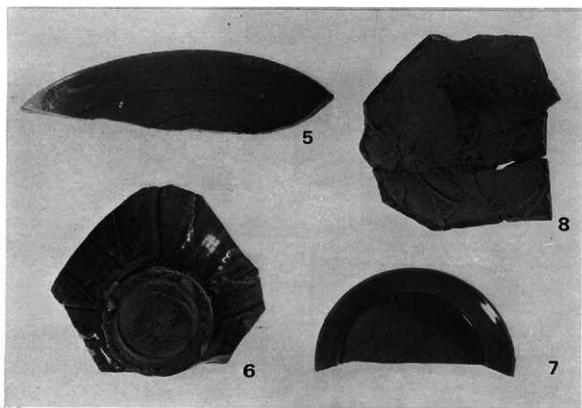
(1) 遠國遺跡出土土器 3



(2) 遠國遺跡出土土器



(1) 遠國遺跡出土陶磁器 1



(2) 遠國遺跡出土陶磁器 2



9



11



10

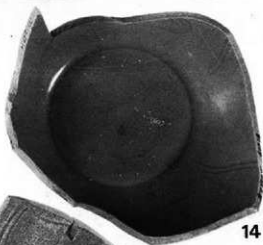


12

(1) 遠國遺跡出土陶磁器 3



13



14

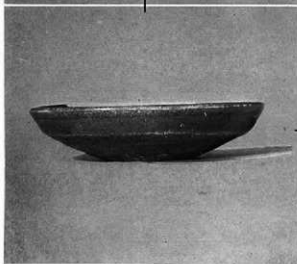
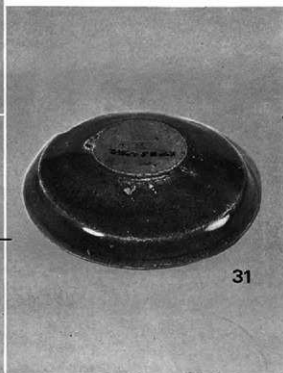
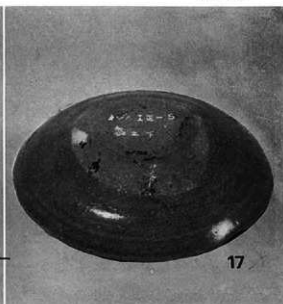
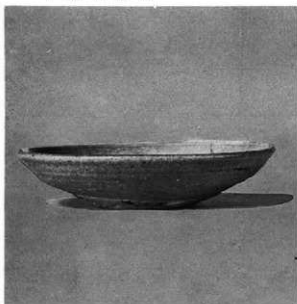


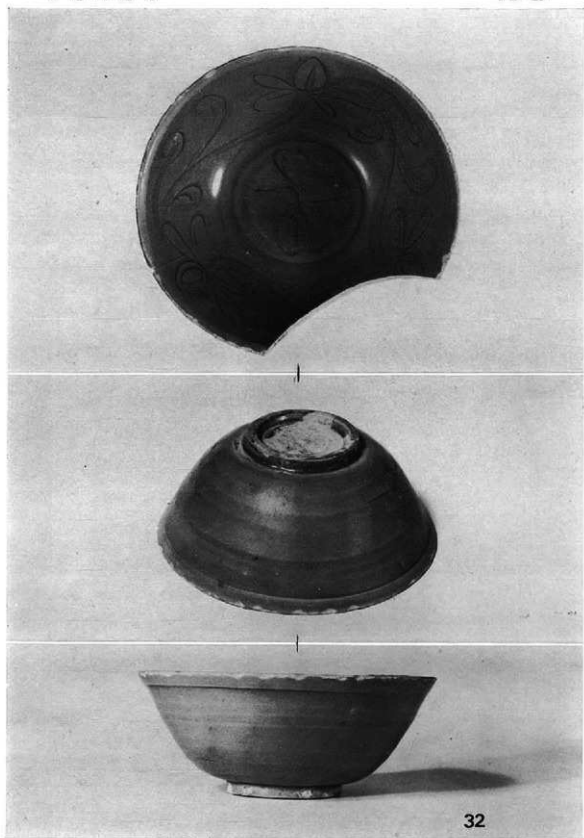
15



16

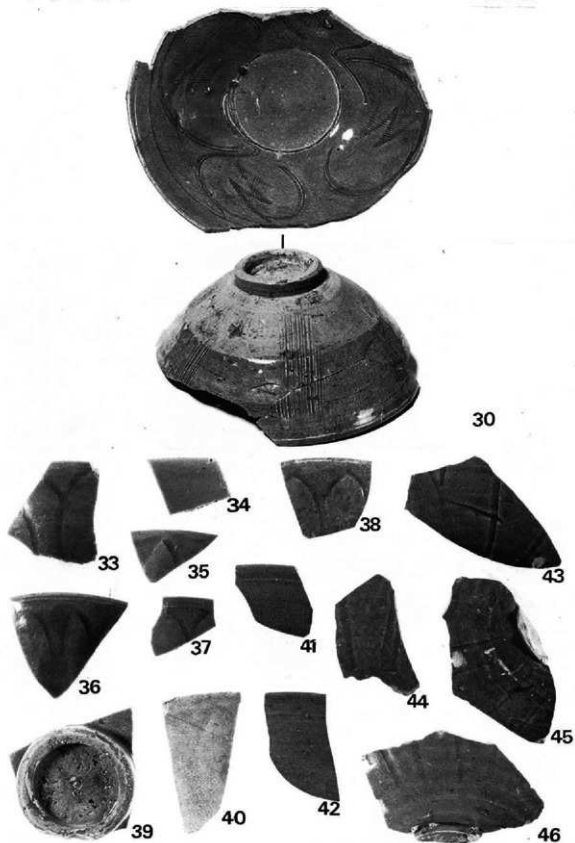
(2) 遠國遺跡出土陶磁器 4



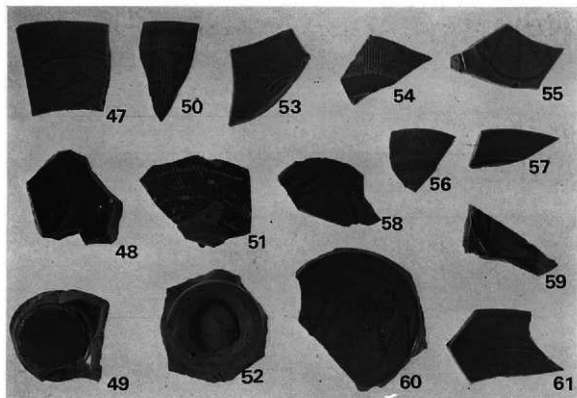


32

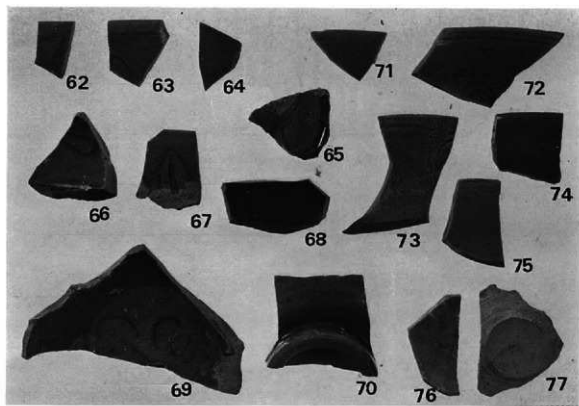
遠國遺跡出土陶磁器 6



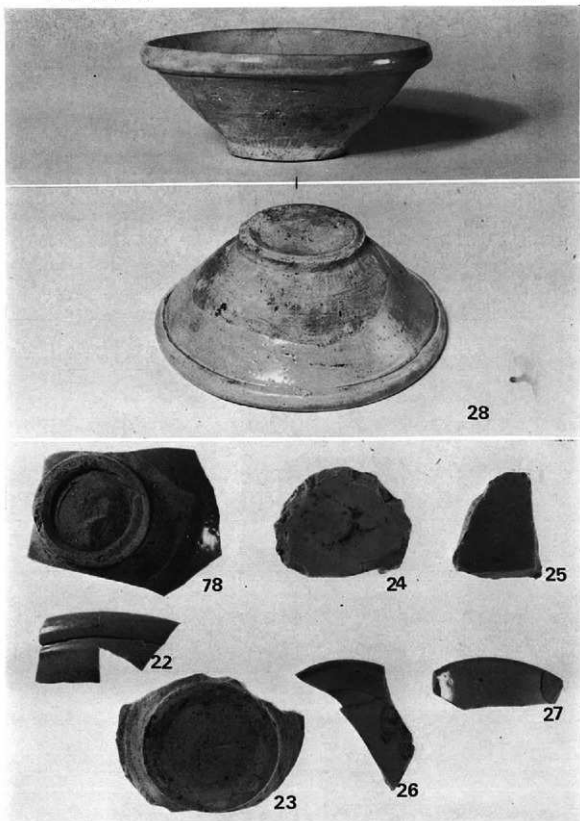
遠國遺跡出土陶磁器 7



(1) 遠國遺跡出土陶磁器 8



(2) 遠國遺跡出土陶磁器 9



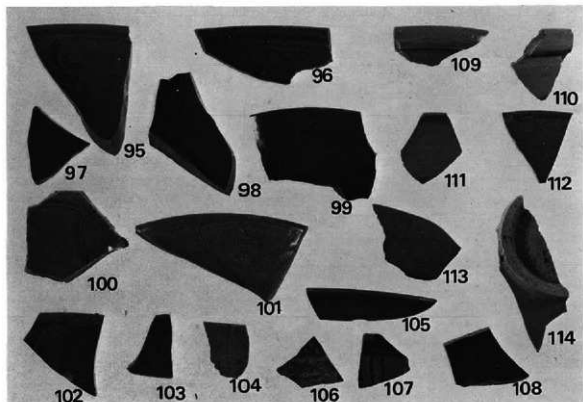
遠岡遺跡出土陶磁器 10



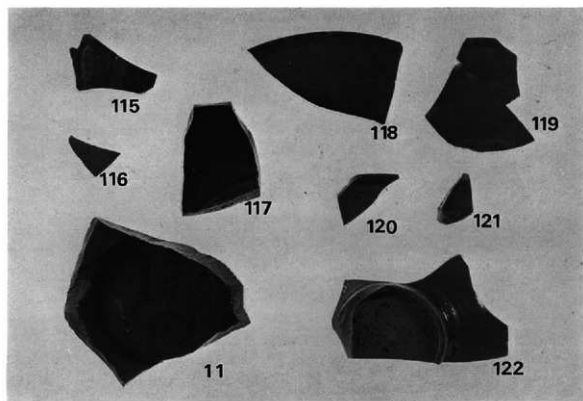




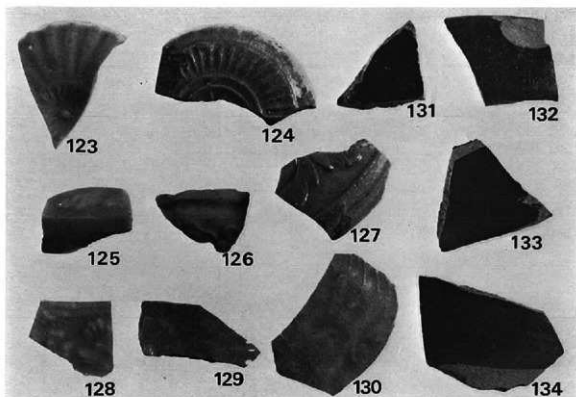
12 出土陶器圖說



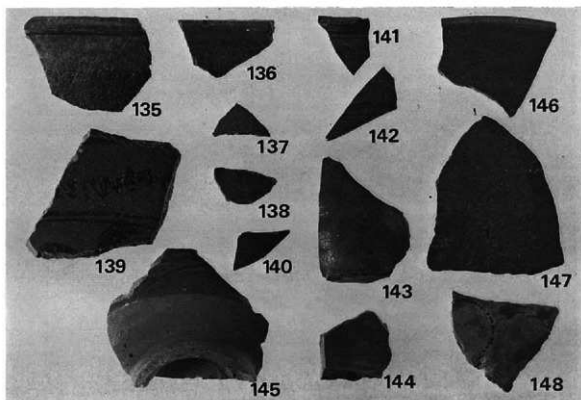
(1) 遠國遺跡出土陶磁器 13



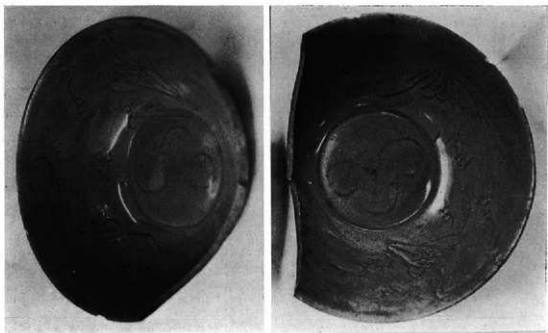
(2) 遠國遺跡出土陶磁器 14



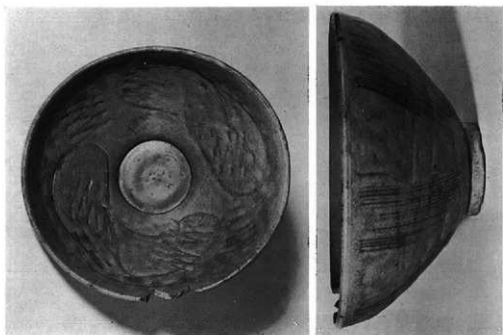
(1) 遠國遺跡出土陶磁器 15



(2) 遠國遺跡出土陶磁器 16



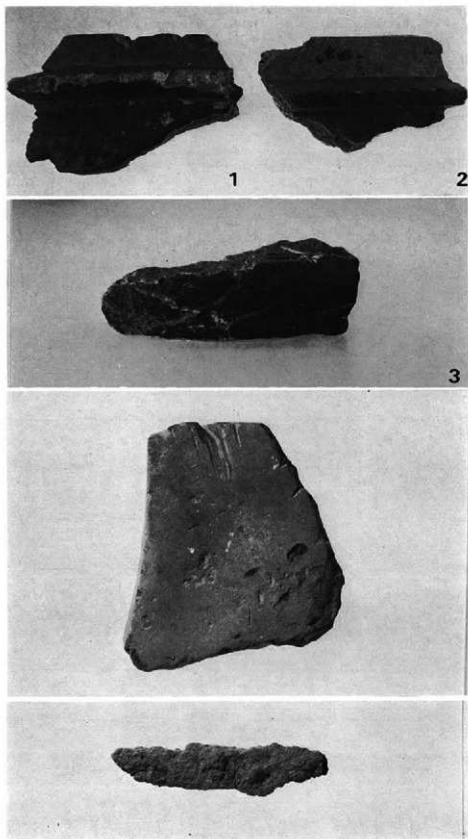
(1) 佐賀県神埼郡三田川町白蓮原稻荷塚古墳出土



(2) 福岡市和白7号土塚墓出土



佐賀県杵郡江北町門前古墳出土



(上) 遠國遺跡出土石鏟 (中) 遠國遺跡出土砥石 (下) 遠國遺跡出土刀子

## Ⅲ 茶白山城跡の調査



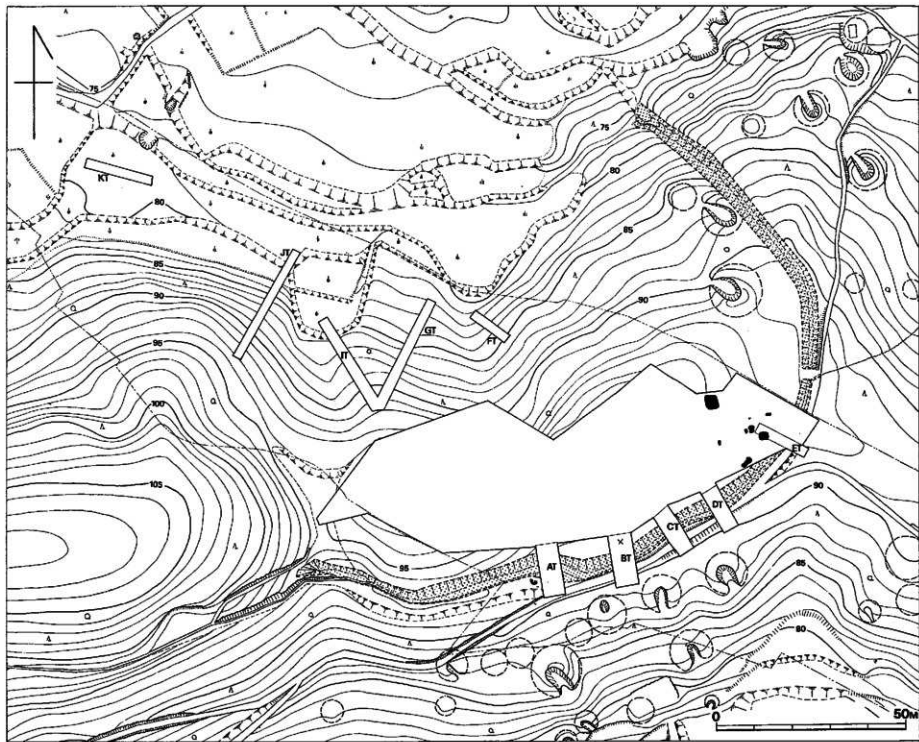
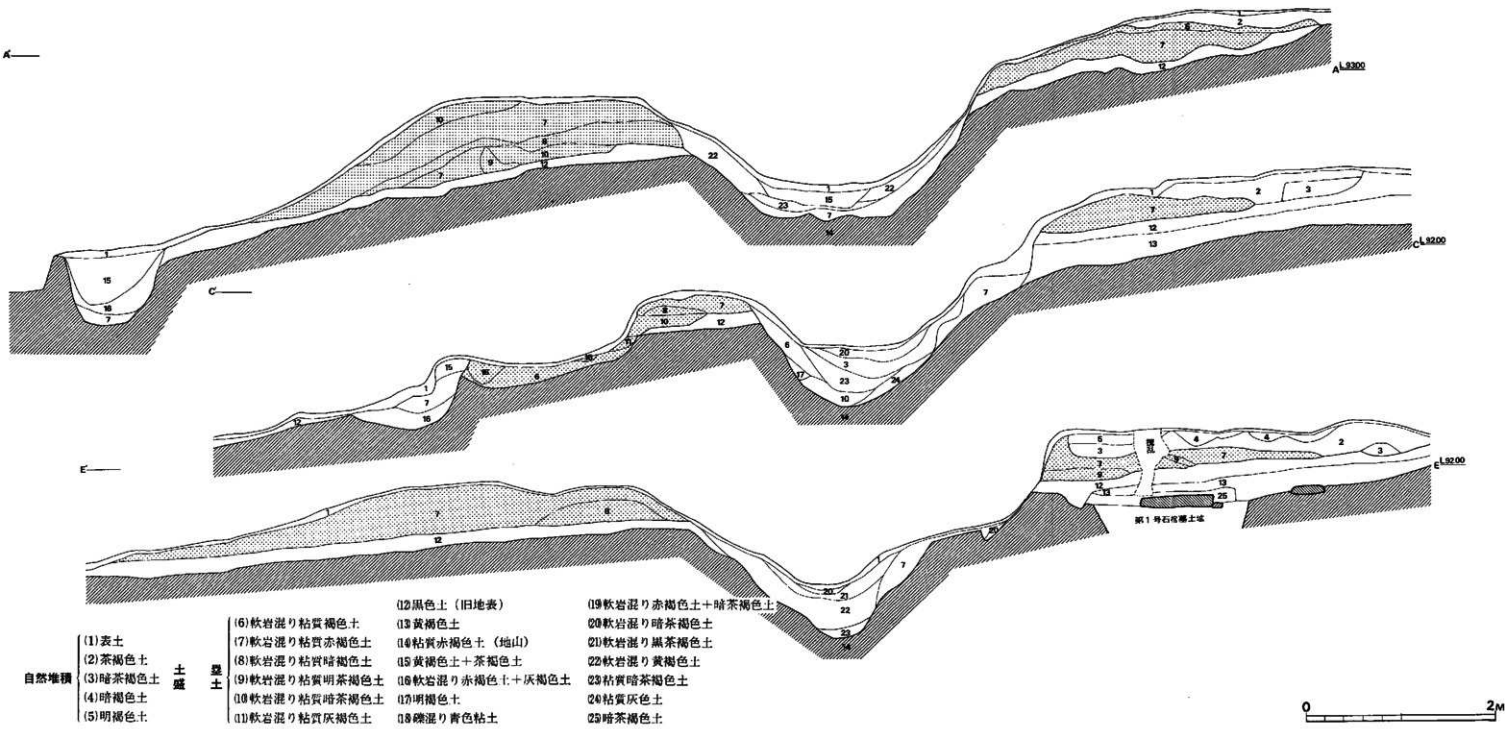


Fig. 29 茶白山城跡・茶白山遺跡全体図（縮尺1/1,000）



自然堆積

- (1) 表土
- (2) 茶褐色土
- (3) 暗茶褐色土
- (4) 暗褐色土
- (5) 明褐色土

土層

- (6) 軟岩混り粘質褐色土
- (7) 軟岩混り粘質赤褐色土
- (8) 軟岩混り粘質暗褐色土
- (9) 軟岩混り粘質明茶褐色土
- (10) 軟岩混り粘質暗茶褐色土
- (11) 軟岩混り粘質灰褐色土

- (12) 黒色土 (旧地表)
- (13) 黄褐色土
- (14) 粘質赤褐色土 (地山)
- (15) 黄褐色土 + 茶褐色土
- (16) 軟岩混り赤褐色土 + 灰褐色土
- (17) 明褐色土
- (18) 礫混り青色粘土

- (19) 軟岩混り赤褐色土 + 暗茶褐色土
- (20) 軟岩混り暗茶褐色土
- (21) 軟岩混り黒茶褐色土
- (22) 軟岩混り黄褐色土
- (23) 粘質暗茶褐色土
- (24) 粘質灰色土
- (25) 暗茶褐色土

Fig. 30 茶臼山風跡 A・C・E トレンテ土層断面図 (縮尺1/40)

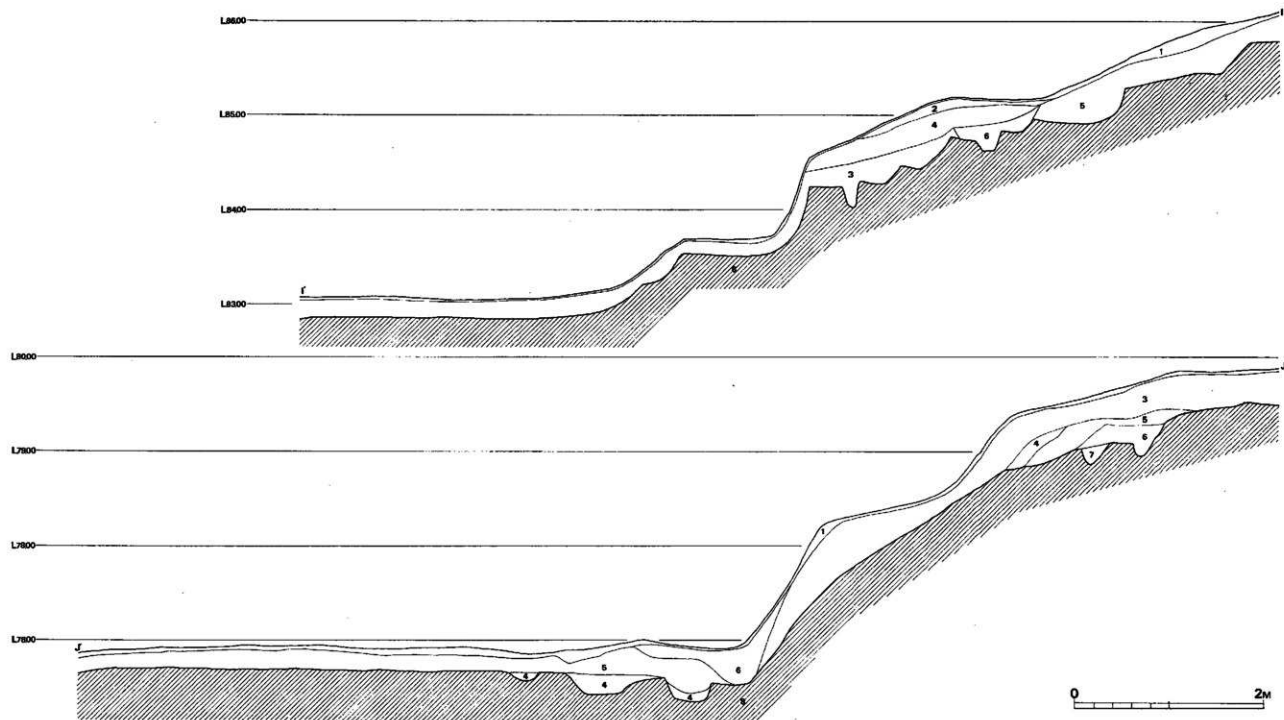


Fig. 31 赤白山城跡・Iトレンチ土層断面図 (縮尺1/40)

## Ⅲ 茶臼山城跡の調査

### 1. 調査の経過

遺跡は鞍手郡若宮町大字山口に所在する。発掘調査は、昭和49年8月5日から昭和49年10月31日まで実施した。調査団は次の通りである。

調査担当者	福岡県教育庁文化課技師	栗原和彦
	同	酒井仁夫
調査補助員		松村一良
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	山本文和
	嘱託	因将太

なお、調査にあたっては地元在住各位の協力があり、また現場実測、報告書作成に際しては伊東登美子の援助を受けた。

### 2. 調査の内容 (Fig. 29)

茶臼山城跡は若宮町大字山口にあり、若宮町所在の宮永城を主城とする宗像大宮司氏の山城の一つである。『大友家戦史』によれば、天文11年(1542年)、大友家の勇将戸次鑑速の率いる一万三千余の将兵によって落城の憂きめに至っている。分布調査時、茶臼山には斜面を垂直に切り落した崖や土塁、空壕が残っているのが観察された。

縦貫道は茶臼山(標高156.8m)から東北方向に延びる丘陵の基部を通過するため、丘陵基部に広がる平坦面について全面調査を実施した。また、この平坦面の南および東側を取り囲むように土塁、空壕が走っているため、それらに直交する5m×15mのトレンチを10m～15mの間隔で5本設定し、北側斜面についても5本のトレンチを設定して調査を実施した。土塁、空壕に囲まれた丘陵平坦地には城跡に関連する遺構の存在が考えられたが、調査の結果、若干のピットと表土層から須恵器、磁器片等が検出されたのみであった。土塁・空壕は一部で農道と重なるため、旧状を著しく失っているが、Aトレンチから西側部分が比較的旧状を保っているのが観察された。なお、Bトレンチでは蔵骨壺1基が、Eトレンチでは箱式石棺墓1基が検出された。Eトレンチ付近に弥生時代の住居跡、墳墓群が検出されたが、これらについては茶臼山遺跡の項で触れることにする。

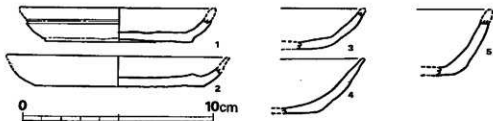
## 土壘・空壕 (Fig.30・31, P.L. 35~38)

表面観察では、いずれも茶臼山から東北方向に延びる丘陵鞍部の尾根に近い南側斜面から構築されており、90mの等高線に沿って東進し、鞍部から約130m付近で弧を描きながら丘陵平坦部を横断している。さらに空壕は北側斜面を標高70m付近まで下っている。土壘・空壕に直交するように敷定した5本のトレンチの土層断面図によれば、空壕を掘った際の土を外側に盛って土壘としている。比較的旧状を保っているAトレンチの土層断面図によると、土壘は旧地表土に盛土を行っており、土壘の基底部幅は約4m、現存する盛土高は約80cmを測る。空壕は浅いU字形をなし、空壕の幅は約3m、深さは旧地表面から約80cmを測る。壕底のレベルはAトレンチからDトレンチに向かって下り、再びEトレンチに向かって若干上がる。空壕の内側にも若干の盛土が認められたが、後世の削平が著しく、旧状を保っていない。なお、土壘盛土下の旧表土層から糸切り底を有する土師器小皿が数点出土したが、土壘・空壕の築かれた年代を考える上で、上限を示す資料といえよう。(松村)

## 3. 出土遺物 (Fig.32~34, P.L.39~44)

茶臼山城跡出土の土器・陶磁器類について茶臼山城跡は、小原古墳群をとり込んでいると考えべきもので、古墳時代以外のものは、一応この城跡との関係あるものないものも含めて見ておくこととした。従って古墳群と関係のないものは、みなここに含まれることとなる。出土遺物は主に土器・陶磁器類で、量的にはごく少ないが土師器・黒色土器・須恵器・青白磁類などが出土している。

土師器 土師器は、いわゆる灯明皿の器形のものがある。Fig.32-1は口縁部を欠くもので、内面はナデつけられている。外面には、口縁に平行のナデがみられ沈線状の深いものもある。底部は糸切り底であり、糸切りをしたときの粘土のぼり出しが見られ台をつけたような感じを与えている。茶褐色を呈し、胎土にはほとんど砂粒を含まない。焼きは良い。2も口縁の欠損したもので約底部3分の1の破片である。底径を復原すると1よりわずかに大きくなりそうだ。内面はナデつけ、外面は糸切りらしいが荒れがめだつ。淡赤褐色で、胎土に細砂粒をまじえる。焼きはわるい。3は6分の1ほどの破片で、全体をうかがうことはやや困難である。口縁のたがりは、Fig.32-3ほどとなる。焼きが悪く内外面ともに手でさわれば剥落する。

Fig. 32 茶臼山城跡出土土師器実測図(縮尺 $\frac{1}{4}$ )

茶褐色を呈し、胎土に砂粒をまじえない。4は、口縁端部を残す小破片である。断面のみを図示したが、前三つの土器よりもやや大きくなる。内外面ともよこナデで底部は糸切り痕跡を残している。茶褐色で、蜜罎を胎土に少量まじえている。焼きは良い。5はやや器内の厚い土器である。3×5cmほどの破片のため断面のみを図示した。4に比較してやや急な立ちあがりをしめす。内外面ともに荒れがひどい。

**黒色土器** Fig.34—14は、黒色土器B類の土器片である。底部の一部分の破片であるが、土壘盛土中から発見されたものである。内外面とも黒色処理されていて、内面にはへら磨きの痕を残す。黒灰色で胎土に砂粒を含む。焼きは良い。

**須恵器** Fig.34—1は、須恵器の蓋である。地山直上から出上している。口縁端部を欠くが全体的に形の整った感じを与え天井部ではつまみが丁寧にとりつけられている。整形は外面はへら削りのあと指で丁寧によこナデをしている。内面は中央部では横方向のナデつけ。口縁近くではよこナデ。外面は、黄味がかつたくすんだ灰色、内面は暗青灰色である。胎土に細かい砂粒を含む。奈良時代後期頃のものであろう。2, 3, 8の須恵器は、Bトレンチから一度に出土したもので火葬骨を埋納していたものと思われるが、埋納後、一度掘り起こされた形跡があるので (Fig. 33) その時に骨は失われたものと思われる。出土状況から見て、3の高台付椀が白石のうえにすわっているの、これが動いていなかったとすれば、2は逆さに置かれていたと推定される。2は、口縁から胴中位にかけて約5分の1を失うが全体の形を知るうえで影響はない。やや外反ぎみの短い口縁であり、肩はやや、なで肩となっている。肩部外面は荒い櫛状の横目が轆轤により走る。内面は、丁寧によこナデされているが、肩部と底部のやや上で接合されたいことが断面にうかがえる。高台は、割合に高く、端部で外反りを見せて古い形を残している。内外面とも、ややくすんだ青灰色を呈し、焼きはよいほうである。胎土には1mm前後の細かい砂粒をまじえている。この土器は、

柳ヶ谷の火葬墓の蔵骨器よりやや肩がなで肩となり、西谷火葬墓2号墓の蔵骨器よりは肩部の張りがややつ

註2

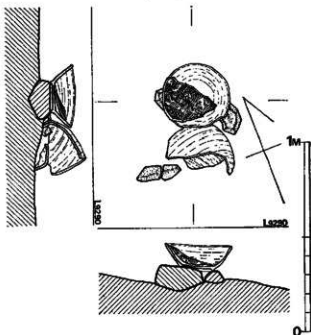


Fig. 33 茶臼山城跡須恵器出土状況図 (縮尺1/20)

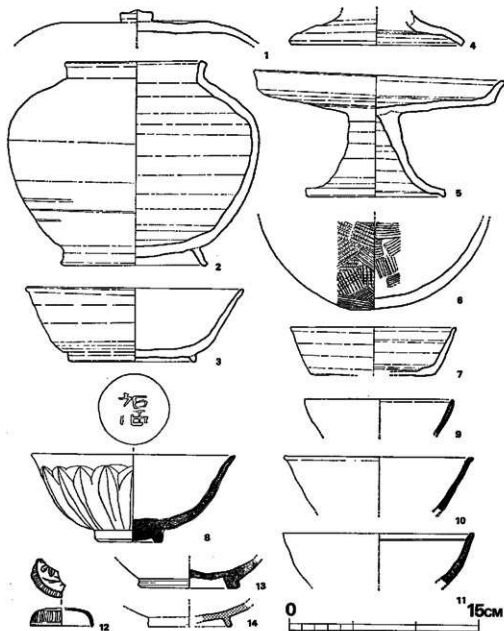


Fig. 34 茶臼山城跡出土土器実測図（縮尺1/4）

よく、また、器のつくりもよいようなので、形式的に単純に考えてこの両者の間にとらえた  
 い。奈良時代後半の時期におおよそ。3は高台付の碗である。口縁の一部を欠損しているだけ  
 ではほぼ完形である。口縁はやや厚手の底部から丸味をつけながらちあがり、口縁端部でやや  
 つよく外反りする。高台は、貼りつけて丸く低い。内外面ともに丁寧になでつけられている。

底部外面には、板目方向の叩打痕を残す。全体に暗灰色を呈し、胎土に細砂粒をまじえる。2の蓋として考えられるので奈良時代後半の時期における。8も3に重なって発見された壺の底部で内外面ともに、荒い叩打痕を残している。4は蓋または壺の脚部の破片である。降灰釉が外面にかかっているため、口縁端とは考えられない。やや内彎ぎみの張りのある曲線を示し、端部内外面はよこナデである。内面接合部に近い部分にヘラ削りを残す。表面には降灰がかぶり黄褐色になっている部分と黒くつやのある部分とある。内面は黄褐色で焼きは良い。胎土には細砂粒を含む。古墳時代後半のものである。5の高杯は、杯部が皿の器形を呈するもので、これにラッパ状の脚部をとりつけている。3分の1ほどの破片を失っているが、全体の器形はうかがえる。杯部の口縁はやや外反ぎみに立ちあがるが短くて丸い。内外面ともよこナデでされている。杯部内底面はナデつけ。外底面はヘラ削りの痕をそのまま残している。脚部は、接合部に粘土を盛ってしっかりととりつけ、すそを大きく開かせて安定させている。内外面とも丁寧なナデで仕上げられている。暗灰色を呈し、胎土に細砂粒がまじる。奈良時代後半のもの。7は杯の破片で全体の4分の1ほどの破片である。器内の薄い底部から、口縁は直線的に外反し、端部でやや外反りを見せる。内外面ともよこナデ、外底面にヘラ削りを残す。灰色で焼きも良い。胎土に細砂粒をまじえる。奈良時代後半のものである。

青磁・白磁類 遠國遺跡出土の青磁・白磁について詳細に解説がなされているので、ここでは、これに従っておくだけとしたい。Fig.34—8は、【碗A群】として報告されたもので内底面に「福」の刻印がうたれ、外面に篋で鍔蓮弁をつくっている。くすんだ緑色の釉が高台までかけられている。生地は、灰色を呈し焼きもよい。11もこの系統の口縁の破片である。内外面ともに無文様である。赤紫色の生地に濁った暗緑色の釉が全面にかかっている。【碗A群】としては、この外にP.L.41—18・17, P.L.42—15などがある。

8は【碗B群】の青磁片である。薄緑色の釉がかけられていて貫入がみられる。この破片外面には櫛状の文様が施文されている。同類のものには、P.L.42—19などがあり、内外面ともに施文されたものにはP.L.42—18・20・21がある。

P.L.43—22~28は【碗C群】に属する青磁片である。櫛と篋とで蓮華文を施している。内外面全体に櫛によって連続する蓮華磨草文を施している。釉は、薄青緑色を呈し、底部高台内側までかけられたものがある。12は影青の合子の蓋の破片である。口縁を端座に作り、天井部に草花文を配しているが、草花文の全体を知り得ない。釉は青白色にあがるがやや濁っている。型押文様のレリーフの高い部分は、釉のかかりが薄く茶褐色になっている。10は口縁部が鋭く水平におわる碗の破片である。亀井分類の白磁のⅠにあたる。釉は白濁しているが口縁の特徴をよく残している。P.L.40—28・29・30は、亀井分類の白磁のⅠにあたる玉縁口縁で黄白色の釉で内面および外面の上半部にかけている。底部の破片では高台の削り出しは浅くあいまいである。12は、国産の陶器で肥前系統と亀井氏の表示があった。底部を深く削り込ん





Fig. 36 茶臼山城跡出土古  
銭拓影図(跡尺寸)

で高台を作り、内面中央がやや盛りあがっている。釉は薄い黄緑色で内面から外面上半にかけて施されている。生地は淡茶褐色で硬い。内面に重ね焼きの痕が残る。P.L.44-32は、小形の皿の器形となるものと思われる。底部はアゲ底で露体のままである。内外面ともに白濁した釉が施されて貫入がある。

その他の遺物 (Fig.35, P.L.52-9)

開元通宝一枚の出土がある。蔵骨器に関連したものか。

出土遺物を概観して見た場合、奈良時代後半期の須恵器の一群と、12世紀以降の糸切り底の土師器・青白磁類の一群とに大きく分かれる。奈良時代後半期の須恵器の一群のうち、Fig.34-2・3・8は蔵骨器として使用されたものと考えてまちがいはない。

開元通宝・高杯・杯・蓋などは、遺構に伴ったものではないが、郡地原・柳ヶ谷墳墓などからも蔵骨器の出土が見られるので「和名抄」の十市郷との関係においての一つの問題を提起した資料と言えよう。また、糸切り底の土師器と青白磁類などの一群は、12~14世紀におかれるものであるが、築城の時期を示唆していると言えようか。 (栗原)

註1 上野精志 『柳ヶ谷墳墓』「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ」福岡県教育委員会 (1977)

「くらのむかし その3」『墳墓』福岡県教育委員会 (1976)

註2 渡辺正気・宮小路賢宏 『遺構・遺物の概要』「西谷火葬墓群」久留米市教育委員会 (1971)

## 4. 小 結

茶臼山城跡の範囲については、どのように考えるべきであろうか。「戦史」の文章では宮永楸本城の前進基地的な感じをうけ、見板峠の首根の防衛拠点として尾園城とともに比較的重要な城砦であったようだ。標高156mの山頂部を本陣的なものとすれば縦貫道の通過した丘陵上の平坦部は、前戦基地的なもので土塁・空壕をめぐらす必要があったのではないか。また里古墳群、小原古墳群は、山口川の河川改修（昭和の20年代）の際、多量の石材を横穴式石室から採取して使用したといわれるが、青白磁片が小原古墳群の周辺および石室採取り穴から出土していること、一部、土塁の下に入る土墳墓群〔「九州自動車縦貫道関係埋蔵文化財調査報告Ⅺ」—小原古墳群〕にも青白磁片が伴っていたことを合せて考えると、古墳も防衛拠点の1つとして利用されたとも想定され、土墳墓も天文11年の合戦の時のものとは言えないまでも殺された侍達の墓かとの想定も出来る。つまり、茶臼山城跡の範囲は茶臼山の山頂から北東に張り出す丘陵一帯と考えてよいのではなからうか。

空壕・土塁は平行して城の西側里の集落から東に登り、丘陵頂部東側で縦貫道を横断するように南に折れまがる。空壕のなかを歩いて里の集落と丘陵上の平坦部と出入りが出来ることも尾園城跡との連絡を考えるときに興味深いものがある。土塁は、空壕を掘ったときの残土を積みあげただけの簡単なものだ。現状では、土塁としての役割を果たし得ないが、発掘調査によって空壕内の埋土を残存土塁（高い部分で1m）上に盛り上げて考えた場合、一定の役割を果たし得たのだろう。このように設置された空壕・土塁のありかたは、都市原から宮田方面への備へであり、尾園城とのつながりから見板峠への備へともなったであろう。丘陵中央の縦貫道が通過する平坦面では、まとまりをもつような遺構は発見出来なかった。が、後章で、茶臼山遺跡として報告する北半部での遺構の残りかた、蔵骨器を出土した東の部分のありかたを考えると、この丘陵の頂上部の1m以上をなにかの目的で削平したものと思われた。

城域内と考えた部分からの青白磁片や土師器・黒色土器は、城砦としてこの場所が使われた時期（12～13世紀）を示すものであろう。宗像氏が鞍手の地に自領を拡大してくるのもほぼこの頃からと考えてよいだろう。「戦史」にいう合戦の時期について、文献のうえと遺物のうえとからも証明することが出来なかったのは残念なことであった。戦国の世に鞍手地方の人々が、自分達の意志とは無関係に戦乱に巻きこまれざるを得なかった状況を「戦史」は伝えている。「戦史」にまつという女性が登場し、大友側の美談として飾られている部分があるが、農民の苦悩を証したものである。茶臼山城跡は、その合戦の一舞台であった。

「時に天文11年壬寅閏4月27日の夜半落城し後の世に残る千草の秋の色、昔を慕ふ女郎花・桔梗・苺カヤ年毎に昔語りの例なり。」  
(栗原・松村)

PLATES

茶 白 山 城 跡



茶臼山城跡・茶臼山遺跡航空写真（東北から）



(1) 茶臼山城跡航空写真(東より)



(2) 茶臼山城跡空深部航空写真(西より)



茶臼山城跡土壘空濠部発掘前の状況(東から)



(1) 茶臼山城跡Aトレンチ西壁土層断面(東から)



(2) 茶臼山城跡Eトレンチ西壁土層断面(東から)

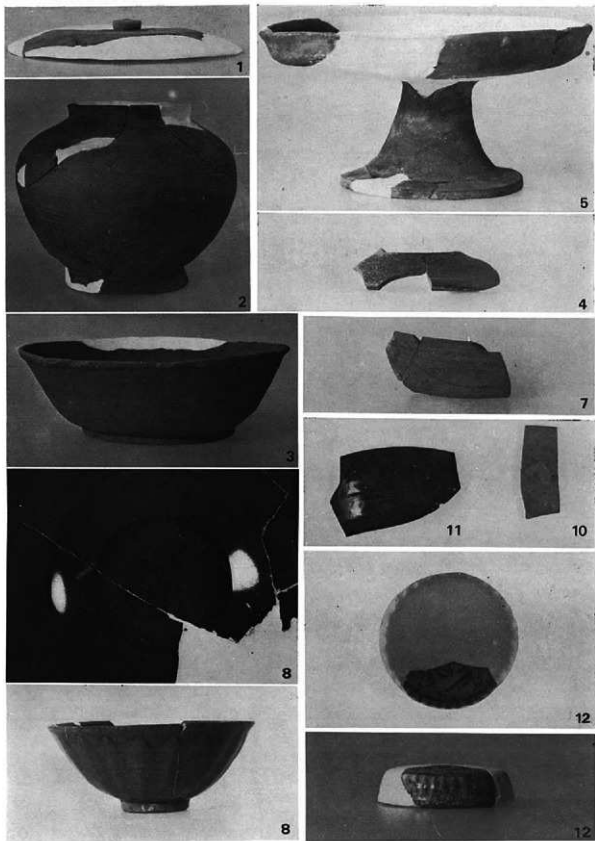


(1) 茶臼山城跡Cトレンチ西壁土層断面(東から)

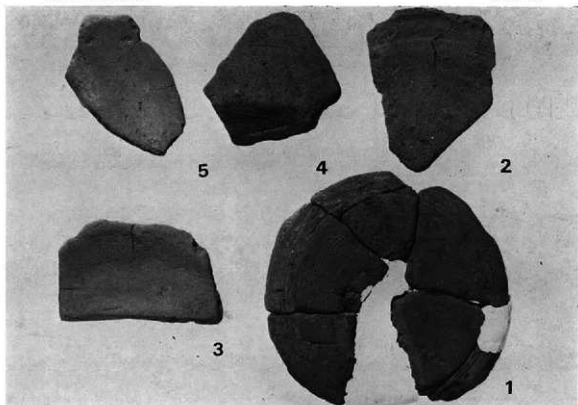


(2) 茶臼山城跡Bトレンチ内蔵骨器出土状況(西から)

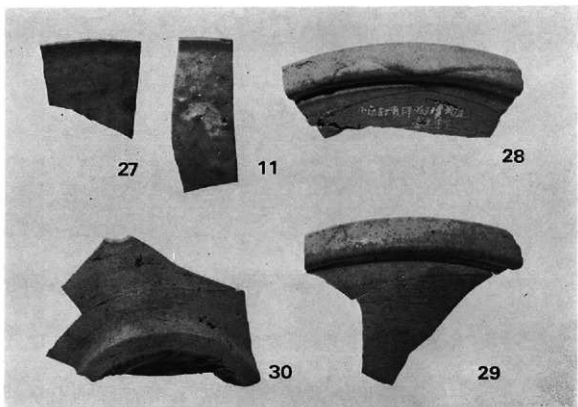




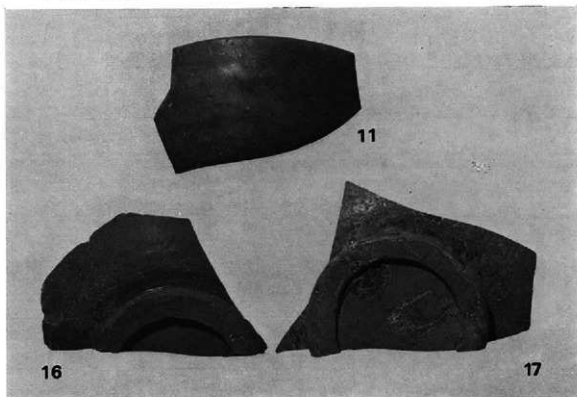
茶臼山城跡出土遺物の主要なもの



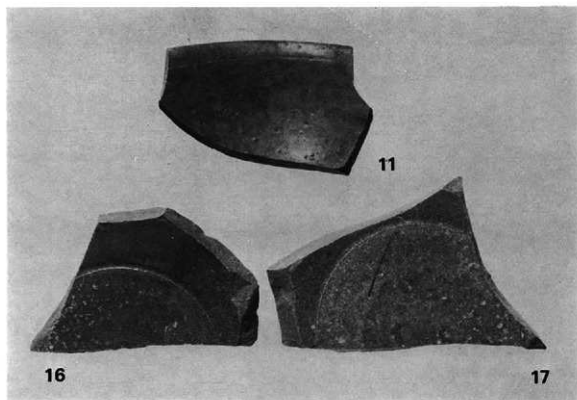
(1) 茶白山城跡出土土師器



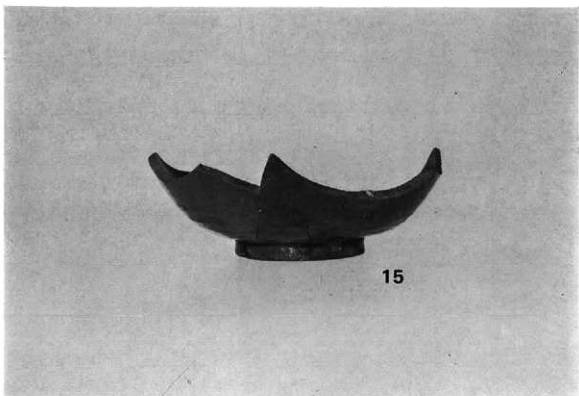
(2) 茶白山城跡出土白磁碗



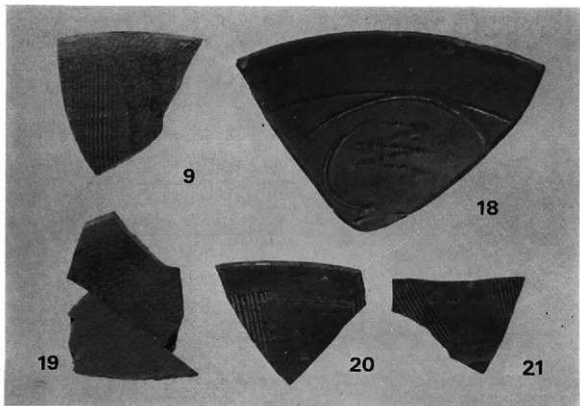
(1) 茶臼山城跡出土青磁碗A類（外面）



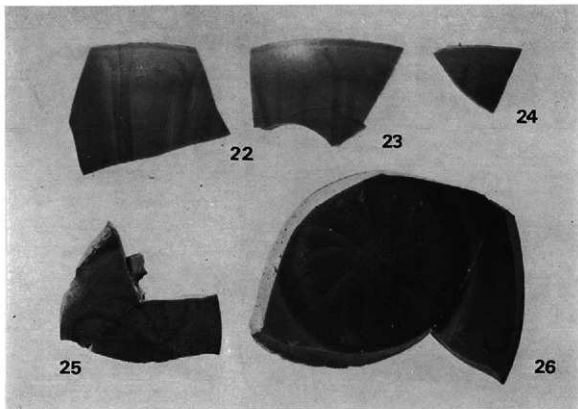
(2) 茶臼山城跡出土青磁碗A類（内面）



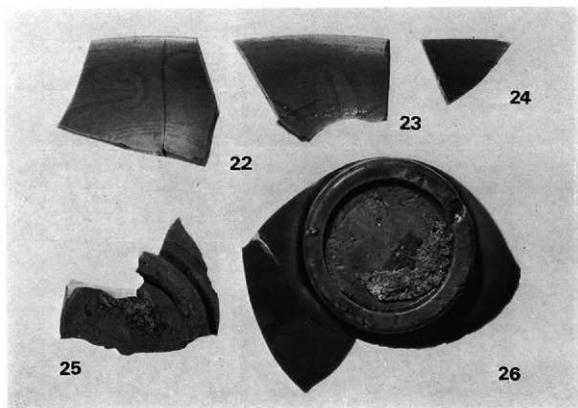
(1) 茶臼山城跡出土青磁碗A類



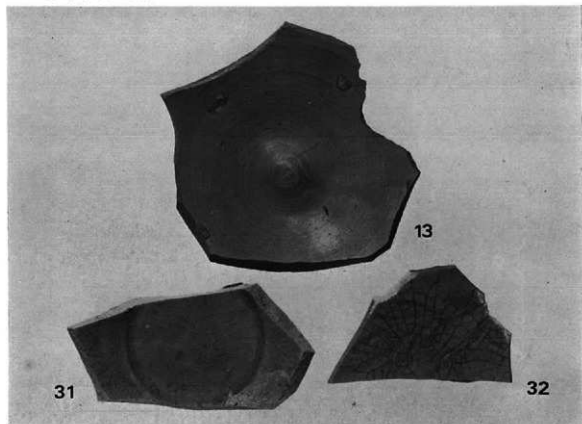
(2) 茶臼山城跡出土青磁碗B類



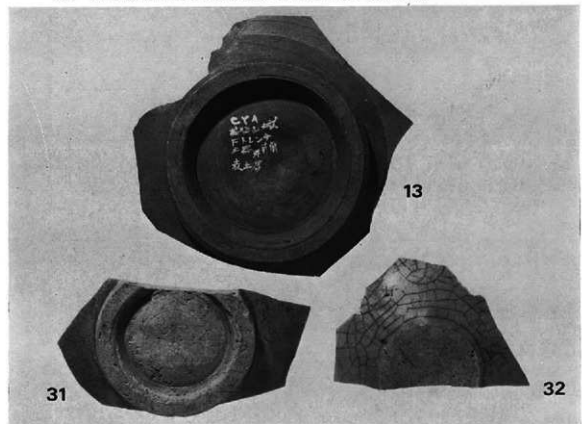
(1) 茶白山城跡出土青磁碗C類 (22~24は外面・25・26は内面)



(2) 茶白山城跡出土青磁碗C類 (22~24は内面・25・26は外面)



(1) 茶臼山城跡出土青磁碗B類 (31) と国産陶器 (13・32) の内面



(2) 茶臼山城跡出土青磁碗B類 (31) と国産陶器 (13・32) の外面

## Ⅳ 茶白山遺跡の調査

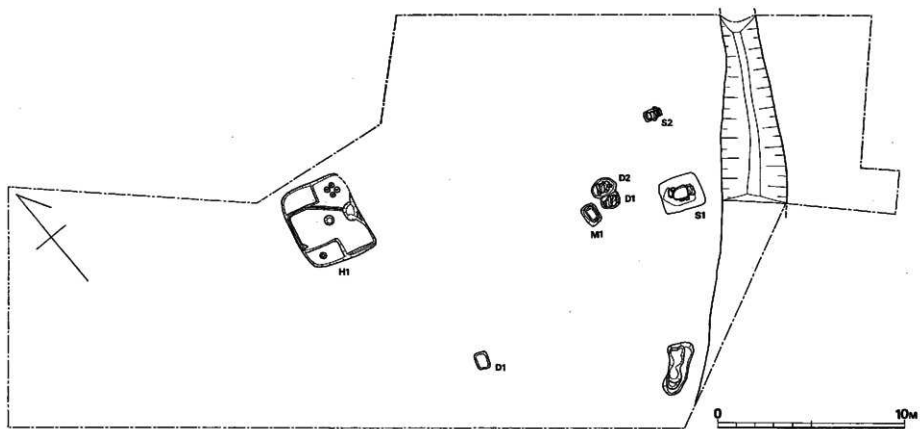


Fig. 36 茶臼山遺跡遺構配置圖(縮尺1/200)



## IV 茶白山遺跡の調査

### 1. 調査の経過

本遺跡は茶白山城跡の調査の際、縦貫道道路敷内を横断する土塁、空壕に設定したEトレンチにおいて箱式石棺墓1基が検出されたことが遺跡発見の端緒となったものである。発掘調査は、茶白山城跡の調査と併行して、1974年（昭和49年）9月20日から10月21日まで実施した。

調査団は次の通りである。

調査担当者	福岡県教育庁文化課技師	栗原和彦
	同	酒井仁夫
調査補助員		松村一良
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	山本文和
	嘱託	因将太

なお、調査にあたっては地元在住各位の協力があり、実際には高田一弘、伊東登美子の援助を受けた。

### 2. 調査の内容

茶白山遺跡は、鞍手郡岩宮町大字山口字小原にあり、犬鳴山系の三坂峠東方より発する山口川の右岸、茶白山（標高156.8m）から東北に延びる丘陵の端部に近い尾根平坦地に位置し、標高約90m、北側水田面よりの比高約20mを測る。まず、箱式石棺墓が検出されたEトレンチを中心に周辺に拡張した結果、さらに箱式石棺墓1基、石蓋土墳墓2基、木棺墓1基、土墳墓1基、土溝1箇所、住居跡1軒が検出された。

#### 遺構と遺物 (Fig.36~47)

##### 第1号住居跡 (Fig.37, P.L.45)

丘陵尾根上に位置し、主軸方位N-13°-Eを測る。平面プランは長辺4.3m、短辺3.4mの隅丸長方形を呈し、西壁にやや張り出しが認められる。壁高は西壁で最大値30cmを測るが、緩傾斜のため東北のコーナーは検出できなかった。西壁の両コーナーには長方形を呈する削出しのベット状遺構が附設されている。住居跡中央の円形ピットは、火熱をうけて内部が固くまっっており、焼土、炭化材などの堆積が顕著に認められたことから炉跡と推定される。東壁中央に

は不整三角形を呈する削出しの階段状遺構が附設されている。西壁直下の周溝底のレベルは東壁に接する楕円形ピットに向って緩傾斜となる。楕円形ピットの埋土は非常に堅くしまっており、土器細片、炭化材などを多量に含む。また、軟岩を多量に含む粘質土（地山）を床面としているので、全体に強く踏み固められているが、特に階段状遺構周辺の床面が堅緻である。住居跡の出入口を想定させる。

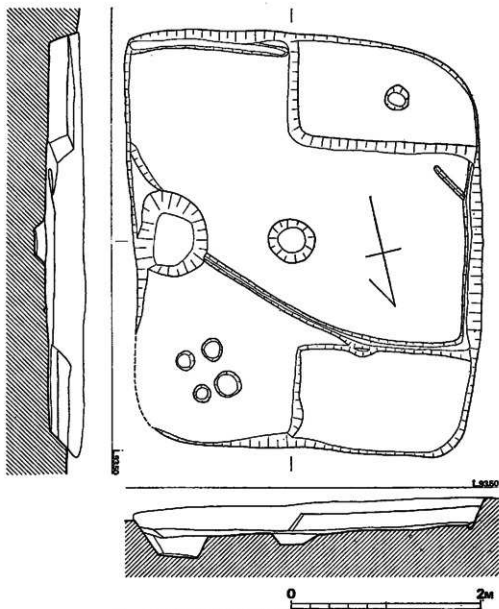


Fig. 37 茶臼山遺跡第1号住居跡実測図（縮尺1/40）

住居内より他に数箇所のピットが検出されたが、いずれも明確に柱穴と確認できるものではない。

遺物は、弥生式土器約20個体分が出土したが、そのほとんどが住居跡北側部分の床面から集中して検出された。また、住居跡東南コーナーより砂岩製砥石2点が出土したが、不注意により、取上げ前に粉失した。

### 遺物

#### 壺形土器 (Fig.38-1・2・11, P.L.46)

1は扁球形の胴部にほぼ垂直に立上がる頸部がつき、胴部の最大径をなす部分で曲折して平底に連なる。器壁は全般に薄手である。口頸部内面には指圧成形の痕跡を残しており、外面は横ナデを施すが、胴曲折部は刷毛目で仕上げている。胎土には多量の砂粒を含むが、焼成は良く、灰黄褐色を呈する。口縁部径9.0㎝、胴部最大径15.7㎝、器高19.5㎝を測る。2は二重口縁をなす壺形土器の口縁部である。口唇部はわずかに外側に引伸している。外面は横ナデ調整後、粗い刷毛目を施す。比較的精選された良質の胎土を用いており、内外面ともに灰黄褐色、一部黒色を呈する。焼成は良好である。11は胴上半部を欠失する。胴中央部に刻目をもつ1条の突帯をめぐらす。胴部内外面ともに横ナデ調整であるが、突帯直下には粗い刷毛目を施す。底部は平底の痕跡を有するが、むしろ丸底に近い。2と胎土、色調、焼成が類似しており、同一個体の可能性がある。

#### 壺形土器 (Fig.38-4~10・12, P.L.46)

いずれも「く」の字口縁をなす壺形土器である。4は短く外反する口縁部をもち、胴張りの胴が按続するものと考えられる。口頸部内面に指圧成形の痕跡を残す。内外面ともに粗い刷毛目で仕上げている。焼成は良い。全般に薄手である。5は内外面ともに刷毛目を施す。8は横ナデ調整で仕上げしており、外面に煤が付着している。7は復元口縁部径(復元値)24.0㎝を測る。胴張りが著しい。口頸部以下に煤が付着している。8は頸部から真直ぐ外反する口縁部を有し、胴はほとんど張ることなく、全体に細長い器形を呈する。底部は平底状をなすが丸底に近い。内面は頸部から胴下部にかけて刷毛目を施したのち、ナデ調整で仕上げている。外面は器面の荒れが著しい。胎土は粗い砂粒を含み、焼成は不良である。9は大形の壺形土器で、胴下部以下を欠失する。真直ぐ外反する口縁部に肩の張らない胴部が続く。最大径は胴中央部にあり、26.8㎝を測る。頸部以下内外面には刷毛目を施しており、外面には煤が付着している。胎土に多量の砂粒を含むが、焼成は良く、黄褐色を呈する。10はわずかに外反する口縁部にやや胴張りのある胴部がつく。最大径は胴部中央よりやや下位にある。口唇部には面をとっており、口縁部内外面を横ナデ調整で、また頸部以下内外面を刷毛目調整で仕上げている。色調は外面は褐色、内面は淡褐色を呈する。胴下半部内外面に煤が付着している。胎土に多量の砂粒を含むが、焼成は良好である。器面の荒れが著しい。12は壺形土器の底部と考えられる。底部

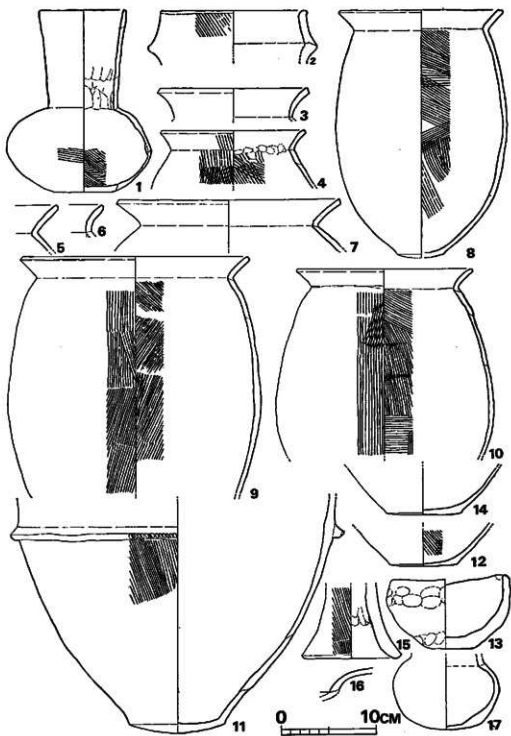


Fig. 38 茶臼山遺跡出土土器実測図 (縮尺¼)

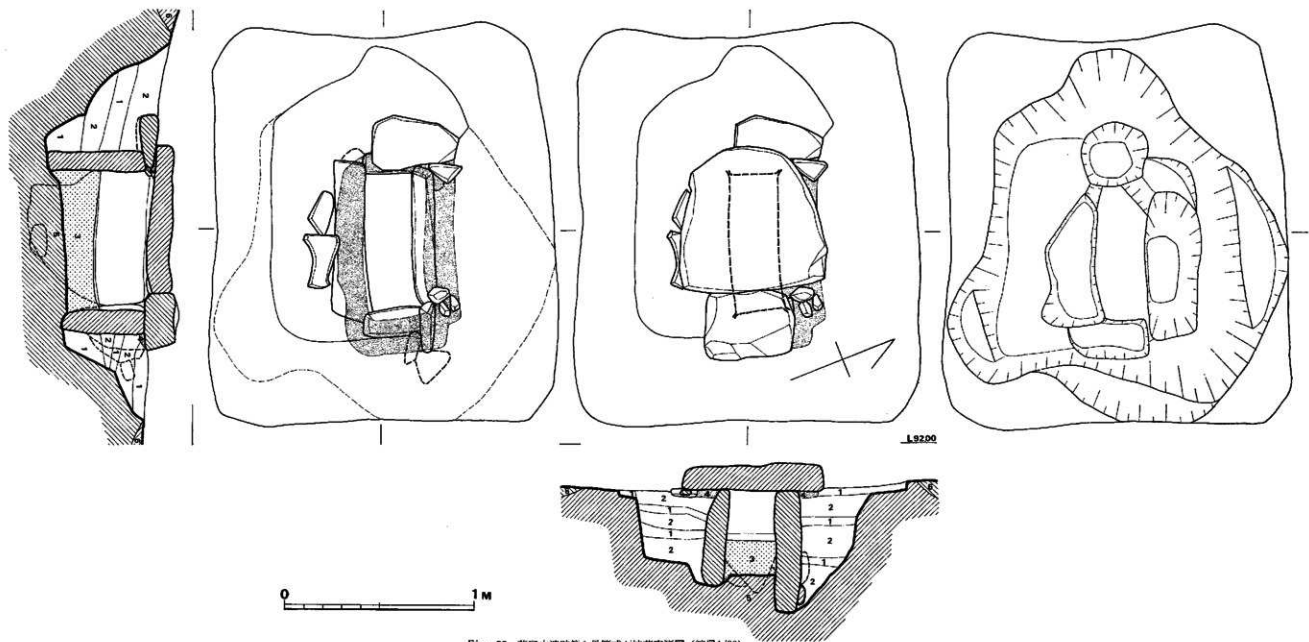


Fig. 39 赤白山遺跡第1号窟式石柁蓋実測図 (縮尺1/20)

は平底をなすが若干脹らむ。内面は刷毛目で調整され、外面はナデ調整によって仕上げている。器壁は全般に薄手で、灰茶褐色を呈し、焼成は良い。

#### 碗形土器 (Fig.38-13, P.L.52)

13は手捏ねの碗形土器である。内外面ともに指圧成形の痕跡が顕著に残る。器壁は厚く、口縁部も不揃いである。底部は平底をなす。暗赤褐色を有し、胎土に多量の砂粒を含むが、焼成は良い。口縁部径12.6cm、器高7.8cmを測る。

なお、図示していないが、他に脚部に孔を穿った高坏形土器片、器台形土器片が出土している。

住居跡の時期は出土した土器により弥生時代後期末に比定できよう。

#### 第1号箱式石棺墓 (Fig.40, P.L.47-48)

本墓は石材に安山岩の板材を用いた小形の箱式石棺墓である。墓壁は、軟岩混り黄褐色土層(地山)面に方形の平面プランを呈する赤褐色粘質土(地山)に掘り込まれている。遺構検出時には方形を呈する赤褐色粘質土を掘り方埋土と考えたが、調査の結果、実際の掘り方はひとまわり小さい不整形方形を呈することが判明した。墓壁底にはさらに四圍壁に沿って各々1箇所ずつピットを掘り込んでいる。棺身には10cm～15cmの肉厚な板石を兩側壁、両小口に各々1枚用いている。

棺内法は長さ72cm、幅25cm、深さ25～29cmで、棺床は西から東へ緩やかに傾斜する。主軸方位はN-71°-Wを測る。棺床は墓壁底に黄褐色粘質土を版築状に突き詰めており、1.5cm程度の厚さに10数枚割ぎ取られるのが観察された。

棺内には酸化鉄と推測される赤色顔料が四壁、棺床全面にわたって塗布されており、蓋石も棺内だけ付着している。

蓋石は大小2枚の板石が使用されているが、棺身の上縁を揃えるため、西側小口板の上に1枚の板石を挟入して、さらに蓋石と棺身との間隙を青色粘土によって丁寧な目張りを行なっている。棺内には上砂の流入はほとんどなく、棺内に埋葬遺体、副葬品等は認められなかった。本墓の被葬者は、棺の内法から乳児と推測される。なお、棺身と墓壁掘り方との間には赤褐色粘質土と暗褐色土混り灰黄褐色土が交互に堅く突き詰められており、赤褐色粘質土層から弥生式土器片が出土した。本石棺墓の築造年代を知るうえで、上限を示すものとして重要である。

弥生式土器 (Fig.38-3) 3は壺形土器の口縁部で、器壁を増しながら外反する。口唇部には面をとり、内外面ともに横ナデ調整である。茶褐色を有し、焼成は良好である。

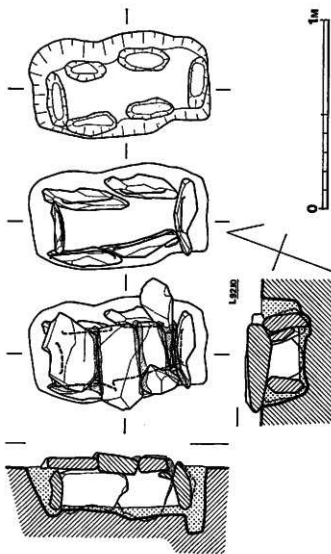


Fig. 40 茶臼山遺跡第2号新式石臼遺跡測図 (縮尺1/20)

## 第2号箱式石棺墓 (Fig. 41, P L. 49)

墓蓋は長軸約95cm、短軸約54cmの隅丸長方形を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。墓蓋底には両側壁に沿って各々2箇所、両小口に沿って各々1箇所の長楕円形ピットを掘り込んでいる。棺身は不整形の扁平な安山岩の河原石を用いて、両側壁に各々2枚、小口に各々1枚を配して組み立てている。一方の小口板は両側板によって挟入し、他方の小口板は両側板の外に出る形式である。棺底には、墓蓋底が平坦でないために薄く黄褐色土がほぼ水平に張られている。棺内法は長さ64cm、幅は北側小口壁下で27cm、南側小口壁下で21cm、深さは約19cmを測る。蓋石には安山岩の板石を3枚用い、蓋石と棺身との隙間を安山岩の塊石で塞ぎ、さらに灰青粘土によって蓋石間に丁寧な目張りを行なっている。棺内に土砂の流込みはなく、埋葬遺体、副葬品等は検出されなかった。本石棺墓の被葬者は、内法から頭部を北に向けた乳児で、仰臥伸展葬と考えられる。

## 第1号石蓋土墳墓 (Fig. 39, P L. 50・51)

第2号石蓋土墳墓によって一段目の掘込みを切られており、時間的には第2号石蓋土墳墓より先行するものである。

墓蓋は二段に掘込まれている。一段目の掘込みはほぼ東西に長軸のある長楕円形プランを呈し、上端長さ101cm、現存幅76cm、底面長さ96cm、幅66cm、深さ3cm~10cmを有する。

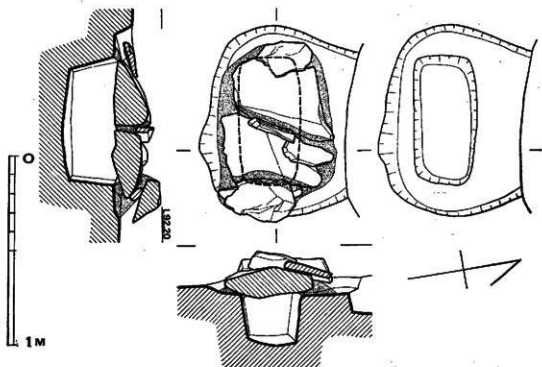


Fig. 41 茶臼山遺跡第1号石蓋土墳墓実測図(縮尺1/20)



二段目の掘込みは一段目の掘込みの中央よりやや南寄りに掘られている。平面プランは隅丸長方形を呈し、四壁はほぼ垂直に掘込まれ、床面はゆるやかにカーブする。いわゆる箱型墳と称されているものに相当する。主軸方位 $N-81^{\circ}-W$ 、上端長さ68cm、幅28cm~34cm、底面長さ60cm、幅26cm、深さ26cmを測る。

石蓋は二段目掘込み面上に置かれており、石蓋部長さ82cm、最大幅58cmを測る。石蓋石材には玄武岩系安山岩の内厚な割石を2枚用い、土嚢と蓋石、蓋石と蓋石の隙間を4枚の安山岩の板石で塞いだのち、灰青色粘土によって丁寧な目張りを行なっている。石蓋下面には黄褐色土が床面まで充填しており、蓋石のズレもなく、粘土による目張りも完全であることから土砂の流入は考えられず、遺体埋葬時における意識的な埋土と考えられる。

床面全面にわたって厚さ約1cmの褐色有機質土が認められたが、埋葬遺体は検出し得ず、副葬品も皆無であった。

本墓の被葬者は、墓壇の規模、形状から乳児の、西に頭部を向けた仰臥伸展葬と考えられる。

#### 第2号石蓋土墳墓 (Fig. 42, P.L. 50・51)

第1号石蓋土墳墓の一段目の掘込みを切って作られている。

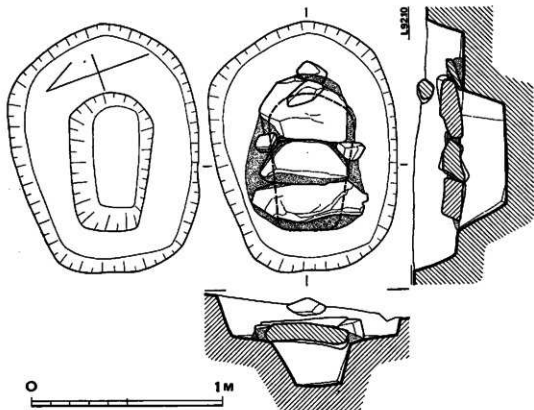


Fig. 42 茶臼山遺跡第2号石蓋土墳墓実測図 (縮尺1/20)

墓蓋は二段に掘込まれている。一段目の掘込みはほぼ東西に長軸のある長楕円形プランを呈し、両端、側面もカーブをとりつつ掘込まれ、上端長さ132cm、幅95cm、底面長さ119cm、幅84cm、深さ23cmを測る。

二段目の掘込みは一段目の掘込みのほぼ中央に掘られており、主軸方向N-70°-Wを測る。平面プランは不整な隅丸長方形を呈し、両端、側面とも傾斜をもつ、いわゆる舟形塚といわれるものに相当する。上端長さ72cm、幅42cm、底面長さ51cm、幅23cm、二段目の掘込み面よりの深さ24cmを測る。

石蓋は二段目掘込み面に置かれており、石蓋部長さ85cm、最大幅62cmを測る。石材として玄武岩系安山岩の肉厚な板石を三枚用いており、墓蓋と蓋石との隙間を同じく安山岩の塊石を三個用いて塞ぎ、さらに灰青色粘土によって蓋石間に丁寧な目張りを行なっている。

石蓋下面には黄褐色土が床面まで充滿しており、蓋石のズレもなく、粘土による目張りも完全であることから土砂の流入は考えられず、第1号石蓋土壌墓と同様に遺体埋葬時における意識的な埋土と考えられる。また床面直上には褐色の有機質土の薄い層が認められたが埋葬遺体は検出し得なかった。副葬品は認められない。

本墓は、墓蓋の規模形状から成人埋葬を推定するには無理があり、乳児の、頭部を東に向けた仰臥伸展葬と考えられる。

第1号木棺墓 (Fig.43, P.L.50)

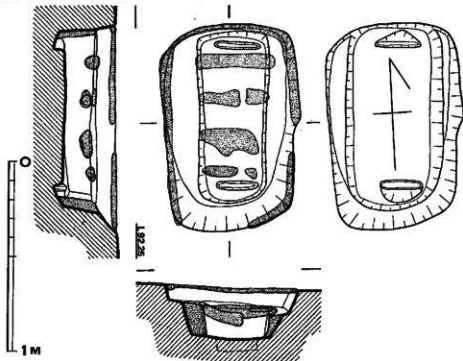


Fig. 43 茶臼山遺跡第1号木棺墓実測図 (縮尺1/20)

2基の石蓋土墳墓の西方に僅かに離れて埋置されている。主軸方位は、石蓋土墳墓、箱式石棺墓群のそれとはほぼ直交し、丘陵尾根稜線に直交する。

墓墳は隅丸長方形プランを呈し、南側短辺が緩やかにカーブしながら掘込まれているが、他の三辺はほぼ垂直に掘込まれている。長辺110cm、短辺68cmを測る。一部二段掘りである。

墓墳の上縁にはほぼ全周に渡って灰青色粘土の帯が認められる。

約10cm程掘下げた面で土層の変化があり、茶褐色粘質土層に暗褐色の長方形プランが検出され、長方形プランの長軸に直交する4本の灰青色粘土帯が検出された。

墓墳底には両短辺に沿って22cm×3cmの溝があらわれた。これによると、棺内法は70cm×21cm、深さ16cmで、木棺形式は小口板が両側板の内側に入る形式で、本墓に使用された木板の厚さは小口溝から推定して3cm以下である。主軸方位N-2°50'-Eを測る。

棺の蓋は土墳内の長方形プラン面上に4条の粘土帯が認められ、さらに長方形プラン内の埋土のしまりが墓墳内の他の埋土よりやわらかいことから、おそらく、棺の主軸に直交するように、幅約18cmの木板を5枚用いて蓋として、さらに木蓋間を粘土によって目張りしたものと推定される。また墓墳上縁に粘土帯がめぐっており、墓墳内の埋土のしまりが比較的不いことから、おそらく、墓墳上にも木蓋を被せ、粘土により目張りを行なったものと推定されるが、棺蓋と違って墓墳蓋は一枚板であった可能性が高い。

なお、埋葬遺体は遺存せず、副葬品は検出されなかった。本墓の被葬者は、木棺の規模、形状から乳児の、北に頭を向けた仰臥伸腿葬と考えられる。

#### 第1号土墳墓 (Fig.44)

第1号木棺墓の西南方向約9mに埋置されている。墓墳は長方形の平面プランを呈し、主軸方位はN-18°-Eを測る。耕作により墓墳の上部は削平されている。長軸85cm、短軸55cm、深さ約10cmを測る。墓墳内には褐色土が充填しており、灰青色粘土塊が三箇所認められた。埋

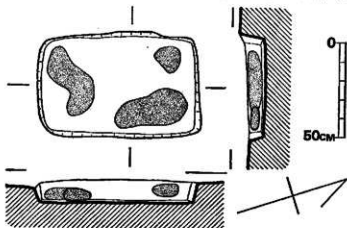


Fig. 44 茶臼山遺跡第1号土墳墓実測図 (縮尺1/20)

葬遺体、副葬品等は検出されなかった。

第1号土墳 (Fig.45)

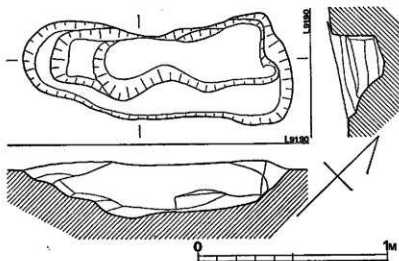


Fig. 45 茶臼山遺跡第1号土墳実測図 (縮尺1/20)

墳墓群の南西約7mの距離に離れて位置する。平面および断面との形状が極めて不整形を呈しており、墳墓に面するのに積極的な理由がみあたらないので、一応土塚として取り扱った。平面形は不整八角長方形を呈する。主軸方位はN-47°-Eを測る。南側小口壁は三段に掘り込まれており、床面は南側小口壁に向って緩やかに傾斜する。

その他の遺物

茶臼山遺跡の南側斜面一帯から土師器、石鏃、石砲丁未製品等が出土したが、いずれも遺構に伴なうものではなく、遊離したものであった。

土師器 (Fig.38-16・17, P.L.52)

16はEトレンチ土壘盛土中に含まれていたものである。二重口縁壺形土器の口縁部で大きく外反する。外面には粗い刷毛目を施す。色調は灰黄褐色を有し、焼成は良好である。17はCトレンチ土壘盛土内よりの出土である。口縁部を欠失する。内外面ともに器面の荒れが著しい。底部内面に指頭圧痕を残す。灰黄褐色を呈し、胎土は精製されているが、焼成は悪い。

石鏃 (Fig.46, P.L.52-8)

無茎式で黒色黒曜石を素材とする。形態は二等辺三角形を呈し、基部の扶りは浅くて大きい。両面とも細かに端整な剝離が行なわれており、極めて精巧に作出されている。最大幅1.7cm, 最大長さ2.5cmを測る。小原3号墳北側墳丘表土よりの出土。

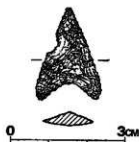


Fig. 46 茶臼山遺跡出土石器矢頭四(1) (縮尺1/1)

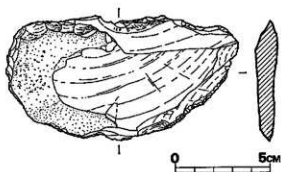


Fig. 47 茶臼山遺跡出土石器矢頭四(2) (縮尺1/2)

石盾丁未製品 (Fig.47, PL.52-7)

小原3号墳東側墳丘盛土中よりの出土である。小豆色の輝緑凝灰岩の横長剣片を素材とする。荒割りの素材の周縁に外形を整えるための剝離が行われている。この外形調整の段階から推察して、完成品の刃部は外彎すると考えられる。

## 4. 小 結

調査の結果、住居跡1軒、墳墓6基が検出された。

住居跡は4.3m×3.4mの隅丸長方形を呈する竪穴式住居跡で、ベット状遺構、炉跡、周溝を有する。出土した土器は弥生時代後期終末に比定されよう。長頸壺形土器を伴うことが注目される。

墳墓群は箱式石棺墓2基、石蓋土槨墓2基、木棺墓1基、土槨墓1基、からなっている。主軸方位は箱式石棺墓と石蓋土槨墓の4基はほぼ同一方位をとるが、木棺墓、土槨墓の2基は前者の主軸に直交するように埋置されている。いずれも丁寧な埋葬状況を示しているが、特に第1号箱式石棺墓はその構造、規模からこの墳墓群の中心的存在である。石蓋土槨墓はお互いに墓壁の一部を切り合っている。また石蓋のずれもなく粘土による目張りも完全であるにもかかわらず墓室内に土砂が充満していることは遺体埋葬時の意識的な埋土と考えられる。第1号木棺墓にみられる粘土帯は棺蓋材の架構方法を知るうえで貴重な資料といえよう。

これらの墳墓は全く副葬品等を伴わず埋葬時期は不明であるが、第1号箱式石棺墓墓室埋土中から弥生時代後期に比定される甕形土器口縁部が出土しており、弥生時代後期頃の所産である可能性が強い。またこれらの墳墓の被葬者はその内法からいずれも小児であると考えられ、集団墓地の1グループを形成している様相が強い。

今回の調査は縦貫道敷地内のみがその対象であったが、丘陵における占拠及び遺構配置からみて遺跡はさらに調査地東側の丘陵平坦部に広がる可能性が強い。 (松村)

PLATES

茶 白 山 遺 跡

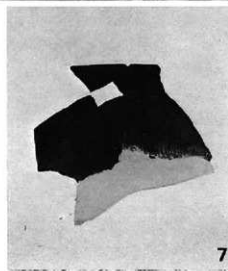
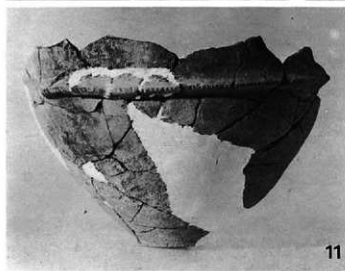
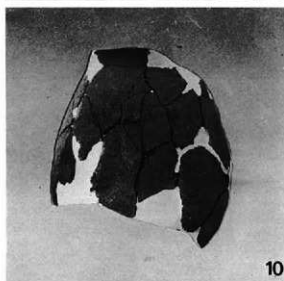
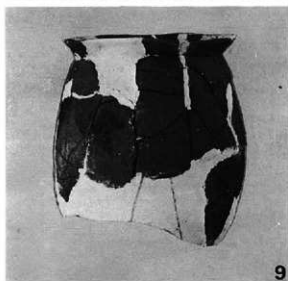
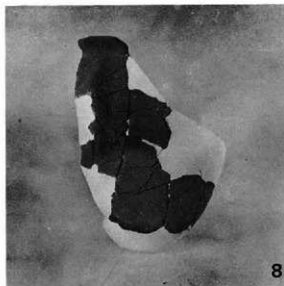
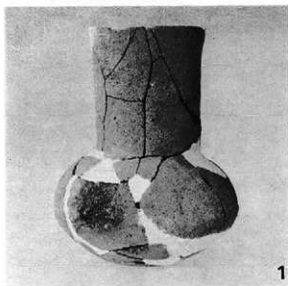


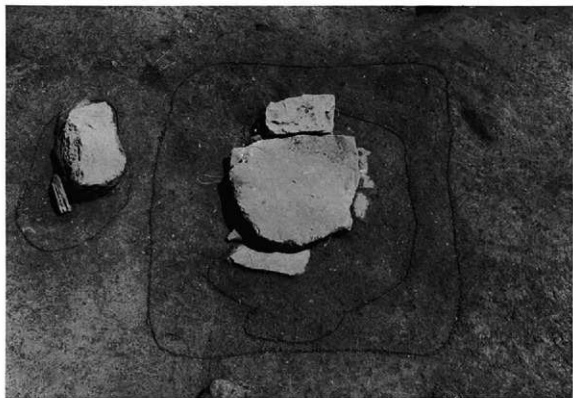
(1) 茶臼山遺跡第1号住居跡遺物出土状況(東から)



(2) 茶臼山遺跡第1号住居跡(東から)







(1) 茶臼山遺跡第1号箱式石棺墓(西から)



(2) 茶臼山遺跡第1号箱式石棺墓石蓋撤去後の状況(西から)



(1) 茶臼山遺跡第1号箱式石棺墓埋土排土後の状態(西から)



(2) 茶臼山遺跡第1号箱式石棺墓築掘り方(西から)



(1) 茶臼山遺跡箱式石棺墓 (西から)



(2) 茶臼山遺跡第2号箱式石棺墓石蓋撤去後の状況 (西から)



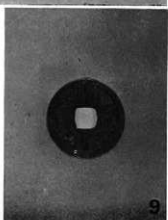
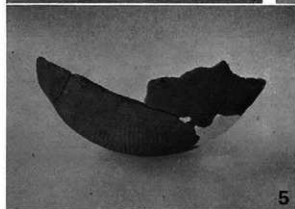
茶白山遺跡第1号・第2号石蓋土壇墓，第1号木棺墓



(2) 茶臼山遺跡第2号石蓋土甕竈石蓋撤去後の状況(西から)



(1) 茶臼山遺跡第1号石蓋土甕竈石蓋撤去後の状況(西から)



Ⅴ お わ り に



## V おわりに

これまでの報告してきたなかで、『筑前要領大友家戦史』でいう天文11年の時期と出土遺物との対比のなかで一つの問題が生じている。それは青白磁類を含めて14世紀の前半代の遺物のみであるという点である。また、その後、前書に登場する人物を、いくつかの類似した文献に登場する人物と重ね合わせて見られる部分があることが知られた。この章では、この2点について小考を試みたい。

遠園遺跡の場合、いくらかの青白磁類が遺構と結びつけて考えられ、これにより遺構の時期決定の判断の基準が得られた。また、茶臼山城跡では、土壘盛土中からFig.34-14の黒色土器の出土があった。黒色土器の時期からすれば、この土器は12世紀前半ほどの時期に置くことが出来るし、青白磁片との時間も同様な時期またはそれ以降のものとして、とらえられる。とすれば、城郭的なものの造営の時期を12~13世紀頃まで逆のぼらせて考える必要がありそうだ。一方、遠園遺跡では、前書に尾園本城、または下屋敷尾園城とみえるものとは直接結びつけて考えるべき遺構と言えるものは見あたらない。

しかし、輸入陶磁類を日常の容器として使用し得た人々は、北部九州とは言っても農民階級までおよんでいたとは考えにくい。とすれば、元寇以来、断えて久しかった大陸との交渉が天竜寺船にはじまるが、これからの陶磁器は以後、継続的に交易が行なわれた勘合貿易によってもたらされたものとは言えないか。が勘合貿易は、室町幕府の指揮下で15~16世紀初頭にかけて行なわれたもので、大内氏が最終的に絶対的な実権をもつようになるが、この時期のものと思われる遺物は皆無に等しい。しかし、日宗、日元交易によりもたらされた唐物愛玩の日本での流行は、元寇と言う難関を切り抜けた時におさまったわけではなく、密貿易が元や高麗との間に行なわれていた。文永・弘安の役後少弐氏はしだいに、北部九州の統率力が弱まり、大内氏の侵攻が目立つようになる。宗像氏は海神を奉斎する神職であり密貿易ともかかわりがあったことは疑いのないところであり、大内氏との結びつきもこのあたりに理由があるものと思われる。

註1

宗像氏の鞍手郡領地は、鞍手郡誌に掲載の文書によれば、文和2年(1358年)に芹田、稲光村を至徳4年(1387年)に宮田村鴨山、宮永村を、応久7年(1400年)に宮水17町、牟流木7町、石田5町をそれぞれ所領安堵されていることが知られる。その後も、武力を背景として鞍手一円を支配下におさめていったものである。

遠園遺跡、茶臼山城などの小城砦は、対外的には自領の確保と内政的には、荘園の政所的性格

格を持って生まれたものと理解したい。とすれば、これらの城の築城の時期を出土遺物が物語っているとするのが出来よう。

「筑前要領大友家戦史」の登場人物の2～3の人は「九州記」「宗像軍記」などの他の文献と重なることがわかった。その1人は、宗像側の鷹取城主毛利鎮実<sup>註2</sup>であり、「戦史」では十時抵津に生捕りとなっている。鷹取城主鎮実は「軍記」によると永禄4年(1561年)に大友方の案内者として許斐城攻めに参加し、天正10年(1582年)小金原の戦いにも大友側で登場する。このような登場人物は、宗像側では、杉権頭連並十郎がいる。杉は「戦史」では、熊龜龍ヶ岳城主として登場し、大友側に捕まりながらも、宗像に逃げかえる。「軍記」では杉の家臣跡部安芸守が許斐岳城を大友側が攻撃するのを遮ぎるところで登場し、「九州記」天正10年(1582年)の小金原の合戦でも宗像側の代表格で登場している。宗像側ではこの他に姓が永禄4年と天正10年登場する吉田少輔が同一人物と考えられる。大友側では、十時抵津守と十時十郎という人物が天文11年に、天正10年にも十時抵津なる登場人物が登場する。永禄4年には十河十郎という人が登場しているが、天文11年の十時十郎と同一人物とは言えないだろうか。以上が、文献を異にして重なり合い同一人物と思われる人達である。なかでも毛利鎮実、杉連並十郎は、これ以外の文献にもしばしば登場している。これだけの人物の重なりからだけでは無理があるが天文11年(1542年)と、天正10年(1582年)との人名にかなり近いものがあるようだ。相異点としては毛利鎮実が宗像側から大友側へ移っている点である。「戦史」の天文11年には大友宗麟12才であり小金原の戦いの天正11年には52才となる計算である。宗麟の子義統が大将となって鞍手の地に侵攻するのであれば、天文年間より天正年間の方がより理解しやすいのではないだろうか。が毛利鎮実のように形勢が宗像方より大友方がより有利になったとき、自分の身を有利な方に置いて考えるのが、この頃のならいとすれば天文11年にこの合戦があったと理解したほうが自然のようにも思える。文献上の人物の重なりを追うことにより、合戦の実年代を追おうとし試みたわけであるが、姓名両者が重なり合う人物はきわめてすくない。

ここで福岡県史第3巻中の「柳川藩」の頃に老練な奉行職として十時抵津が元和7年(1620年)に登場する。抵津は、官職名であり一族の内部で伝えることもあったかと思われるが、仮に同一人物とすれば合戦の時期は天文11年よりも天正10年の小金原の戦いの前後あたりに考えた方が妥当のようだ。(原・原)

註1 この項は、「福岡県史」第1巻下、福岡県刊(1962)および、伊東尼四郎編宗像郷誌中巻、名著出版復刻本(1973)、鞍手郡教育会編「鞍手郷誌」上巻名著山版復刻本(1972)を参照した。

註2 九州記 木版本 筑隆大竹山人春鹿編、肥水舎虚子校正とす。元禄癸酉(6年)肥前豊田山主舎虚貞子旭の序あり。巻1は九国傳記事に始まり巻18は如水清正鎮西傳事付九州一統事に終る。春鹿は山門塚大竹山二尊寺の僧なり。此書元禄庚申(13年)の刊本もあり。(福岡県史資料第6巻目解題による。)

註3 宗像軍記、元禄癸未被髪豊采日甫の題言あり。(1)宗像大明神の御事、(2)宗像大宮司高祖の事、(3)宗像大宮司清氏の事より、(27)氏貞逝去の事まで、凡27条を3巻とし、宗像氏歴代の事を記せり。此書元禄癸未の木版本あり。明治に去り史籍集覧に収めて活字本となる。(岡維第6巻目解題による。)

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -ⅠⅤ-

昭和52年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6街区29号

印刷 松古堂印刷

福岡市西区馬船寺町

九州縦貫自動車道関係  
埋蔵文化財調査報告

—XVI—

付 図

1 9 7 7

福岡県教育委員会

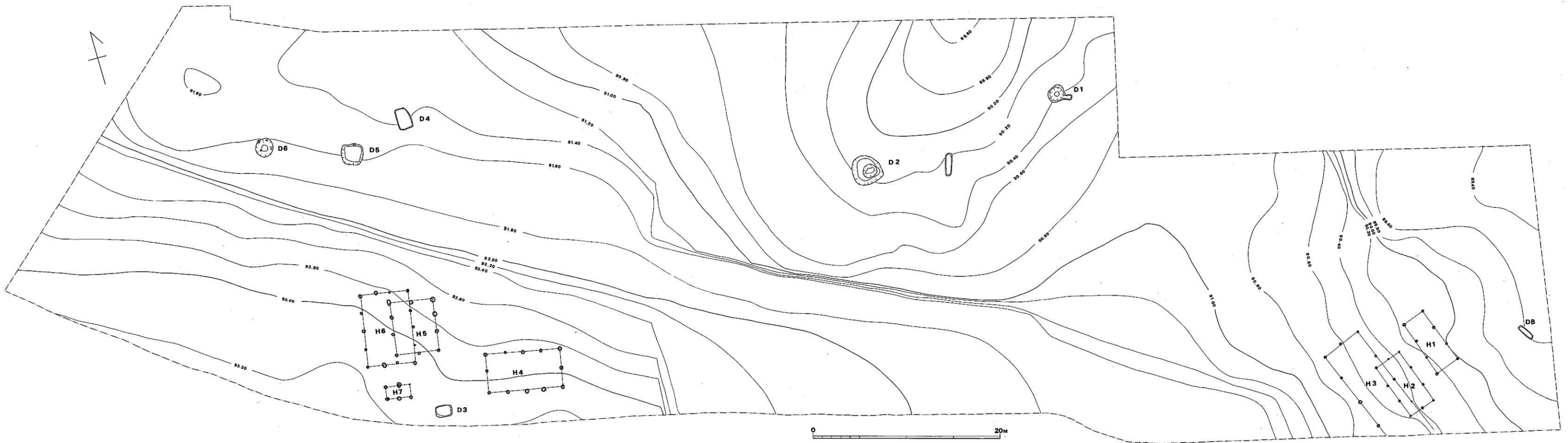


Fig. ① 遺跡遺跡地形図 (縮尺1/200)

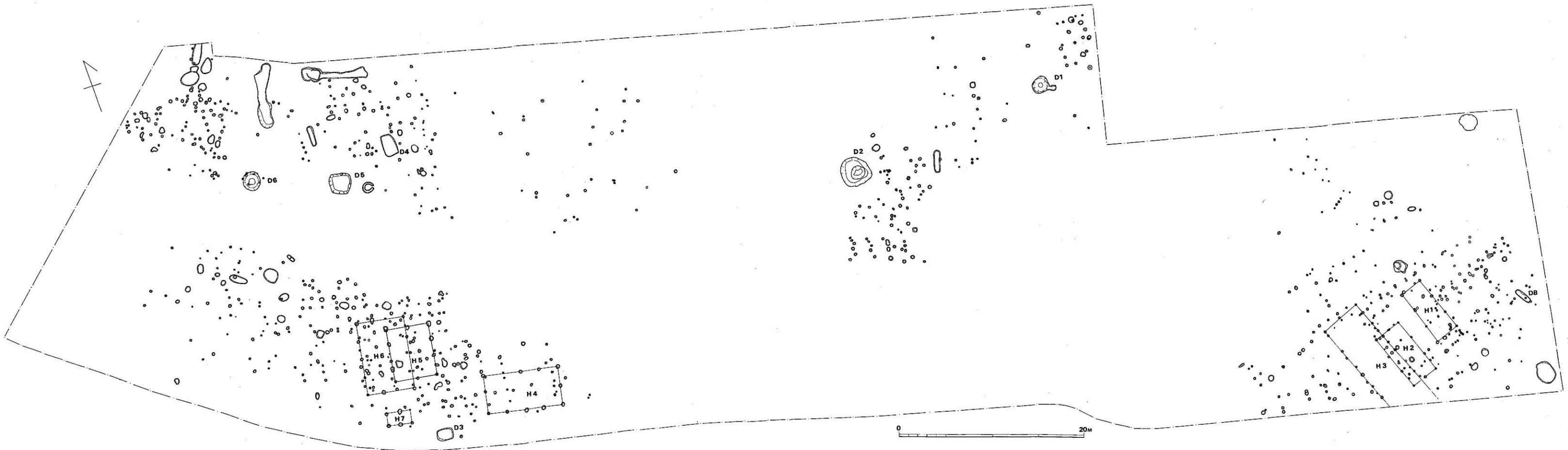


Fig. ② 遺跡遺跡全体図 (縮尺1/200)